
IS <インフィニット・ストラトス> ~ゼロの名を持つ天使~

ウツソ・エヴィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS >インフィニット・ストラトス< 〱ゼロの名を持つ天使〱

【Nコード】

N6547T

【作者名】

ウツソ・エヴィン

【あらすじ】

AC196年・再びの悲しくみじめな戦いの連鎖を止めるべく少年は再びゼロの名を持つ天使を使い、そして最後の攻撃によって少年は天使とともに散った。しかし少年が目覚めた時には・・・ISとガンダムWとのクロス小説です。更新は相当遅いかもしれませんが、ヒイロが変な感じになってるかもしれないのでぜひアドバイスなどありましたらよろしく願います。また作者は基本、アニメしか見てませんがほかの小説など参考にしつつ、原作も手に入れながら書きたいと思います。

設定&アンケート (随時更新 最終更新日11/23) (前書き)

この小説での設定です

設定&アンケート（随時更新、最終更新日11/23）

ヒロ・ユイ

現在16歳（つまり一夏より一歳年上）

この小説では漫画版のEndless Waltzから来たということ、リリーナに対して明確な好意を寄せている。またその関係で少し丸くなっているかもしれませんが。

できるだけヒロのイメージを崩さないようしたのでみなさまの意見、今後ともよろしく願います。

基本Wからはヒロとリリーナしか出ない予定です。

ゼロの設定

名称『XXXG-00W0 ウイングガンダムゼロ』

大きさ『白式』と同じくらい

装備説明

・ツインバスターライフル

ISを装着してても平行連結（つまりリーブラや大統領府を攻撃したアレ）で発射すると蒸発させるといった問題がある兵器。

そのためしばらくの間使用できない。（しばらくと言うのは後々わかる）

・マシンキャノン

両肩に内蔵された4銃身式機関砲。発砲時は肩口の装甲が展開し銃身が露出する。基本的に牽制や近接防御が主用途だが威力はシャルが使ったマシンガンと同等。

・ビームサーベル

ガンダムお決まりの装備・威力は『白式』の『雪片式型』より低い
がかなりのダメージが与えられる・

機体性能

- ・機動性は『白式』とほぼ同じくらい・ただし小回りが利く・
- ・防御は翼の部分でできるが絶対防御がないのでやや不安である・
(ガンダニウム合金でも)
- ・『ゼロフレーム』と言う技術で全身装甲でもなめらかな動きができる・

・武装、機体運用のエネルギーは自ら生み出すことでエネルギー切れで戦えないということはない

・シールドエネルギー容量は通常600、『白式』400に対して300と一番低い・そのため競技で戦うといい勝負になってします・
・『ゼロシステム』・・・発動するとヒイロが見てる景色はリーダー等の表示だけになり外の景色は脳に直接送られるようになる・また発動するとすべての武装のリミッターが強制解除され、ビームサーベルでも一撃で致命傷を負わせるようになるので普段は使用禁止・
他は原作と同等である

・Gコアと呼ぶのもできている・そのため実質これはISではない・しかし、Gコアは男性でも動かすことができる

・対G(重力)関係があまりISと比べてよくないためGが体にかかる・

・量子変換が起動時しかできない・また追加装備もできないので武装は上にあげたものと後々でてくるビームライフルのみである・

・バスターライフルが制御できない理由はエネルギージェネレーターの出力がMS時代の時よりも大きさを考えて計算してもは

るかに大きく、制御ができなくなったからである

オリキャラ

速瀬 はやせ
皐月 さつき

髪は菖蒲色のショートシャギーでアホ毛が一本（感情によって動く）。

目は大きめで若干釣り上がり、瞳は黄土色に近い茶色。言うなれば猫顔。

性格もまさしく猫で飄々としている。そしてメカオタで新しい技術には目が無い。ゼロカスは格好の獲物（笑）

母がギリシャ人と日本人のハーフであるため本人はクォーターである。

両親はすでに死別。父の親友で倉持技研の主任にしてブースターの権威、榎村 俊之に育てられた。よってファザコン気味で男性を無意識で榎村と比べてしまう。

背はヒイロと同じぐらいで胸はB。シャルとラウラの間ぐらい。美脚が自慢だったりする。

作者は飄々とした性格が分からないのでたとえるならこんなキャラって教えてください！！

専用機：ガンダムアテーナ

全身装甲のガンダムタイプ。ゼロカスより細身で、ゼロカスから得られたデータより全身にゼロフレームを、部分的にガンダニウム

合金を採用。コスト面によりガンダニウム合金は全身に使えなかったが徐々に全身に使えるように。

モデルは00シリーズのGNアーチャーまたはガンダムアルテミー。名前の元ネタはギリシャ神話オリンポス十二神が一、知恵・学芸・工芸の神アテナから。

アンテナは一对で後頭部にブレードアンテナを装備（GNアーチャーのソレ）。

マスク部はスリット（口）無し。

ボディは女性型。メインカラーは白とスカーレット。ワンポイントにイエロー。

背部に多方向加速推進翼を一对装備。形状としてはT字を斜めにしたというか 字型というか短く突き出たパーツの根元付近から長めのパーツが生える感じ。

長めのパーツは根元の機構で独立可動するので機動力は高い。

IS学園と倉持技研との共同計画『Gプロジェクト』の試作1号機。（のち世界公表でIS学園は中立のため倉持技研独自の計画となる。）

性能に関して機動性はブルーティアーズより高く、百式より遅い。エネルギー量は750と高め（ちなみに紅椿は800）でかなりの性能である。また『ガンダニウム装甲』によりシールドエネルギーによるシールドの強度が弱くできたので燃費がいい。

しかし、『Gプロジェクト』のオタクな研究員どもによってマスクにボイスチェンジャーと『エロかつこいいお姉さん』口調にする言葉使い変換機（特許申請中）がついている。

パッケージが存在するらしくそれはこの先明らかになる。

『武装』

新型複合兵装シールドガンブレード『烈斬』

ガンダニウム合金製小型物理シールドと同じくガンダニウム合金製高周波ブレード、五十二口径機関砲が一体化した倉持技研の最新作。

外見はエクシアのGNソードのシールドをサイズそのまま、ブレードを細身にしてその上に機関砲の銃身が乗る。ブレードと機関砲は独立しているので折り畳む必要はない。

シールド装備ボウガン型エネルギー砲『烈洗』

同じく倉持技研の最新作。

左腕に取付けるボウガン型エネルギー砲。連射は効かないが一発の威力はレールガンに、速度はレーザーに匹敵する。

ガンダニウム合金製物理シールドを表面に装備し、弓の部分はアテナが伴う梟の翼のイメージで未使用時には折り畳める。

取付け式なのでマニピレーターはフリーな状態。

モデルはGガンのライジングガンダムのライジングアロー。

ビーム発生デバイス装備型実体槍『アマノヌホコ天之瓊矛』

実体槍の刀身にビーム発生デバイスを内蔵。ゼロカスのビームサーベルからデータを引用している。

ビーム兵器はエネルギー消費が激しいので、刀身の根元にエネルギーを内包したカートリッジを六発入れるリボルバーを装備。

ビームの形状固定までは再現出来なかったので相手に突き刺して機体から信号を送り、ビームを射出する。一発につきカートリッジ一つ消費。リロード可。

機体アンケートの結果はラウラ編で登場予定なので楽しみに・

第01話 出会い（前書き）

初めまして・

ウツソ・エヴィンです・

いろいろ書いているんですが今後 バカテスとこれが主力小説になる予定です・

基本交互の更新となります・ので遅めです・

駄作かもしれませんが今後ともよろしく願います・

第01話 出会い

「確認する。シエルターシールドは張っているな？」

『き・・・貴様！！何を！？』

「シエルターは完璧なんだな！？」

『もちろんです。あなたたちの無力さを思い知りなさい』

「・・・・・・・・・・了解した」

そう言つて一人の少年が駆るゼロの名を持った天使から巨大な山吹色のビームが空から地上へと発射した。地上は爆風と土煙を立ち上げる。

続いて、2発目も発射。しかしすでにボロボロだった天使の体は左腕がもげてしまった。

だが地上に張られているシエルターシールドの強度は半減されている。それは超強力なビームがコンマ二桁まで狂いもなく同じところを狙っているからだ。

『やめろー！！ここには

・

がいるんだぞ！！』

通信で何かが入ってくるがそれでも少年の心は変わらない。

最後の攻撃を行うために発射体制に入る・・・地上からの攻撃を受けながら。

（さよなら

・・・俺もすぐにいく）

（ ）

心の中で天使を駆る少年とシェルターに囚われの少女は繋がっていた。そして二人の覚悟も・・・

そしてついに、天使は最後の攻撃を行い、それにより体は崩壊して少年とともにこの世界から消えたのだった。

（ここは・・・どこだ？）

彼が目を覚ました時、その光景は先ほどの戦場ではなかった。

（家・・・それも、旧文明のような感じた）

周りを見渡してみると、たんすや畳などがあり、視線の高さに少年はベットではなく布団で寝かされていると判断した。

「よかった。気が付いたんだな」

その時、襖が開き、ある一人の少年が現れた。年齢は今寝ている少年と同じぐらいだろう。

「・・・お前は・・・」

「俺の名前は織斑 一夏」

と少年たちは会話を交わした。一夏はただただ普通の会話だと思っているがもう一人の少年はそうは思っていなかった。目を窓に向けてみると明らかに今まで見ていた光景とは違っているからだ。

（ここはどこだ……。少なくともこの景色は見たことがない……。まさか）

「・・・織斑 一夏。今の年号と日時を教えてください」

と少年は起き上がりながら聞いた。そして少年は耳を疑いたくなるような衝撃の真実を聞く。

「いまは・・・西暦20XX年の3月1日だ」

（せ・・・西暦だと。俺はタイムスリップしたと言うのか・・・）

なぜなら彼が生きた時代はアフターコロニーAC196年。西暦なんてとくに終わってしまっているからだ。少年は普段顔には出さないタイプだが今回はあまりにも飛び過ぎたことで驚きを隠せなかった。

「だ・・・大丈夫か！？お前は俺が入試の帰りに家の前で倒れてた

んだ。今日はそれから4日経ってる」

少年の様子がおかしいと気づいた一夏はさらにそう言った。それを聞いた少年は今とはにかく情報がほしいと判断した。

「すまない織斑　一夏。新聞や雑誌、なんでもいい今の世界情勢がわかるものを持ってきてくれ。頼む」

「わかった今日の夕刊をポストから取ってくるよ。ついでになんか食べ物も用意する」

と言つて一夏は出て行った。少年は時計を見た。時間は現在午後4時、夕日が沈みかかっている。少年は目をつぶって考えていた。最後の戦いの事だ。少年は本来あそこで死ぬつもりだった。もし生きていたらそのまま彼女のもとへ行くつもりだったがあれで生きれるとは思ってもいなかった。なので向こうの世界に未練はない。だが・

（・・・あいつはどうなったか・・・いや、やめておくか。もう俺には関係のない話だ）

帰る方法はわからない、むしろタイムスリップなんてできるかどうかも分からない。少年はここでひっそり生きようと考えていたが・

（せめて、奴には礼をした方がいいだろう）

と考えた。少年の過去を知っているものがこの場において、なおかつ少年の考えが読めるのなら驚くところだろう。他人の事を考える少年の事を。だがこの1年で少年は劇的に変化した。

その時だった。外からものすごい爆音が聞こえたのは。

織斑 一夏は絶体絶命のピンチだった。家から出て、夕刊を取ろうとしたらいきなり空からミサイルが降ってきたからだ。幸い、何とか避けることができたがそれによって塀は壊れ瓦礫が体に当たり怪我をした。

「な・・・なんなんだ・・・」

上を見るとそこにいたのは顔を隠しているが・・・

（IS・・・）

IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』を装備した女性6人だった。

ISとは10年前、宇宙空間での活動を想定し、篠ノ乃 束によって開発されたマルチフォーム・スーツで現行の兵器をありとあらゆる面で凌駕する性能から国家の命運を左右する存在として本来の開発目的から外れ、名目上パワードスーツスポーツとして扱われているものだ。だが・・・

「織斑 一夏・・・『世界で唯一ISを使える男』よ・・・この世界の秩序のため、ここで死んでもらう!!」

そう、ISは女性しか使えないのだ。そしてそのため男女のパワーバランスが崩れ、現在は女尊男卑の世界となってしまった。そんなバランスを帰れるかもしれない存在が一夏である。なので本来はその存在を保護すべきなんだがまだそれがわかって4日で警備が配備できていなかった。しかも向こうが使うISは見たことがない。一般的に出回っている『打鉄^{うちがね}』や『ラファール・リヴァイヴ』でもない。黒いISだ。

一夏はボロボロの体で立ち上がりとするが先ほどの攻撃で体思うように動いてくれない。その間にISを装備した女性たちは量子変換で呼び出したマシンガンを構える。

だがその瞬間、一人のマシンガンが爆発した。

「きゃあああああああああああああああああああ」

女は爆発の衝撃で少し後ろに飛ばされた。

一夏は何が起こったのか分からなかった。そしていきなり体を持ち上げられた。そう、先ほどの少年が隠し持っていた銃でマシンガンの銃口を打ち抜いたからだ。それでマシンガンの弾丸に引火して爆発したのだ。そして抱えたまま走り始めた。

ここで少年の格好が最後に来ていた服装と同じ深緑のタンクトップにジーパンだとわかった。

「お・・・お前」

「一応、世話になったからな・・・あの空に浮かんだ奴はなんだ？」

「ISを知らないのか!？」

(IS・・・どうやらここは俺の知っている西暦ではないようだな)

少年はそれを悟ると後ろからマシンガンが飛んでくる。先ほどの5人だ。その後ろには少年にやられた奴がついてきている。ものすごいスピードで・・・

少年は逃げきれないと判断し、足を止め、一夏を下した。

(・・・武器は拳銃のみ。弾は6発、頭を狙わないと生き残れん)

そう思つて銃を構えるが、

「無理だ!! ISにそんな拳銃は効かない!!」

と一夏は言つた。少年はその反応から本当だと悟り、どうするか考えていた。その時緑色の丸い宝石が付いた青と白のブレスレットが自分の左手にあることに気が付いた。

「・・・なんだ、これは」

そして少年がそれを触ると・・・

『ACCESS』

と言う声が頭の中に聞こえ、そして体に粒子が纏わりつく。そして少年の姿はさつきまで少年が使っていた鋼鉄の天使になっていたのだった。全身装甲で覆われているそれは白青のツートン色で天使を髯髯とさせる4枚の白い翼、甲冑的な意匠を取り入れた本体部と、スマートなデザイン、そして両手には大型のライフルがあった。

『起動に成功しました』

と少年の耳から女の声の機械音が聞こえた。少年は何かを悟ったのか自分に起こったことに驚かず、そのまま翼を広げ空へと・・・敵の方へ飛んで行った。その時羽が舞ってまるで本当に天使が飛び立ったように思えた。

その様子を一夏はただただ見ることしかできなかった。

「ターゲット・・・ロックオン」

少年はそう言い、右手のライフルの銃口を先ほどの銃を破壊した奴に向ける。

「何故奴もISが使える！？使えるのは織斑　一夏だけではないのか！？」

先ほど少年にやられた女は焦りを見せ、急いで量子変換で武装を呼び出そうとするがその前に少年の銃口から山吹色のビームが発射された。その大きさは彼女らISを装備している人間一人分を飲み込むことができる大きさだった。そして弾速も速く、避けることができなかった。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ」

悲鳴をあげ、飲み込まれた女はビームが無くなるとそのまま地面に落下し始め、地面の道路にクレーターを作った。そしてISが強制解除された。頭からは血が流れていた。

「なんだあの威力は！！絶対防御を発動したにも関わらず突破されているだど！！オーギス3、オーギス4を回収して離脱しろ」

隊長らしい奴がそう言って部下はそのまま降下していった。

少年は自分を取り囲むような形で展開されている敵をみた。隊長以外の残り4人で囲まれているこの状況でも少年は冷静に分析をしていた。

（敵は囲んで一気に集中砲火・・・だが・・・）

少年は先ほどの両手のライフルを水平にし、そして発射と同時に自身が回り始めた。当然ビームも銃口と一緒に回転し始め、その円線上にいたISパイロットたち4人は・・・

「そ！！そんな！！」

「・・・ああああああああああああああああああああああああああああああああ」

先ほどの打ち抜かれた奴のようにISの絶対防御を貫いて一撃でそれも一瞬で4人を倒した。

（ば・・・バカな・・・あの動き、そしてあの反応に戦法・・・明らかに実践慣れしている）

隊長の女は近接用日本刀型ブレードを取り出す。このブレードは『

うちがね
打鉄
と同じものになっている。

「お前は何者なんだ……」

女は少年だった天使に向かってつぶやいた。天使はライフルをその左右の主翼にしまうと副翼の懸架アームのラック内に格納されるものを右手で取り出した。それは・・・

「ビームのサーベルだ!!」

棒を取り出し、構えると緑のビームが先から出てきたのだ。

ビームサーベル・・・この世界ではそれはあまりにも珍しすぎる代物である。女は恐怖を感じた。これだけ強力な武装を積んで何故エネルギー切れをおこさない・・・

「お前は……」

全身装甲で顔も覆われて表情を読み取ることができないが一ついえることは・・・

この少年は危険すぎる。今ここで自分の命と引き替えにしても倒さなければ……この男は女尊男卑な現在を壊す。そして……いずれ我々の計画さえも……

しかし、目の前にいる天使は明らかに格が違う。

「お前は何者なんだああああああああああああああああああああ
アアアア！」

女は一気に接近してブレードで面の要領で天使を斬ろうとするが、その剣さえもサーベルでいなし、そのままサーベルで切り払い、右足のブースターを破壊。続いて左足のブースターも刺して破壊した。

「クソッ!」

「……撤退しろ」

女はあの天使が通信してきたことに驚いた。

「俺はお前を殺そうと思っていない。だが、まだ続けるのなら……
……お前を殺す!」

怒気、覇気とも言つものが込められた声。さらにいつの間にか左手には先ほどのライフルが握られている。
女は本当に死の恐怖を感じた。

(殺される。ISの絶対防御さえも貫いてコイツは本当に私を……
・殺す)

気づいたら女は泣いていた。

「ひ……」

言葉にできない声を上げ、そして恐怖から逃げるように女は夕日の方向に逃げて行った。

「任務……完了」

少年はそつつぶやくと武装をすべてしまい、一夏のところへ翼を羽ばたかせた。翼を動かすたびに羽が舞うその様子はしつこく言うがまさしく天使だった。

「ん？」

少年の目・・・装甲で緑のレンズだがその目・・・ハイパーセンサーでは一夏の横に先ほどの刀を持ったISを装備した黒く長い髪の女が立っていた。黒髪の女のISは少年にはさっきとは違う形としか判断できなかったがその女が使っているISは日本の倉持技研が開発した第2世代量産型『打鉄^{うちがね}』であった。武者鎧のような形態をしていて機体カラーは銀灰色の性能が安定しているものだ。

（・・・任務追加了解・・・内容、敵機の撃退）

再びビームサーベルを出し、一気に接近した。狙うは相手のブレードを持つ手。だが黒髪の女は持っていた刀でビームサーベルを受け止める。

（・・・できる）

そしてマシンキャノンを放とうとした時だった。

「待ってくれ、その人は俺の姉だ。敵じゃない!」

と一夏は言った。少年は一夏を見てその後すぐに目の前の女に顔を向けた。いまだにサーベルと刀で押し合いをしている状態だ。

「そうだ。私の名は織斑 千冬。こいつの姉だ。剣を納めてもらえないか」

「……………了解した」

少年は剣を納めた。

「私もISを解除する。お前も解除してもらおう」

千冬はそう言いながらISを解除した。なので少年の方も解除して二人で見つめていた。

「あのさ……助けてくれて……ありがとな」

「……………気にするな。借りを返したただけだ」

少年はそう言つてすぐ千冬の方に顔を向けた。

「お前にはいろいろ聞かなければならないことが多い。私と付いてきてもらおう」

少年は少し考え、そして

「いいだろう。俺も確認がしたいと思っていた」

「待ってくれ！！最後に名前を教えてくれ」

一夏はそう言った。少年は再び顔を一夏に向け、こう言った。

「……………ヒロ。……………ヒロ・ユイだ」

ここにのちに関わるものすべてを守ろうとする男と正義感等のもの

は全く持ち合わせておらず、あくまで感情のままに、信じたもののために戦うゼロの名を持った天使とのコンビの出会いだった。

第01話 出会い（後書き）

感想 ・ こうした方がいい（特にヒロのセリフ） ・ 質問などありましたらよろしくお願いします

今回はゼロの性能実験の話です ・

今回の独自設定 ・

IS学園の入試日は私立同様2月にあったこととし ・ 夏は今中学生の設定 ・

ヒロはこの段階で16歳だがここではそのまま1年で入学とする ・

第02話 その名はガンダム（前書き）

ウツソです．

第02話公開です．

今日中に設定も上げますのでお願いします．

それと設定でアンケートを取りますので良ければ答えてください．

第02話 その名はガンダム

ヒイロが織斑 千冬について行つて着いた場所は『IS学園』と呼ばれるところだった。

『IS学園』は島一個が学校で世界各国からISの操縦者になるため、日夜学業とISの練習を行っているところだ。

織斑 千冬はかつて第1回IS世界大会『モンド・グロッソ』で総合優勝をし、世界最強となった。だがその彼女が先ほど見たのは圧倒的な戦いだった。そして最も大切な弟を守つたこの男が何者なのか調べようと思つてここまで連れてきたのだった。

時間はすでに午後8時。そして学校内の一室・・・テーブルとイスしかない部屋で二人は椅子に座り見つめあっていた。ヒイロの目の前には皿のみになったカツ丼があつた。

「さて飯も食べたことだし・・・先ほどの事だが・・・弟を守つてくれてありがとう。姉として礼を言う」

「・・・さつきも言つたはずだ。気にするな、借りを返しただけだ。それより今は情報がほしい。」

ヒイロはそう言った。なので本題に入るのがこの男に対しての敬意だと千冬は判断した。

「そうか・・・わかつた。まずお前の名をもう一回行つてくれ」

「・・・ヒイロ・ユイだ」

「ヒイロ・ユイだな・・・ユイ、お前はどこの出身だ？」

「ヒイロでいい。言いづらいだろ、俺はコロニー……この世界とは別のところから来た」

「なに？……どういうことだ」

ヒイロは説明した。自分が^{アフターコロニー}AC196年と言う人類が宇宙に住処を作っている時代から来たこと。

一年前から17mぐらいの人型機動兵器、^{モビルスーツ}MSで戦争したこと。そして戦争を終わらせ、すべての兵器をなくすための『完全平和主義』のために自分が戦って死んだと思ったならここにいたと……

「それを証明できるものは？」

「幸い、ゼロに記録が残っている。それを見ればいい」

そう言っただけヒイロは左手についたブレスレットを見せた。千冬にはこれがISに見えた。

その時ヒイロの顔が少し変わった。何かを感じ取ったようだ。

「ゼロ……わかった。俺からはこれがすべてだ。織斑 千冬……俺もお前に聞きたいことがある。それが聞けたらゼロのデータを開示できる範囲で開示する」

千冬は顔をしかめた。ヒイロの言葉はあまりにも飛び過ぎていた。だからこちらの情報を出す前に証拠を見たかった。だが先に情報を出さないと開示しないとヒイロは言った。その目はまさしくまっすぐな目をしていた。

（この少年……明らかに場慣れしている。それにこの目悪い奴ではない……信じてもいいかもしれん）

「わかった。この世界の事だな・・・」

千冬はこの世界について簡単に話した。ISとは何か。どういった組織が管理しているか。そしてここは何処か。ヒロはそれを目をつぶって聞いていた。

この世界では兵器がスプーツとして使われていることにヒロは驚きを隠せないところがあった。そしてISの開発者・・・篠ノ乃束に対して疑惑を持ったが今は考えないことにした。

「私の話は以上だ。お前の処遇については聞いたことを話して上の判断を仰がなくてはならない。その為お前の言うゼロはこちらで一時間預かるがいいな？」

「ゼロのデータ開示に関して俺がするのが条件だ。守れない場合はここでゼロを起動させて逃げるだけだ」

千冬はうなずき、携帯で連絡を取り始めた。そう今の主導権はヒロにあると言っている。何せIS6体に対して一人でも無傷で殲滅したからだ。さらにあのライフル・・・ツインバスターライフルの威力はISの絶対防御を貫き、大けがをさせるほどである。今は従うしかないのだ。たとえ自分でもヒロと戦ったら勝てるだろうがただでは済まない・・・あの時一瞬剣を交えただけでそう悟った。

「上との連絡が取れた。その条件を呑むとのことだ、ついてこい」

「・・・了解した」

学園の最深部にある研究室。ここでヒイロは今ものすごいスピードでキーボードを叩いている。そして次々と出てくる映像・・・かつてエピオンと戦ったこと、リブラを撃ちぬいたこと、MDのスコ・ピオンと戦ったこと、そして最後の大統領府の事が学校の教員・・・織斑 千冬とその補佐、山田 真耶、そして学校上層部の人間の目に映るたびに驚きの声を上げた。これでヒイロの言っていたことは真実だと言う事が証明された。さらに・・・

「な・・・なんですかこれ!!」

真耶がそう言ったのはヒイロが開示したゼロ・・・正式名『ウイングガンダムゼロ』のデータだった。

「どうした？山田先生」

「これは・・・ISじゃありません・・・ISコアとは全くの別物です。それにこの機体にはシールドエネルギーが搭載していますが別にしかも無限機関のエネルギージェネレーターがあります。この機体のシールドエネルギーは文字通り、シールドのみしか使いません。他のエネルギーがいるものはすべてジェネレーターから取っています。ツインバスターライフルも平行連結して撃つたらIS装備でも人を蒸発できます。機体性能は今の第3世代型と同じぐらいですが・・・」

「なに!!」

これには千冬も驚きを隠せなくなっていた。新たなコア・・・そ

れは世界に新たな革新を与え、本当に戦争になりかねないからだ。
さらにISごと蒸発できるライフルも同様だ。
真耶はさらに続ける。

「それにこれには絶対防御が備わっていません。その代り、全身装フル・ス甲は名称『ガンダニウム合金』って奴でデータだけ見てもかなりの防御性能みたいです。実弾兵器だとマシンガンなどはほとんど効きません。ですけど、ISにはない問題点がいろいろあるみたいです」

「そうか・・・」

「後・・・『Zoning and Emotional Ranging Omitted System』って言うのが開示されていないんです」

「悪いが、それは開示するつもりはない」

ヒイロはそう言い切った。そうそれこそ、ウイングガンダムゼロが最強として君臨していたもの・・・『ゼロシステム』だからだ。だからこれによって人生が狂わせた者がいるのも事実だ。だからゼロシステムの複製だけは避けなければならない。ヒイロはそう思っていた。

「そうか。では明日はアリーナでガンダムを起動してもらおう。但し私たちがISで武装したうえでお前が変な動きを見せたら容赦なく撃墜させてもらうからな。それまでウイングゼロは私が預かる。ただしお前の目の前で寝る。これでどうだ」

それを聞いたヒイロは当然の対応だと感じた。そして自分の目の届

く範囲でつていうのも納得ができた。だからここで逆らったところで今の俺に得はないと判断し、移動する千冬の後について行った。

翌日午前10時。ISアリーナは晴天の空の風で包まれていた。競技場の名のとおり円形のその空間はただ広いという言葉に尽きた。そしてヒイロはその中央にいた。そしてヒイロを囲むように教員がISを展開している。

ヒイロは彼女たちがISとの神経伝達の補助の為にISスーツというものを着ているのだがそのスーツというのがアーマーの付いたレオタードにハイソックスのようなものに対して疑問を持っていた。

（前の奴らの方が防御性能がいいように思えるが・・・）

「よし、ヒイロ。ガンダムを展開しろ。前にやっただろう。展開ができれば自由にアリーナ内を飛んでみる」

「・・・任務了解、作戦を開始する。ウイングゼロ起動」

ヒイロがそう言うのと再び体に粒子が纏わりつく。そして出てきたのは前にも見た天使。^{ガンダム}

ヒイロは一気に空へと羽を散らせながら駆け上がった。

「き・・・きれいですね。本当に天使の翼みたいで・・・」

真耶はそう言うが千冬にはそれが戦場を駆け抜けるものだと思うと

恐怖を感じた。

「あの翼自体がブースターなのか・・・データはどうなっている？」

千冬は真耶にそう聞いた。

「はい。ヒロくんは性能を完全に出し切っていますね。機動性と加速性も今の第3世代の中ではトップです」

「そうか・・・確かにこのスピードであの機動性・・・すさまじいな。ヒロ、聞こえるか？次はもうすぐ卒業する学生1人と模擬戦をやってもらう。ただしツインバスターライフルは使わない」

そう言うのとピットから『打鉄^{うちがね}』を使う女生徒が出てきて、ブレードを構えた。

「任務変更了解。これより、敵ISの撃退を行う」

そう言うのとヒロはビームサーベルを副翼から出し、一気に接近した。

ヒロにはすでに女生徒が自身の間合いに入っていたからこそその行為だった。

しかし、女生徒は自身のハイパーセンサーが急にアラームがなかったので驚いたのだった。

しかもかなりのスピードで突っ込んでくる。

「な!!」

女生徒は急いでブレードを振ったがヒロに受け流される

「読めているぞ」

ヒイロは反応しきれない状態の彼女にサーベルで連続斬り抜け攻撃を行い、羽を舞い散らせながら上へと切り上げていく。

そして最後に自身が回りながら彼女の上を取り、一気に唐竹切りをして地面にたたきつけた。その時点で彼女のシールドエネルギーが0になって目をグルグルさせて回っていた。

「任務完了！」

ヒイロはそう言つと地上に降り立った。

千冬はヒイロ自身の戦闘力も高いとこの時、確信を持てた。

「よし、これで終了だ。ガンダムを解除してしばらく前の話を聞いた部屋で待機している」

「・・・わかった」

「お前の処遇が決まった」

千冬はそう言つて再びヒイロと話した部屋に来た。ヒイロは閉じていた目を開き、顔を千冬に向ける。千冬が席に着くとヒイロは普段と変わらない感じで言った。

「俺の処分はどうなった？」

「お前が異世界からやってきたことやガンダムのことを考慮した結果、お前にはここの生徒として来年度からいてもらう」

この回答に対してヒイロは予想の範囲内だった。

（国家のIS保有数や動きなどを監視する委員会。IS条約に基づいて設置された国際機関。国際IS委員会には報告しない気だろう。もし、報告する場合は脱走するつもりでいたが・・・）

「・・・国際IS委員会にはどう言うんだ？」

「元紛争地域の少年兵だったがある日本人に拾われ日本国籍を所得、保護者が事故で死亡後、偶然ISが操縦出来ることがわかり今に至ると。幸い前例があるしな。ガンダムについては学園の訓練機のコアを基に造ったことにする。政府への根回しもしておく」

ヒイロは顔色一つ変えず聞いて

「すべて隠すつもりか？」

「そうも言えん・・・お前が与えてくれたガンダムのデータでおそらく学園内で開発が始まるだろう。Gコア・・・お前のガンダムのコアと『ゼロシステム』はしないつもりだ」

ヒイロにとってそれは好都合でもあった。開発が進まなければ自身のガンダムの整備ができないからだ。だが先ほどの言葉で疑問があった

「前例とはなんだ・・・？」

そうヒイロが聞くと千冬は少し顔を暗くした。普段表情に出さない奴だとヒイロはすでに悟っていたのだが、このような顔をしたので少し驚いていた。

「……弟がいただろ……。道に迷った挙げ句受験会場を間違え、そこにあつたISに触れてISが操縦出来ることがわかつたしまつたんだ。おかげでこの間、命が狙われることになった。そしてこれからも……」

「……織斑　一夏か……」

ヒイロはその名を口に出した時、初めて一夏を見たときの映像が脳裏を横切つた。その時、一夏が見せる目に宿る信念を感じ取つた。どんな信念かはまだわかつていなかったがああの目はまさしく……

「あいつが強くなってくれば私としても心配事が減る。だが先日、もしお前がいなかったらと考えると……」

そう言う千冬は体を少し震えていた。いくら強い、凜々しい、厳しい、鉄仮面な女でも身内、それもたつた一人の弟が死んでしまうと考えると恐怖を感じた。今までは何とかこらえていたがここに来た前の一件でその恐怖が現実のものとかし始めていた。

ヒイロはその様子を見て、椅子を立ち上がり、ドアへ向かうとする。そしてドアの取っ手を掴んだ。

「……どこへ行く!？」

千冬は立ち上がり怒鳴つた。ヒイロは澄ませた感じで答えた。

「……………織斑　一夏のところだ」

「な!!」

「奴には四日間世話になった。それに、奴からリリーナと同じ強い意志を目から感じた」

ヒイロを再び人に戻した人、完全平和主義を唱え矛盾しながらもそれを成し遂げようとしたリリーナ・ドーリアン。その彼女と同じ目を一夏はしていた。それは一夏が関わる全ての人を守り抜きたいという強い意志だった。たとえ戦えなくともせめて、家計や違うところで守ろうと言う意志だった。

ヒイロはそんな一夏に興味を示したのだ。

「……奴の生き様が見たくなった。今の戦争のないこの世界に俺のような兵士はいらない。なら、この世界で俺がしてやれることはこれぐらいしかない。……………俺がお前の弟、織斑　一夏の護衛をしてやる。それに……………」

「それに……………なんだ？」

千冬が問うとヒイロは鼻で少し笑い、

「アイツはどこかデュオに似ている。うまくやっていけるだろう」

デュオ・マックスウェル。ヒイロと同じガンダムのパイロットでヒイロと一番行動が多かった人物だ。ヒイロにとってデュオは一番の戦友と言ってもいい節があった。

「俺の入学手続きは“一夏”と同じところに送ってくれ」

そう言うとヒロは部屋から出て行った。

千冬はただただ呆然と立ち尽くしていたが……

千冬は自身の心に天使が舞い降りた感じになっていたのだった。

「ヒロ！！どうしたんだよ！？千冬姉えについて行ったんじゃないのかよ？」

ヒロは再び織斑家に来ていた。インターホンを押すと一夏が出てきてそう言ってきた。

「スマン。そのことなんだが、俺もお前と同じIS学園に通う事になった」

「そ！！そうなのか！？」

「ああ。だが今、俺には家がない。それでお前の姉が学校が始まるまでここに住めと言われてな」

「いいぜ！！一人で寂しかったんだよ。お前がいてくれたら楽しい日々になりそうだ！！」

そう言って笑う一夏に対してヒイロは

（やはり、デュオに似ている。フッ・・・）

と思い目をつぶって微笑した。

「ヒイロ？」

「・・・問題ない、ただの考え事だ。おそらく学校でも世話になるだろう。よろしく頼む、織斑 一夏」

「俺のことは一夏でいいぜ。ヒイロ」

「そうか、なら一夏。世話になる」

「おう！ー！」

そう言って二人は学校が始まる約1ヶ月間同じ家で生活した。

一夏がまずやらなければならぬことは・・・ヒイロのずさんな食事を治すことだった・・・

第02話 その名はガンダム（後書き）

うん・・・

今回は波紋が呼びそうですね・・・ヒイロの言動と千冬の件で・・・

感想等よろしく願います．

ちなみにヒイロの戦闘でやった攻撃がイメージできない人・・・『ガンダムVSガンダム NEXTPULS』と言うゲームのゼロカスタムの下格闘ワザだと思ってください。

第03話 クラスメイトは全員女（前書き）

・ バカテス先に書かないといけないのにこっちを先にやってしまった・

アンケート結果は後書きに

第03話 クラスメイトは全員女

織斑 一夏は現在窮地に立たされていた。

「……………」

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームはじめますよー」

と、ここで先生がきてそう言ったがこの一年一組の生徒達は全員無言だった。

「え、ええと、私はこのクラスの副担任になりました。山田 真耶です、皆さん一年間よろしくお願いします」

そう言った真耶のイメージは、身長はやや低めだが胸は大きい、服のサイズが合っていないせいもあってだぼつとして本人が余計に小さく見えてしまっている。かけてる黒縁の眼鏡も大きめなのか、若干ずれてる。一夏はもしかして自分より年下って思ってしまった。また全員が無言で反応はなく、真耶は涙目になっていたのだがなんとか気を取り直した

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと……………出席番号順で」

一夏にはそんな余裕はなかった。

もはや緊張を通り越して背中から変な汗が滝のように流れている。もうシャツが背中にくっついてるぐらいだ。

原因は彼の高校デビューを飾ろうとしている今日初日。クラスメイ

トは一人を除いて女子しかないからである。
傍から見た男子はとても羨ましがるだろうが

（これは・・・想像以上にきつい・・・）

一夏は逆だった。周りがほとんど女性でその空間に耐えられないのだ。

不意に窓側の席の女子を見る。そこに座っているのは6年ぶりに再開をした幼馴染の篠ノ之 箒である。一夏はそんな幼馴染にアイコンタクトでSOS信号を発信する。

（ほ・・・箒）

そうすると箒は目をそらし、外を見始めた。

一夏は落ち込みだした。こうなると頼れるのはもう一人の男にして一ヶ月前から知り合い、仲良くなったって言うていいのか一夏には分からなかったがつるむようになった同じ男子の制服を着ているヒイロ・ユイしかない。

だが、ヒイロの席は一夏の真後ろなのである。この状況で後ろを向くのができないので視線が合せられないのだ。

「・・・くん。織斑 一夏くんっ」

「は、はい!？」

「あ、あのね。大声だしてごめんね。お、怒ってる？怒っているかな？自己紹介、『あ』から始まって『お』の織斑くんなんだよね？自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

うるうる目をしている真耶に一夏は焦った。

「いや、あの、そんなに謝らないでください。・・・ってか、自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよ！」

一夏はひたすら真耶に落ち着かせるようにそう言つと真耶は顔をあげ、一夏の手を握り嬉しそうにした。

「えーっと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします」

席を立ち、一夏はそう言った。だがそれで終わらせてくれないのがこのクラスの女生徒たちである。『もつといろいろと聞きたいな』オーラが全開で自己紹介が終われない状況になっている。

（くっマズイここで黙つてると『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう！！）

そう考えた一夏は呼吸を一度とめ、そして再度息を吸い言い切った。

「以上です！！」

がたたつ。と、ずっこける女子が多数でた。一夏はええ！！と驚いたがそんな余裕もパンツ！というす千冬が出席簿で思い切り叩いたことでなくなった。

「げえっ、関羽！？」

パンツ！と再び爽快な音が聞こえる。発信源はもちろん一夏の頭

からだ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

さつきとは違って淒く優しい声で千冬は真耶に話す。その様子をヒイロはただただ見つめていた。

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・・・・・・」

（さつきの涙声は何処へ行った・・・）

と数人がそう思った。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

と矛盾したと言った千冬。少しの間沈黙が続き・・・そして

「キヤ ！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

と興奮して暴走し始めた。さすがにこれにはこんな経験がないヒイ口も驚きを隠せなかった。

きゃいきゃいと騒ぐ女子たちを、千冬はかなりうつとうしそうな顔で見る。

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「きゃああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

と暴走してとんでもないことを発するクラスの女子。ヒイ口はただただ呆然として、

（・・・こいつらの言動が理解ができない）

と思ってしまうのであった。確かにヒイ口は一般教養はあることはある。かつてリリーナと同じ学校に行っていたのだから。しかし、このような経験は初めてであったし、またヒイ口自身どこか一般的な部分が欠落していることからそう考え付いたのだった。

一方、千冬は一夏に近づき話し始めた。

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パンツ！

本日3度目の出席簿アタックによって一夏の頭が叩かれた。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬと言われているが・・・彼の脳細胞はかなり死んだことになる。

「織斑先生と呼べ」

「・・・・・・・・はい、織斑先生」

「え・・・・・・・・？ 織斑くんってあの千冬様の弟・・・・・・・・？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して・・・・・・・・」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

と無謀な欲望を言っているが千冬はそれをスルーして自己紹介を進めていくように指示した。この教室の席は予めランダムで決めたので名前の順ではないのだ。
そして・・・

（俺の番か・・・）

ヒイロは立ち上がり前を見て

「・・・ヒロ・ユイだ。・・・。。。。。。よろしく」

と言って座った。

え・・・と女子たちはもつと話を聞かせてと欲ったの反応だった。
あまりにも短すぎて副担任の真耶もつい

「えっと、以上ですか？」

と言ってしまった。だがヒロはそのまま

「ああ」

と答え、再び目を閉じようとする。

一夏が後ろを振り向きヒロにもの申した。

「ヒロ・・・もう少し愛想良くする事は出来ないのか？」

「。。。。。。これが俺の普通だ。それより一夏・・・」

「なんだ？。。。。。。いいつ！！」

ヒロが忠告する前に後ろから本日4発目を喰らい、そして「次！
！」と言われた。

そして

「さあ、SHRは終わりだ諸君には半年でISに関する基礎知識を
覚えてもらう。良いな、良いならば返事をしろ。良くなくても返事
をしろ！！」

と千冬が言って初日のSHRが終わった。

一時間目が終わり、一夏はかなり焦っていた。一般教養・・・つまり数学や物理などは一夏はできる方である。元々彼は成績はいい方だった。だがISに関しての知識は男だった故になく、さっきの授業である『IS基礎理論』についていけなかった。

また一夏は同時につかれていた。男子2人を見るために上級生までがここまで来ていて、なのに一切話しかけようとしなかった。かたたくてもかけにくい空気が立ち上っていたのだ。

（誰かこの状態から助けてくれ）

しょうがないからヒロに話しかけようと、そんな時だった

「ちょっといいか」

一夏のそばまで近づき、話しかける少女がでた。

ヒロはずっと本を読んでいたのだが目を声の方へ向け確認をした。そこには、髪形を緑色のリボンでポニーテールにした女が立っていた。

（篠ノ乃 第・・・IS開発者、篠ノ乃 東の実妹にして一夏の幼馴染か）

ヒイロは前に篠ノ乃 束に関して調べた際にハッキングしてみた顔と同じなのですぐにわかった。

「え？」

と一夏が答え、2人は教室から出て行った。

ヒイロは2人についていくため、教室からでた。ヒイロの任務は一夏の護衛。このIS学園ならまだマシなのだろうがそれでもヒイロは護衛をしていた。

一夏の生き様を見届けるために。

ヒイロが廊下を歩いて一夏たちについて行こうとするとヒイロ何かを感じ取った。

（つけられている・・・）

ヒイロはどうするか悩んだ。が時間を見るとそろそろ戻らなければ自分も千冬のお仕置きが待っている。なので捕まえず戻ることにした。

それに・・・

（奴からは殺気を感じない。おそらく・・・学園の人間だろう）

とターゲットがあくまでも自分でまた殺気を感じないのでほおつて置くことにしたのだった。そうしてヒイロは教室へ戻って行った。その様子を・・・

「へえ」私の尾行に気づいてた上での放置プレイなんて・・・ヒ

イロ・ユイ。侮れないね」

と学園最強はヒイロの後ろ姿をみながらそつつぶやいたのだった。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、その枠外のISを運用した場合は、刑法によって罰せられ」

すらすらと教科書を読んでいく真耶。だが一夏の方を見てみると全くついて行けていない。なぜなら、本来なら入学前の参考書をちゃんと読んでいないといけないところヒイロと一緒にやった家の掃除のさいにごみとして捨てたからだ。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

そんなこともつゆ知らず真耶は一夏に訊きに行った。

「あ、えっと………」

一夏は開いている教科書に視線を落とし

「先生！」

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。流石先生だ。だがそのプライドは次の一言でぶっ壊れる。

「殆ど全部わかりません（泣）」

「え……………ぜ、全部、ですか……………？」

真耶の顔が困り度百パーセントで引きつりさらに目がつるつるし始めた。

「え、えつと……………織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す真耶だが周りの女子たちは
シーン……………

と何の反応も示さない。

「……………織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬が一夏に近づきながら尋ねた。

「古い電話帳と間違えて大掃除の際に捨てました」

パンツ！

本日6度目（5度目は教室に入る際に屋上にいつていたので遅れたためである）の攻撃を受けてしまった。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者……………まで、大掃除？ユイ！

「お前は参考書どうした？」

「やな予感……と言うものか千冬はヒイロにも聞いた。
ヒイロは平然とした声で

「この間、一夏が作ったラーメンの汁に浸かったから大掃除に捨てた」

千冬はヒイロの頭に出席簿アタックをしようとするがヒイロはそれを右手で受け止めてしまう

「ほう……」

感心したような声を出す千冬。だがヒイロが千冬を見た瞬間に左手で脳天にチョップがきまってしまった。

「があー!!」

ヒイロは彼女の全力全開の威力を脳天にくらった。（ちなみに千冬の全力全開はヤヴァイのだがそれはまた先の話で）

いくら超人的なヒイロでも予想外で思わず声を出してしまった。

ヒイロはこの時初めて悟った。『こいつ……俺よりでき……』と

「あとで二人とも再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「いや、一週間であの分厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「・・・・・・・・はい。やります」

「・・・・了解」

一夏とヒイロはそう言うしかなかった。
ちなみにヒイロは2日でこの“電話帳”を覚えたのだった。
また、MSを使っていたヒイロは言葉の意味が分からなくてもなんとなく理解できていたと一夏は後で知った。

「ちょっとお二人とも、よろしくて？」

「へ？」

一夏がヒイロにさっきの授業の内容を聞いていた時だった。
地毛の金髪が鮮やかで、透き通ったブルーの瞳の子がややつりあがった状態でこちらを見ていた。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・・・・・・どういつ要件だ？」

と一夏は普段通りの返答をした。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですからそれ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

一夏は正直に答えた。事実本当に一夏は彼女が誰か知らなかった。そうすると相手は、さらに男を見下すような眼で答えようとしたがヒロが先に答えた。

「イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットか」

「あら、私の事を知っているのかしら？まあ、当然ですわね。このイギリスの代表候補生にして入試主席であるわたくしの事は知っていて当然ですわね」

とても自分の鼻にかけたような話し方。典型的の女尊男卑の現代女子のような感じだった。

と言ってもすべての女性がそう言うわけではない。特に日本に至っては女性はそこまで偉そうにしていなかった。それはきっと日本の文化の影響なのだろう。

しかし海外ではこれは当たり前前になっているのであった。まあ・・・ここまでの子はいないかもしれないが・・・

「なあヒロ、代表候補生ってなんだ？」

がたたっ！聞き耳を立てていた女子数名（セシリアを含む）がずっこけた。ヒロはそんななお構いなくその様子を見ていた。立ち直ったセシリア・オルコットが反応する。

「あ、あ、あ、あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

すごい剣幕だなくと一夏は思っているがそんなのお構いなしに

「おう。知らん」

と言い放った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セシリアは絶句して、そのあと極東の島国とか、テレビはないのかとか言い始める。

その間にヒイロが一夏に説明してやった。

「・・・代表候補生は国家代表IS操縦者の事だ。こいつらは実戦データの取得や操縦技術の向上を目的として国から専用機が与えられる」

「へーそうなのか」

それに反応したのか、セシリア・オルコットは胸を張って言い始めた。

「そう！いわばエリートなのです。本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを一緒にすることは、奇跡そう幸運なのですその現実を、しっかり理解していただける？」

「そうか。ラッキーだな」

一夏は、無意識だろうけど皮肉を言ってしまった。いや、もしかすると本心なのかもしれないが・・・

「あなたたち、馬鹿にしていますの？」

セシリアはそう言った。

皮肉が言われたことがないセシリアに言わせてみればそれは腹立たしいことだったのである。

「大体ISについて何も知らないのによくこの学園に入れましたわね男でISを動かせるというから少く知性を感じさせるかと思っただけ期待はずれですわ。まあ、わたくしは優秀ですからあなたが泣いて頼んできたら・・・教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？IS動かして戦うってやつ？」

「それ以外にありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。ヒイロは？」

「俺は卒業した生徒会副会長なら倒した。・・・教員とは戦っていない」

ヒイロはガンダムの性能実験の際、瞬殺した女性は現在空白の生徒会副会長。実は彼女教官並み（と言っても教官の中では下の方）の強さがあると言われた人で現会長と同じぐらいの強さと言われるほどだった。

現生徒会長の強さがどれほどか分からないが教官並みの元副会長を

倒したヒイロは確実に強い部類だった。

「わ、わたくしだけと聞きましただけが？」

「女子だけってオチじゃないのか？まあ・・・アレは倒したって言うのか・・・」

一夏が倒した教官っていうのは真耶だった。彼女は教官の中では上の方なのだが相手が一夏だったのであがり症がある彼女は上がってしまい一夏に向かって突っ込んだところを回避され壁に激突。そのままばたんきゅうしてしまったのだ。だから倒したっていいのかわからないのが現状だった。

「つ、つまりわたくしだけではないと・・・・・・？」

「・・・そう言う事だろう。時間だ、セシリア・オルコット。間もなくチャイムが鳴る」

ヒイロがそう言うとその時丁度チャイムがなった。セシリアは苦虫を噛んだような顔をして

「くっ・・・、話はまた後で。逃げないことね！よくって!？」

と負け犬なのかやられ役のようなセリフを言いながら自分の席に戻っていった。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

次は千冬が担当らしく、教壇に立つと授業を始めようとする
が何かを思いだしたようで

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決
めないといけないな」

と言い始めた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会
の会議や委員会などへの出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみに
クラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今
の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何
か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで。自薦でも他
薦でもいい。誰がいるか？」

そう言うとき女子たちは誰にするとワイワイガヤガヤ騒ぎ始めた。そ
して、

「はいっ、織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いまーす」

と女子たちが言い始める。彼女たちとしては学校で唯一男がいるク
ラスなので一夏にやらせて士気を盛り上げようと考えてた。

「私はヒロンを推薦する」

「・・・ヒロン・・・」

ヒロンがそう言った子の方を向いた。その子は細目をしているがの

ほんとしていて制服は袖をダボダボにした長めのを着ている。

「・・・布仏 本音、それは俺のことを言ってるのか？」

布仏 本音。ヒイロは先ほどの自己紹介でクラスの全員の名前も憶えていた。

ちなみにセシリアはハッキングとかせずにヒイロが一夏の家でこの世界の情報を集めた際にでてきた。代表候補は基本秘匿なのだがイギリスは宣伝も兼ねてセシリアの名前を挙げていたのだ。それはさておき本音は

「そっだよ。だめだった？」

と泣きそうな顔で言ってきた。

ヒイロは少しだけ溜息をついて、そして

「・・・好きにしろ」

と言った。

「やった〜!!」

「あ、私もユイくんを推薦します!!」

と本音が喜びだした途端にヒイロを推薦する声が上がりはじめた。

「他にいないのか？居なかったらどちらかがクラス代表になるが」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

千冬がそう言っただけで決めたときに待ったが入った。言っただけは、机を思い切り叩いて立ち上げたセシリアであった。彼女の顔には納得がいかないと言う顔をしていた。

「男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ！！ このセシリア・オルコットに、そんな屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか！？ 実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては

」

とかなりの暴言を言われさすがに一夏は切れた。

「イギリスだって島国だろ。それに大したお国自慢ないだろ世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

「なっ……！！ あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を馬鹿にしますの！？」

と言われて一夏が言い返そうとしたときにヒイロがそれを手で制した。

一夏はそれをみて驚き発言を止めた。

「お前のその偏ったものの見方ではいつかその身を滅ぼすぞ」

と静かに力強く言った。

ヒイロの声に場の空気が一気に変わり、静かにそして重い空気になった。

「で・・・どうするんだ？」

と一夏はセシリアに聞いた。そうするとセシリアは指を一夏に刺し、

「決闘ですわ！」

と言った。

セシリアはかなりご立腹でまた一夏も覚悟を決めた顔をしている。
決闘を受ける気なんだろうとヒイロは悟った。

「おお。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい！」

「言っておきますけどわざと負けたりしたらあなたを小間使い・・・
・・・いえ、奴隷にして差し上げますわ！」

「好きにしろよ。で、ハンデはどのぐらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいかなーと」

それを聞いてクラス中に笑いがおこる。笑っていないのは箒と本音
ぐらいだ。

「織斑くんそれ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんて大昔の話だよ？」

と女子たちが大声で笑いながら言う。だがさらにヒイロが言った。

「お前たちのその考えも身を滅ぼす元になる。・・・俺がここでお前たちの顔を殴ろうとしたら止めれるのか・・・」

それを聞いて女子たちは笑うのをやめ、ぞつとし始めた。

ヒイロの言う通り、ISを持っていない今の自分たちに体力的に男子に勝てないのだから。

しかし、セシリアと一夏では明らかにセシリアの方が格上でもあるのも事実であった。

「・・・じゃあハンデがいい」

「ええ。そうでしょうむしろわたくしがハンデをつけなくては、いけないくらいですわ」

「さて、話はまとまったようだ。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、ユイはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬は手を二回叩き授業を開始された。

ヒイロは思う。

（ここでこの考えを変えさせなければこいつらはいつかひどい目にあうだろう）

油断・・・それは最も戦いにおいてしてはいけないことである。

ISが兵器に近い存在である以上、その油断ひとつで大けがをしかねたない。

ヒイロはここで女性が優れている・・・強者ではないと言う事を・・・人類すべてが弱者であることを示そうと思ったのだった。

第03話 クラスメイトは全員女（後書き）

アンケート結果は

会長7

リリーナ9

千冬5

本音1

でリリーナになりました！！

これにはかなりの賛成、反対意見がありました。ですが一番票が多かったのでリリーナを出す方向で行きます。

リリーナがですのは相当先なのでそれまでまってください

また投票があつたキャラ、会長、千冬、本音に関してヒイロにある程度の好意、または恋愛感情を出します。なのでそのあたりの見せ場も作れるよう頑張りたいと思います。

感想などお待ちしています。

また、ヒイロの言動が変と思われた方がこの部分をこうした方がいいと教えてくださすとうれしいです。

第04話 ヒイロの天敵・・・その名は（前書き）

今回はヒイロのイメージが壊れるかもしれませんがギャグパートに近い話なのでお許しください。

また、新たなアンケートを提示しましたのでぜひ設定、あるいは後書きを読んで書いてください。

第04話 ヒイロの天敵・・・その名は

「ああ、織斑くんたち。まだ教室に居たんですね。良かったです」

「はい？」

一夏とヒイロが帰る用意をしている所に副担任の真耶が書類を抱えて教室へとやって来る。

その駆け寄る様子がいかにも小動物チックで真耶はマヤマヤとか言われ人気が高い。

「えつとですね、織斑くんの寮の部屋が決まりました」

そう言つて差し出されたのは部屋のキーと部屋の番号が書かれた紙きれ。

ここIS学園は全寮制で全ての生徒が寮での生活を義務付けられている。国防の要となるIS操縦者となると、学生とはいえ将来有望であれば学生の頃からあれこれ勧誘しようとする国がいてもおかしくない。最悪、誘拐されたり命を狙われたりする可能性だってある。この全寮制はそう言つた危険から護るための物でもある。

しかしその寮も当然一夏とヒイロを除けば女子しか居ない。そして全員が相部屋。だから一夏たちはそう言つた関係で準備が整うまで一週間程は自宅からの通学という予定の筈だんだんだけ・・・。

「俺の部屋って決まってるじゃないじゃなかったんですか？」

「それが色々と事情がありました。一時的ですが部屋割を無理やり変更したらいいんです。それに、織斑君もいやでしょ？家に帰ってテレビ局の人に詰め寄られるのも」

一夏はそれを聞いて

（ああ、確かに。多分今日は玄関の前で『入学初日はどうでしたか？』とか『IS学園に入学した今のお気持ちは？』とか質問されるんだろうなあ）

と思った。ヒイロとしてもここ数日、テレビ局の人間が来ていたの
でめんどいと思っていた。

「それとユイくんは申し訳ないんですが・・・部屋数の関係で・・・」

この言い回しでヒイロは自分にはしばらくの間部屋がないと悟った。
なのでヒイロは

「・・・気にするな。野宿すればいい」

「いえ！！ちゃんと場所がありますよ！！ただ研究室で寝てもらっ
ことになりますので」

と真耶はヒイロの言葉に対して驚きながら訂正した。

ヒイロがいきなり野宿と言われてすごく焦ったのであろう。

「そう言う訳で、一ヶ月もすれば2人での部屋が用意されますから、
しばらくは我慢して下さい。後、もしものの時の簡易ベットも用意し
ますので」

もしも・・・この言葉は後々に意味を成してくる。だが今は聞き流
している。

「そうですか。仕方ないですね。でも荷物とかの準備とかありますんで今日は帰っていいですか？」

一夏としては流石に着替えも無しとかは辛いし最近の若い男子は色々が必要な物だってある。携帯電話とか、歯ブラシとか後、大きな声では言えないようなものとかだ・・・。

また、ヒイロも家に着替えを置いてきているので取りに行く必要があった。最悪はこのまま過ごしても本人は気にしないが・・・

「あつ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。有り難く思え」

と突然現れた千冬はそう言う。今日は何発も叩かれた所為か声を聞くだけでビクリと身体が反応してしまう一夏であった。

「ど、どうもありがとうございます・・・」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「十分だ」

ヒイロは問題ないようだが一夏は顔を引きつっていた。娯楽がないのはつらいものがある。そう思っているからであろう。

「じゃあ、時間を見て部屋に行って下さいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用の食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いま

すけど・・・えっと、その、織斑くんたちは今の所使えません」

「え？なんでですか？」

一夏は大の風呂好きだ。本人としては大浴場に入りたいのだがダメな理由が思いつかなかった。

「・・・一夏、今の大浴場は女子がいる。一緒に入りたいのか？」

「あー・・・」

ヒイロの言葉を聞いて『そうだった。ここ女子しか居ないんだった。なら男子用の大浴場なんて必要ないよな』っと一夏は思った。

無論、男子である一夏、ヒイロが女子と一緒に風呂に入るのはいくら男に飢えたIS学園の女子でも許さない。だが・・・

「おつ、織斑くんっ。女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、駄目ですよっ！」

真耶の妄想は爆発していた。

「い、いや入りたくないです」

一夏はどんな目に遭うか分かったものではないので否定した。もちろん一夏も男である以上、興味は無いのかと聞かれれば当然あると答えるが、その代償が命となるとやはりNOと答えるのだった。

「ええっ？女の子に興味無いんですか！？そ、それはそれで問題の様な・・・」

「・・・・・・・・山田教諭、少し落ち着け」

とヒロまでもが先生である真耶にもの申す事態に発展している。ちなみに、ヒロは『先生』とは言わず、『教諭』と言っている。これはヒロの性格上、先生と言うのがなんとなく変な感じがしたのだろう。千冬も何回も注意したがまだマシだと判断して放置した。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、ユイくん。ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃ駄目ですよ」

校舎から寮まで50メートル位しかないと言うのにどう道草をくえというのだろうか。

IS学園では各種部活動、ISアリーナ、IS開発室など様々な施設・設備があるのだが、一夏はもう日が暮れるしそんな体力は残ってはいなかったので直ぐにでも休みたく、寮に向かったのだった。ヒロはその後、一緒に一夏の寮までついて行き、もう時間が遅かったので夕飯を買って研究室の方へ行った。

研究室に近づいてきたあたりでヒロはついつぶやいてしまった

「・・・・・・・・フツ・・・・・・・・一夏がいないから久しぶりに食べれる」

ヒロがそう言って取り出したのは『十秒チャージ』だった。・・・・・ようは『イダーinゼリー』だった。ヒロは基本なんでも食べるがヒロにとって食事はただの栄養補給でしかない。つまり、カロリー摂取ができ、生きるのに必要な栄養素が取ればいいのだ。ヒロ自身最大で7日間飲まず食わずな生活でも耐えられるので腹いっぱい食べたいと言う願望もなかった。

そのヒロが気に入ったのが『十秒チャージ』だった。これならすぐに食べ終え、なおかつ栄養が取れる。ちなみにカロリー イトも好きである。

ヒイロにとっては最適な食べ物だった。ただ前に一夏がバイトでヒイロと暮らし始めた最初の14日間、3食全部『十秒チャージ』だったので一夏はさすがにヤバいと感じ、ヒイロもバイト（五反田食堂に）をさせてまともな飯を食わせていた。それ以来、一夏はヒイロの食事を管理していた。

ヒイロとしてはそれも構わないが『十秒チャージ』のほうが早く食べれて好きだったのだ。

そして今、一夏の監視が無くなったことで食べようとしている。

蓋をあけ、『イダー・インゼリー』を食べながら研究室のドアを開ける。

その時同時に開けようとしていたので目の前にいた女の子がヒイロにぶつかって尻餅をついてしまった。

「・・・・・・・・いたた・・・」

「・・・・・・・・すまなかった。大丈夫か？」

その女の子は水色のセミロングの髪形で癖毛は内側に向いていて、スタイルは悪くないが、胸はやや小さい。眼鏡もかけていた。いかにも文学少女のような感じだ。

ヒイロは手を差し出した。昔の・・・“彼女”と会う前の彼と比べたら驚くべき変化だった。

「う・・・・・・・・ごめんなさい!!」

と言ってヒイロの手を使わず立ち上がり走り抜けた。

その時、大切なものを落としたことも気が付かず・・・

「ん？・・・指輪か？」

ヒイロは床に落ちていた指輪に気づいた。ヒイロはそれを拾い、ズボンのポケットに入れ、研究室に入った。

研究室の奥には研究員用の簡易宿直室がありヒイロはそこで寝るように言われていた。

ヒイロにとっての最初の日が今終わりを告げたのだった。

翌朝・・・ヒイロは朝6時に起床。購買で今日の分の『十秒チャージ』を買うのを忘れていたので寮まで行かないといけなかったので7時までいつもの緑のランニングに長ズボンのジーパンで学園のトラック（1週5km）を走っていた。だがその時も感じていたのは

（・・・視線）

そう、昨日からの視線である。もっとも今回は気配を完全に消しているためヒイロもどこにいるか見当ができなかった。だが長年、モビルスーツMS戦や破壊工員として鍛えられた勘がそう告げていた。

しかし、またも殺気が感じられない。いや・・・殺気を出していたらヒイロは場所を特定している。それをしていないとなると向こうは狙う気ではなく・・・監視であると言う事だ。

時間が6時50分になろうとしていたのでヒイロは研究室に戻り、着替えるのだった。

寮についたヒイロは購買に行こうとしたときある人物に発見された。

それはクラスメイトの女子3人で食堂に行こうとしたときに遭遇したのだった。

「あゝヒロンだゝ」

「あ！ホントだ」

「ユイくん」

「・・・布仏 本音に谷本 癒子、鏡 ナギか」

「うわゝうれしいな。私たちの名前覚えてくれるなんて」

とナギがそう言う。ヒロはクラスの人間の名前は自己紹介のときに全部覚えていて。それは一夏護衛の際、重要になることを知っているからだ。ちなみに癒子とナギは制服に着替えているけど本音だけはピ チュウのようなキグルミパジャマ（袖はながめ）を着ていた。

「ヒロンゝこんなところで何やってるのゝ？」

「・・・食料の調達をしに来た」

「え？食堂使わないの？」

と癒子がそう言うがヒロにとって食事は前にも言った通り最速で取れ、エネルギーを補給すればいいと思っている。無論、ちゃんと普通の食事も食べる、さらにお茶会も過去にドロシー・カタロニアにさせられ飲んだことがある。（詳しくは新機動戦記ガンダムW BATTLEFIELD OF PACIFISTを読んでもらい

たい)ただ食事に執着しななさすぎなのだ。

「ああ」

と肯定するヒイロ。だがここで認めない奴が一人。

「ヒイロンゝ私たちと一緒にご飯食べよう」

本音である。本音はヒイロの腕を取り、食堂の方へ引っ張る。

ヒイロはそんなつもりはなかったがこうされるとどう振り切ればいいか分からないので従うことにした。

のちにヒイロにとっての天敵がこの彼女、布仏 本音になることになるのは次の日からである。なぜなら・・・

「織斑くん。隣いいかな？」

とナギがテーブル席に座っていた一夏と箒に聞いた。ヒイロはこの時ご飯としてコーヒーと食パン2枚だった。

「ああ、別にいいけど」

と一夏がいい、女子たちが一夏の横に据わり始める。ヒイロは一夏の前の席に座ろうとしたのだが、

「ヒイロンはここゝっておりむゝって朝いっぱい食べるんだー」

と本音の横に強制的に座らされてしまった。ヒイロは難しい顔をしている。それがわかったのは一夏だけだったが・・・ヒイロはいかにしてこの本音に捕まえられた手を離させるか考えていた。

「ああ、俺は夜は少なめにするから朝のほうが多いんだ。ていうか、女子はそれだけで足りるのか？」

3人ともヒイロと同じぐらいしかご飯をとっていなかった。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん平気かなっ？」

女子たちは大食いって思われたくない乙女心からの行動だった。唯一違うのは・・・

「お菓子よく食べるしっ！！」

と笑顔で言い切る本音だった。

すると、箒が立ち上がって、食器を持って

「織斑・・・先に行っているぞ」

と言って出て行った。

「ヒイロ・・・俺どうしたらいいんだ」

と一夏はヒイロに助けを求めたが、ヒイロも女心なんてわかりやしないので

「・・・知らん」

としか言えなかった。

そしてヒイロがコーヒーを飲んでいる最中に一夏がふと気が付いて

言い始めた。

「ああ！！そう言えば俺が用意したわけでもないのにヒロがまともな飯を食べてる！！」

「ええ？ユイクんってまともなご飯食べてなかったの？」

「ていうかなんでそう言う事織斑君が知ってるの？」

と癒子とナギが聞いた。

一夏はヒロが自分の家の居候だと言う事を話し、さらにヒロの一般人からは想像できないような食生活も話した。ヒロは別に問題は無いと思っていた。しかし、ここで一夏がとんでもないことを言う。

「そう言えば、ヒロって俺のときは結構反抗するのにはほんさなんだったら何も言わないよな」

ヒロは一瞬焦った。本音の小動物チックオーラによってなぜか言い返せない。

それを一夏に悟られそうになっている。いや・・・悟られた。

「そうか・・・ヒロにも苦手なものがあったのか・・・のほんさん、今度から飯食いに行くときはヒロ連れてきてくれ」

「いいよー！！」

「・・・おい、一夏」

「ヒロ、これは決定事項だ」

ヒイロの抵抗むなく、今後ヒイロはしばらくの間、本音と飯を取るようになった。

「織斑。お前のISだが準備まで時間がかかる」

授業が始まろうとしたとき、千冬は一夏にそう言った。一夏はへつという顔をしていた。理解が追いついていないのだ。

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「専用機？」

一夏はさらに理解をしていなかった。専用機と言ふ言葉は昨日ヒイロが代表候補の説明で使っていたがいまいち理解をしていなかったのだ。

「お前は・・・まさか専用機が何なのか理解していないのか？」

「はい」

パンツと本日最初の一撃をもらった一夏に千冬は呆れながらも指示する。

「教科書6ページ。音読しろ」

「え、えーと・・・『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ博士が作成が作成したもので、これらは完全なブラックボックス化しており、未だ博士以外はコアを作れない。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』」

「つまりそう言う事だ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前やすでに持っているヒイロの場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意される事になった。理解出来たか？」

「な、なんとなく・・・」

ちなみに一夏はヒイロがISではないものを持っていることを知っている。ヒイロから身の上を一応聞いているからだ。

「あの、先生。篠ノ乃さんって、もしかして篠ノ乃博士の関係者何でしょうか・・・？」

女子の一人がおそろおそろ千冬に質問する。千冬はいずればれることだとわかっていたので普通にあっさりと

「そうだ。篠ノ乃はあいつの妹だ」

と答えてしまったのだ。

現在、篠ノ乃 束は指名手配中の人物。別に犯罪を起こした訳ではないのだが、IS技術の全てを把握している人間が行方不明と言うのは各国政府、機関関係者とも心中穏やかではないだろう。もし、自分たちの知らない所でISを大量生産されて組織なんて造られたら・・・想像しただけで恐ろしいからだ

しかし、これは篠ノ乃 束と言う人物を把握していないものが考えることである。

彼女は興味のないことには無視する傾向がある。世界なんて関係ないのだろう。

「ええええーっ！す、すごいっ！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ乃博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ乃さんも天才だったりする！？今度IS操縦教えてよっ」

授業中だというのに箒の机にわらわらと女子達が群がっていく。それはまるでお菓子に群がる蟻のようだ。

「あの人は関係無い！」

教室中に響く突然の大声。

その声に吞まれて箒に群がっていた女子も、そして一夏も何がおこったのか分からない様子でばちくりと瞬きをしていた。ヒイロだけは平然としている。ヒイロは篠ノ乃 束の事を調べた際、彼女が要人保護プログラムを受けていたことを知っている。これについては後々語られるだろう。

「・・・突然大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言つて箒は黙ってしまった。

昼休みになった。一夏は箒を無理やり連れて食堂に行こうとした。ヒイロは席を立ち、購買で『ロリーメイト』を買いに行つて一夏の様子を遠くから見ようと思つていた。だがここで彼女が登場した。

「ヒイロン〜ご飯行こう〜」

本音である。ヒイロの袖をまたもつかみ、引つ張り出した。

「・・・・・・・・わかつた。わかつたから引つ張るな。布仏 本音」

ヒイロはいまだに彼女の扱いがわかつてなく、なすがままになつていた。

食堂に行くと、ヒイロは適当にカレーを頼み、本音と一緒に食べていた。

近くでは、一夏と箒が会話しながら食べている。ヒイロの超人的なスペックを駆使すれば声が聞き取れる。そこからヒイロは一夏が箒にISについて教えてほしいと頼んでいると分かつた。

「ヒロンゝ人の話聞してるの？」

「ああ・・・すまない。なんだった？本音」

と名前で言つてと言われたので名前で言うヒロ。

本音は趣味丸出しの会話始めた。

「お菓子とか好き？」

「いや・・・お菓子というものをあまり食べないからな」

そう、ヒロはほとんどいつてもいいぐらいお菓子を食べていなかった。

「もつたないよゝ今度一緒にたべよゝ」

と誘ってくる本音。その話は後々、別に行うものとする。

本音との約束をして、ヒロは一夏の様子を見守るのだった。

しかし、ヒロには懸念要素があった。

一つはいまだに続く視線である。この視線はどうやら授業がない時間の夜以外で感じられる。殺気がないのでほっておいているが、さすがにこう2日続くと怪しくてしょうがない。

もう一つは昨日拾った指輪である。おそらく研究室でぶつかった際にその時の女の子が落としたものなんだろうがクラスメイトでない人物だったのでまだこのクラスが分かっていないのだ。

ヒロの思いとは裏腹にその後、一夏は幕に剣道の特訓を毎日させられて、そしていよいよ決戦当日になってしまったのだった。

第04話 ヒイロの天敵・・・その名は（後書き）

感想お願いします。

そして、次回から16歳、倉持技研の少女でウイングゼロの整備として学校に通うようになる子を出したいと思っています。

その子の容姿とISを募集します。
詳しくは設定を読んでください。

第05話 『白』と『反抗の象徴』・・・現る（前書き）

アンケートありがとうございました
結果は後書きに

第05話 『白』と『反抗の象徴』・・・現る

いよいよクラス代表決定戦が始まるうとしていた。今回の内容は3日間で行い初日にヒイロ対セシリア、2日目に一夏対セシリア、最終日にヒイロ対一夏の予定だった。

だが、やはりそううまくは行かない事態となってしまったのだった。
・
・

ヒイロは別室に呼ばれていた。間もなく試合だと言うのに、目の前には真耶と千冬がいて深刻な表情でヒイロを見ていた。

「・・・トラックがIS5機に襲われているだど？」

ヒイロはそう千冬に聞き返した。

「ああ・・・一夏が使うIS『白式』を乗せた倉持技研のトラックが現在こっちに向かっているのだがそのトラックに所属不明のIS5機の攻撃を受けていると連絡があつた。こういう場合日本政府の部隊がやるのだが、いきなり過ぎてこのままでは間に合わない。」

このまま放置すると先にトラックがやられ、『白式』は強奪される。本来なら政府が間に合わないのならIS学園の教師たちが行けばいいのだが・・・

「私たち教師部隊は行動に制限がかかっていてIS学園以外で展開するのは日本政府の許可がいるんです」

「だが、生徒の一部は国家や所属命令で使用することが可能だ。お前はガンダムを整備のためIS学園と倉持技研の合同プロジェクト

『Gプロジェクト』のテストパイロットの扱いになっている。だからお前は出撃できる。ヒイロ・・・頼めるか？」

『Gプロジェクト』

それはヒイロがもたらした技術。『ガンダニウム合金』と『ゼロ・フレイム構造』を用いてガンダムタイプのISを作るといったものだ。ヒイロとしても自身の機体の整備のためそれを認めた。だが情報はかなり徹底している。まずウイングゼロの情報はハッキング対策ですべて紙で書かれており、また言葉も読めないように暗号になっているほどだ。

本来なら『エネルギー・ジェネレーター』も研究、搭載しようとしたのだがそれは学園上層部がヒイロに文面化するのを止めるように言われた。

アレは行き過ぎた力だと判断したからだろう。

ヒイロは千冬の話聞いて自分のやるべきことを把握した。

「・・・任務了解。ただちに出撃準備に移る」

そう言つてヒイロは部屋を出たのだった。

一方、IS学園に向かう道の途中では、一台のトラックが5機のISに追われていた。日本政府の計らいでIS学園までの道は封鎖してもらっていたので車一台もない。しかし、それが仇となつてこんな目立つような襲撃をされたこともある。逆に一般人に被害が出ないっていうのも今回のおかげなのだろうが・・・

「くっ……このままでは追いつかれる！」

ドライバー兼倉持技研の推進システムの権威、榎村 俊之はそう言う。榎村は『白式』のある人に譲渡する前、『白式』のブースターの開発をしていた。また今回の『Gプロジェクト』の主任でもある。その恰好はだらしく、また今ではあまり見かけないレンズが大きなめがねありメガネをつけている。（イメージは ティー・ハンター
の榎村）

榎村はトラックをうまく操作してISからの攻撃を避けていた。トラックの装甲も『ガンダニウム』ほどではないがかなりの強度のものを使っているが、そろそろ敵が接近しようとしている。敵のISは前回ヒロが戦った奴らと同じだった。だが違うのは隊長がいないことである。

「私が出るよ！！トラックのハッチ開けて」

運転席のモニターに映る顔は蒼蒲色のショートシャギーでアホ毛が一本、ピヨンピヨン動いており、目は大きめで若干釣り上がり、その瞳は黄土色に近い茶色で榎村を見ていた。

「な……何を言ってる。お前の機体はまだ顔と胸のところしか『ガンダニウム』を使っていないんだぞ。絶対防御の強度も弱いって言うのに……お前が怪我とかしたら、俺はアイツに合わせる顔がないんだ」

「俊之おじさんは心配性だね。大丈夫だよ。すぐ逃げるから。このままだとトラックがやられて、『白式』は奪われちゃうよ」

飄々と答える彼女に榎村は心配そうな顔をする。

だが、彼女の言う通りでもある。このままだと『白式』は奴らに奪われるだろう。それは避けなければならない。

槇村は苦しそうな顔をし、光の反射で眼鏡の奥の目が見えなかったが、

「……頼む……おじぎ 皐月……」

と言ったのだった。

「まかされた〜!!」

と言って皐月は通信を切った。

早い段階で両親を失っていた皐月にとって父の親友だった槇村は父親代わりだったので、槇村を守りたかった。たとえ槇村の命は助かっても『白式』を奪われると槇村の立場が危くなる。だから……

「お願いね、『ガンダムアテナ』。おじさんのためもあるし、何より……わたしは“アレ”を見たいから死ねないの」

『ガンダム』……彼女はそう確かに言ったのだ。ヒロ・ユイ以外が持つガンダム。『Gプロジェクト』の初号機である。

ネックレスを触りながらそう言っていると、ネックレスが光り、装着を始めた。

体全身に白とスカーレットのカラーリングの装甲が纏う。ところどころ黄色のワンポイントが入る。サイズBの胸にも装甲で覆われ、背中にはT字を斜めにしたというか 字型というか短く突き出たパーツの根元付近から長めのパーツの多方向加速推進翼が現れる。

この段階ですでに皐月の体は顔以外ロボットのようになっていた。そして、最後に顔の装甲が現れる。後頭部にブレードアンテナが現れ、そのまま頭を白い装甲が覆う。顔にはヒロのガンダムのような

なスリットは無く、すべて緑のレンズに覆われ、顔が認識できなくなった。そしてヒロのガンダムと同じような目がレンズの奥で光った。

これが『ガンダムアテナ』である。改めて見ると、ヒロの『ウイングゼロ』よりスマートでまた女性的なフォルムをしている。

「武装展開」

皋月がそう言うのと武装が右腕に展開される。

「・・・やっぱり『烈斬』しか使えないわね。『烈洗』、『天之瓊^{アマノヌ}矛^{ホコ}』はまだ調整中か・・・後、二日あれば・・・」

今気づいたが、彼女の声と言葉使いが大人のような感じ・・・大人のお姉さんのような感じになっている。これは榎村の部下たち・・・つまり倉持技研の『Gプロジェクト』のメンバーのほとんどがオタクの集団だったせいで榎村に内緒でマスクにボイスチェンジャーと自動言葉使い変換機（特許申請中）をとり付けられて、外そうとしたのだがISコアが気に入ったせいではずせなくなっただからだ。

彼女が展開した武装は新型複合兵装シールドガンブレード『烈斬』。ガンダニウム合金製小型物理シールドと同じくガンダニウム合金製高周波ブレード、五十二口径機関砲が一体化した倉持技研の最新作。

外見は某武力介入するアニメのクシアのNソードのシールドをサイズそのまま、ブレードを細身にしてその上に機関砲の銃身が乗っている。ブレードと機関砲は独立しているので折り畳む必要はない画期的な兵器だ。

「『ガンダムアテナ』・・・出るわ!!」

トラックの扉が開き、バーニアが火を噴く。そして知恵・学芸・工芸の神のガンダムは空へ駆け上がった。

「何か出てきました。副隊長」

黒いISを使う奴の一人がそう言う。

「『ウイングガンダムゼロ』か!？」

「いえ・・・これは、『Gプロジェクト』の試作1号機、『ガンダムアテナ』です!!」

なぜ彼女たちがヒロが使っていたのが『ウイングガンダムゼロ』と言う名前だと知っていたのか？

そして、今回IS学園で初めて公開される『Gプロジェクト』の事を知っていたのか？疑問が絶えないが話が進むことで分かるだろう。

「私とオーギス3と4はここで『アテナ』の相手だ。5と6はトラックを追って『白式』の奪取だ!! 榎村を殺すなよ!! 奴は生け捕りにするんだ」

副隊長であるコードネーム『オーギス2』はそうオープンチャンネルで指示すると5、6はそのまま走るトラックを追いかけようとする。

「させないわ」

すぐさま『烈斬』の五十二口径機関砲で攻撃しようと皐月は構えるがその前にオーギス2、3、4によるマシンガンの波状攻撃が開始される。

皐月はそれを『烈斬』のシールドとシールドエネルギーによる物理シールドをうまく使い分けながら回避する。

「我々の相手をしてもらうぞ。女神様」

とオーギス2は言うのであった。

一方、ヒロももう出撃ができる体制だった。

すでに外向け用の発射ピットにゼロを装着している。

「千冬、バスターライフルの代わりとして、射撃系の兵器はないのか？」

「・・・今、スグに使えるのはあまり使われない実弾のロングライフルだけだ」

通信で千冬が言ったのでヒロは周りを見渡すと、そこにはゼロを装備したヒロの1.5倍はある長い砲身のロングライフルだった。

『物理的威力は最強だがあまりにも反動が強く、また大きすぎて使える奴がいなくてな・・・』

このライフルの問題点は照準が反動でずれてしまう事である。ISを装備してもよほどの筋力がないと使えず、また重すぎるのも弱点

であるのだ。だがヒロはそんなの気にせず、右手でライフルを取り出撃体制に移った。

「問題ない。出撃する」

そう言ってカタパルトにのって、ヒロはロングライフルを両手で水平に持つとそのまま出撃した。

ヒロが空を飛んでいると一台のトラックが橋を猛スピードで渡っていて、そのボディはもうボロボロであった。そしてハイパーセンサーで300m先の運転席を見ると槇村が頭から血を流しながら運転していた。

すでにトラックの横には前回、一夏を襲った奴らが近接ブレードでトラックの荷台を攻撃していた。ドライバーやエンジンを破壊しないところから見ると槇村には死なれては困るのだろう。

ヒロは右脇にロングライフルを抱え込み、左手でライフルに取り付けられたバーを持つ。動くのを止め、狙いを定めるとトリガーを引いた。ドンと言う鈍い音とともに弾丸が空気を斬りながら飛んで行き、『オーギス5』の近接ブレードの側面から貫いて折った。物理的ダメージが高いのは納得できるものだ。

「な!!」

「向こうからの攻撃だと!？」

敵が慌てているところでヒロは左手でビームサーベルを取り出す。そして一気に翼で接近する。敵は多数のミサイルを放つがすべて避けるか左手のビームサーベルで切り裂く。

「・・・こちらはウイングゼロのヒロ・ユイ。援護する。今のうちに行け」

ヒイロは秘匿通信でそう言つと映像が出てきた。頭から血が出ているがすでに止まっているようだ。

『こちらは倉持技研の榎村だ。すまない、実は奥のほうで研究員の一人が足止めをしているんだ。そっちにも援護に行ってくれ。頼む』

「・・・任務追加了解」

ヒイロはそう言つと通信を切り、前にいるオーギス6に向かってロングライフルを片手で発射した。反動がきついはずなのに、ヒイロは狙い通りオーギス6のブレードを打ち抜いた。

「クソ！！『ウイングゼロ』か！！」

「散開して、挟み撃ちにするぞ」

ブライベート・チャンネル

秘匿通信による通信でヒイロにはわからなかったが挟み撃ちにして攻撃するのが動きで分かった。オーギス5、6は左右から突っ込んでくるがヒイロは急上昇する。そして二人が固まったところでサーベルを戻し、両手でロングライフルを構え、恐ろしいほどまでに連続でトリガーを引く。狙いは相手が持つマシンガンや足についているミサイルポット。それを次々と破壊する。

「くそ、これ以上は損害しか出ない・・・撤退するぞ6」
シックス

「くつ・・・了解」

敵が撤退するのを確認するとヒイロは翼を羽ばたかせながらそのまま本土の方へ向かったのだった。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

慌ただしく第3アリーナ・Aピットに飛び込んで来たのは、もう落ち着きが無い先生と定着しつつある真耶である。あいかわらず生徒を不安にさせてくれるが今日はいつも以上にあたふたしてて不安になる所かこつちが先生の事を心配になってしまう。

一夏たちは本来はAピットでヒイロに会うつもりでいたのだが肝心のヒイロが来ていないのだ。

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「すはすはすはすは」

「先生・・・全然深呼吸できていません」

箒からの鋭いツツコミが炸裂した。そう言っていると後ろから頭に包帯を巻いた男の人が現れた。

「織斑 一夏くんだね。初めまして、倉持技研の榎村だ。今日から3日間だけここにすることになった」

「あ・・・初めまして、織斑 一夏です」

互いに挨拶をしあう二人。そして槇村から

「実は今、君の専用機『白式』を持ってきたんだ。」

それを聞いて一夏は驚いた。まさかこんな場所で専用機を拝むことになるとは思ってもみなかったからだ。今日は後で最適化するからその時だと思っていたからである。

「織斑、すぐに準備をしろ。ユイは今、倉持技研の関係で駆り出されている。だからお前が今日オルコットと試合しろ。アリーナの使える時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものに・・・」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ、一夏」

「ちょっ、ま・・・」

「・・・早く!」

真耶、箒、そしていつの間にか現れた千冬の声が重なる。一夏はついていけなかった。ヒイロがなぜ今この場にいないのか？倉持技研の関係ってなんなのか？

しかしそんな考えている時間すら許される事は無く、ゴゴンツと音をたててピット搬入口が開かれる。斜めにかみ合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその中のものを晒していく。そして、扉の先には・・・。

『白』が、いたのだった。

「くう」

皐月はピンチに追い込まれていた。元々皐月の腕はいいとは言えない。研究員として幼い時から倉持技研・・・榎村のもとで働いていたからだ。それもテストパイロットとしてではなく、技術者としてだった。日本はISによる女尊男卑がひどくないのはこの倉持技研の技術者がほとんど男で構成しているからである。だから男のロマンに走ることも多いのではあるが・・・

一対一ならまだ戦えるのだが一対三では勝ち目がなく、また逃げる隙も与えてくれはしない。武装も『烈斬』しかなく、『烈斬』の五十二口径機関砲で牽制するが、一人は接近戦を、後二人は遠距離からマシンガン、ミサイルで攻めてくる。特にガンダニューム合金のシールドでないと相手のブレードを受け止められないので、結果牽制ができなくなる。そうなるとう必然的にシールドエネルギーの物理シールドを展開しないといけない。そうこうしているともう残量エネルギーが100を切ってしまったのだ。

「まずいわ・・・どうしましょ」

一方、敵の方は予定通りだった。『白式奪取』は失敗しても問題ない。本当の目的は『Gプロジェクト』の機体のデータを得ること。この時点で目的は達成しているのだから・・・

「このまま押して奴を捕える」

オーギス2はいけると判断して、行動を開始する。だがこの判断がまずかった。突如後ろからオーギス4が狙撃され、両足のブースタ

ーがやられたのだ。オーギス4はそのまま地面に着陸、逃走を図った。

「距離500mのところからの狙撃です」

「なんだと」

そう言っただけで狙撃してきた方向を見ると、翼を羽ばたかせ、ライフルを水平に持ってこちらに向かってくるヒロのウイングゼロだった。

「あ……あああ」

皐月は感動の声を上げた。理由は後で知ることになるだろう。ヒロはそのまま皐月に通信を入れる。

「こちらはウイングゼロのヒロ・ユイ。援護する……」

「あ……『ガンダムアテナ』の速瀬はやせ 皐月さつきよ。お願いね、ボウ・ヤ」

（ってボウヤっていうつもりなかったのに）

すべての原因は『エロかつこいお姉さん口調』に設定したオタク研究員共である。ヒロはこの口調と声で自分より年上だと判断した。間違った判断であるが……

ヒロはロングライフルを再び撃つ、が今度はさすがに見え見えだったので避けられる。しかし、ヒロもそれはわかっていた。その動きに合わせるように皐月がガンダニウム合金製高周波ブレードで斬りかかる。その間に襲われているオーギス2を援護するためにオーギス3が接近する。ヒロはまたロングライフルを使おうとす

るが・・・カチカチと言う音しかない。

「弾切れか・・・」

ヒイロはロングライフルそのものをオーギス3に投げつける。それに気づいたオーギス3は回避する。その隙を狙ってヒイロは右手でビームサーベルを出して、斬りかかった。

3はなんとか受け止めたが、ヒイロはそれも計算に入れていた。競り合った状態で両肩の蓋状の装甲が開くとそこから4銃身式機関砲のマシンキャノンが現れ、至近距離で発射した。オーギス3のシールドエネルギーはどんどん削られていき、ついに0になってしまった。

「副隊長・・・申し訳ありません・・・」

「く・・・目的はすでに達している。離脱するぞ」

皐月の攻撃を避けながらオーギス2が答えるとそのまま離脱したのだった。

その様子をヒイロは見届けた後、皐月に話しかけた。

「その形状・・・『Gプロジェクト』の試作1号機か」

「ふふふ、そうよ。興味あるのかしら？」

（違うの！！そうじゃなくて興味あるんですかっていいなかったのに～～にやああ～）

と皐月は心のなかで落ち込んでいたのだ。

「・・・任務完了、これより帰投する。お前もついてこい」

とヒイロは彼女のセリフをスルーすると皐月と一緒にIS学園へ向けて飛んだのだった。

ヒイロが皐月のもとへ向かっている頃、一夏はセシリアと戦っていた。

開始同時にセシリアの大型のレーザーライフルの砲撃を受け左ショルダーアーマーが弾け飛び、その砲撃を文字通り引き金にして、セシリアのレーザー砲による連続砲撃。

圧倒的にIS操作経験の少ない一夏にそれは凌ぎ切れるものではなく、初弾のように直撃こそ避けるが、それも辛うじて。一夏も応戦するために武器を展開するが、出てきたのは実体剣一本のみ。『白式』にはそれしか搭載していなかったのだ。しかし、それでも粘る一夏はセンスはある。

「二十七分。このブルー・ティアーズを相手に初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

オープンチャンネルからセシリアの勝ち誇った台詞が一夏に向けられる。

ブルー・ティアーズの肩部アンロックユニットに搭載されたビット

兵器『ブルー・ティアーズ』による全方位オールレンジ攻撃によって、一夏のシールドエネルギーも残り僅かと追い詰められていうからこそセリフだった。

後の無い一夏。セシリアは四機のうちの二機のブルー・ティアーズによる多角砲撃に加え、既に装甲を失っている左足に向けて一夏が体勢を崩すタイミングにあわせてレーザーライフルで狙う。

が、一夏もそこに当たれば即敗北と理解しているようで、気合と共に無理な体勢ながら急加速でブルー・ティアーズの砲撃をかくぐり、セシリアに体ごとぶつかる。

その衝撃で砲口がそれて一命を取り留める。

「無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

セシリアが距離をとってから待機していたもう二機に指示を送るが、一夏は今度は的確にブルー・ティアーズの砲撃をかいくぐり遂に一機を一刀に伏せる。

「なんですって!？」

思いもよらない反撃に驚愕しているセシリアに、一夏は大上段から一気に攻め込む。

とはいえ黙って距離を詰めさせるセシリアでもなく、下がりながらブルー・ティアーズへ新に指示を下す。

「わかったぜ!!この兵器はお前が命令を送らないと動かない!しかも」

だがセシリアのその動作は織り込み済みと言わんばかりに、再び危なげなくレーザーを回避して更に一機破壊する。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させてるからだ。そうだろ？」

言葉尻こそは問いかけだったが一夏のその自信に満ちた口調と表情は、既に確信しているに違いない。いや、一夏は確信していた。いくら剣道を収めていたとはいえ、初めての実戦とISの起動が二回目という圧倒的な経験不足、それに三次元方向からの砲撃によるプレッシャー。セシリアも、そんなあからさまで致命的な弱点を悟らせないように戦術を組んでいたはずだった。なのに一夏は気がついた。驚異的の戦闘センスが垣間見た瞬間だった。

「すごいですねえ。織斑くん」

真耶がその様子を見て感嘆の声を上げる一方で、千冬表情は忌々しげに歪んでいる。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「え？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

千冬に言われ、真耶は再び見てみると確かに一夏の左手は忙しく動いている。

「へええええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

真耶に言われてハツとする千冬。実はこの千冬はかなりのブラコンである。よほど弟、一夏の戦いを見ていたのだろう。指摘させたことで照れ始めている。もつとも、彼女を超える妹大好きシスコン大将がいるのだがそれは近いうちに・・・

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

ここぞとばかりにからかう真耶。しかし、それは千冬のヘッドロックが炸裂するフラグだった。骨がきしむ音が真耶の頭蓋骨から発せられる。

「いたたたたたっ！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりましたっ！わかりましたから、離し　あ
うっうっ！」

ざわめいているモニタールームを余所に、試合は大きく動く。残り二機のブルー・ティアーズを屠り、一気に詰め寄る一夏。タイミング的には、セシリアがライフルの照準を合わせるのも間に合わないだろう。

だが代表候補生というエリートであるセシリアがいくら虚を突かれたとはいえ、ブルー・ティアーズ二機を落とされる間に回避行動の一つもとっていないというのは、果たしてありえるのだろうか？あまりにも不可解すぎるのだが一夏はそのことに気が付かず接近戦をするためにさらにセシリアにせまる。そして一夏のハイパーセンサーに移った彼女の顔には笑みがあった。

その表情に、一夏はこの段階で初めて何かあると気が付き、慌てて

制動を掛けるがそれよりも早くセシリアのサイドスカートアーマーが動き出し、一夏の方を向く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ!!」

セシリアの叫びと共に、ブルー・ティアーズの砲口からミサイルが発射された。

「一夏っ!!」

ミサイルが着弾し、爆煙に消える一夏を見て、千冬と同じモニタールームにいた篤が悲鳴にも似た声をあげる。騒いでいた千冬と山田先生も同時にモニターを注視するが・・・

「ふん。機体に救われたな、馬鹿者め」

モニターいっぱい広がっていた黒煙が晴れると、言葉に安堵の色を混ぜながら千冬がそう悪態をつく。

まだわずかに残っていた煙を、まるで引き裂くかのように掃うのは、機械的だったその装甲はより鋭角なフォルムとなり、手に持っていた剣はショートソードのような形状から大きく反りの入った太刀に近い形となっていた『白』がいたのだ。

ファースト・シフト

「ま、まさか・・・一次移行!? あ、あなた、今まで初期設定だけの機体であそこまで戦ってたっていうの!？」

セシリアが驚いたのも無理はない。一夏は今まで初期設定・・・つまり某機動戦士の量産型以下で戦っていたようなものだから。

「よくわからないが・・・これでやっと、この機体は俺専用

になったわけだ」

一夏は新たにモニターに映った武器情報を確認すると・・・

接近特化ブレード 雪片式型 使用可能

とあつたのだつた。

「これは・・・千冬姉が使つてた武器だよ・・・」

雪片・・・かつて一夏の姉、千冬が世界大会で優勝した時に使つていた最強の剣。その後を継ぐ剣が今、一夏の手にあつたのだつた。

（まったく。つくづく思い知らされるよ）

一夏は心中でそう感じた。自分の姉がいかに偉大で、そして自分の事を心配してくれていることを

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

一夏がそう言うと言雪片式型が変形し、青白い光の刃が現れた。ヒイロのビームサーベルに似ているがその形状は刀に近かった。

（三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人は何時でも俺の姉だ。）

「でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしないとな・・・これから俺も、俺の家族を守る」

どこか遠いところを見ているような目をしていた一夏だったが、今

度はセシリアを　自分が倒す敵を真っ直ぐ見据える。

今まで以上に腹を決め、自らの進むべきところだけを真っ直ぐ見る一夏の表情。それはヒロが一夏にあのリーナ・ドーリアンと同じものを感じたときと同じ目だった。

「・・・は？あなた、何を言って」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！弟が出来では、格好が付かないからな」

誰にでもなく、自分に言い聞かせるように言う一夏。

「いったいさつきから何の話を・・・ああもう、面倒ですわー！」

それに対して痺れを切らせたセシリアがミサイルを仕掛けるが、初期設定の状態でもブルー・ティアーズの砲撃を避けきった一夏にとって、一次移行を終え一夏専用にフォーマットされた白式を駆る一夏は、それまでよりも素早く移動する

（見える・・・！！）

沢山のミサイルを青白く光る刃ですれ違いざまに斬り捨て、続けざまに先ほどよりも圧倒的に早く安定した加速でセシリアへ肉薄する。

「おおおおっ！！」

気合一閃。振りぬいた斬撃がセシリアを捉える直前に、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

というアナウンスが流れて、場所を問わずこの試合を見ていた人間が状況を把握しきれずに一様にぽかんとしていたのだった。

第05話 『白』と『反抗の象徴』・・・現る（後書き）

つてことで結果発表!!

? 3

? 5

? 4

となったので?になりましたが? ?の要素を盛り込もうと思いま
すので詳しくは設定で.

感想、意見お待ちしております.

ちなみに今回ヒロが使ったロングライフルのモデルは

<http://kodama3.skr.jp/notice0809.htm>

に載っているF90の武器です

第06話 セシリア・オルコットの力（前書き）

遅くなつて申し訳ないです
お楽しみにください

第06話 セシリア・オルコットの力

「・・・俺・・・どうして負けたんだ？」

一夏は訳が分からなかった。最後のときシールドエネルギーがまだ余裕があったはずなのにいきなり0になってしまったからだ。そこに千冬が答えた。

「雪片の能力が原因だ。あれは、自分のシールドエネルギーを攻撃に回す代わりに相手のバリアーを切り裂く力を持っている」

「そうか・・・それでいきなり0に・・・」

シールドエネルギーがゼロになった時点でISの勝負は終わる。0になっても少しは動いていられるが武器は使えなくなる。

「『白式』は俺が作った最新のブースターを搭載している。少ないエネルギーで沢山動けるようになっていて、ワンオフ・アビリティが単一使用能力『零落白夜』や雪片のせいでもかなり燃費が悪くなっているんだ」

と槇村がそう言い、千冬も頷きながら肯定した。その後ろから真耶が現れ、

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

そう言って電話帳並みの資料を一夏に渡す。あまりの厚さに一夏が絶句している。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。後は帰って・・・」

と言おとしたときだった。ヒロと一人の女の子が戻ってきたのだった。

時間は少し元に戻る。

一夏たちの試合に勝敗がついたころ、ヒロと皐月はヒロが最初出撃したピットに戻っていた。ヒロはゼロを解除し皐月のほうを向いて言った。

「・・・これから千冬のところに行く。お前もISを解除してついてこい」

「わかったわ」

と色気をムンムン出しながら皐月はISを解除する。

そしてその姿を見たときヒロは目を見開いた。実はこれはヒロの驚きの顔である。普段あまり表情を出さない彼だがここ一年でマシになっていた。

その理由は彼女が菖蒲色のショートシャギーでアホ毛が一本、ピョンピョン動いており、目は大きめで若干釣り上がり、その瞳は黄土色に近い茶色の少女だったからだ。ヒロは20代後半だと思っていたので

「・・・俺より年上だと思っていた」

と率直な感想を言った。

「あははは・・・詳しく聞かないでほしいです」

とアホ毛も一緒に落ち込むのだった。

そして今に至る。

ヒイロは千冬のそばまで行き、

「任務完了」

と小声でつぶやいた。千冬はそれを聞いて頷き、それを確認するとヒイロは一夏のところまで行き、謝った。

「すまなかった、一夏。急に試合をさせて・・・」

「いや、気にするなよ。試合は負けたけどアレは俺が原因だしな」

と一夏は返した。この辺りも一夏はヒイロの仲間、デュオに似ている。

彼もなんだかんや言いながらいつもヒイロを許していた。一夏もその口だった。

槇村は皐月の頭を撫でた後、みんなに話した。

「すまない。俺の話聞いてくれ。コイツは早瀬 皐月。俺の・・・まあ、娘みたいなもんだ。『Gプロジェクト』のテストパイロット兼ヒイロのウイングゼロの整備補助として明日付でIS学園の生徒

になる」

そう言うと皐月は礼儀正しく立ち、

「早瀬 皐月です。母はギリシャ人、父は日本人。自慢は足で好きな食べ物ホットケーキ。よろしく」

と言った。アホ毛もピョンピョンして元気になっていた。そして次に言った言葉が・・・

「ヒロさん。お願いがあるんだけど・・・」

「なんだ？」

「・・・後でウイングガンダムゼロ触らせて!!」

と鼻息を荒くし、さらに手をワキワキさせながら言ったのだった。その様子をみた他のメンバーは変態がいると思っただろう。実は彼女、メカオタで新しい技術には目が無い。なのでゼロは格好の獲物（笑）であつたのだ。

「ゼロが気になるのか？なら乗ってもいいが・・・注意しろ」

とヒロは意味深な返答をした。

でも今日はもう遅いからまたの機会となり、今日はここで解散したのだった。

ちなみに、皐月のクラスは2組だった。

サアアア……

その日の夜、シャワーノズルから熱いめのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとした彼女……セシリア・オルコットの自慢だ。しゅっと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルに引けを取らないどころか勝っているくらいである。シャワーを浴びながら今日の試合の事を考える

（今日の試合　　）

どうして勝てたかは、分からないが今それよりも考えることがあると本人は考えていた。

（　　織斑、一夏　　）

一夏のことを思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。彼女の父とは、まるで正反対の力強い瞳をそれと一緒に両親を思い出す。三年前に亡くなった両親どこまでも強く厳しかった母そんな母に媚びるだけの弱い父。だから『将来は情けない男とは結婚しない』そう思っていたでも出会ってしまった。

織斑　一夏と。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏……」

名前を口にするだけで胸の中が熱くなるセシリア。
熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

なんだろう。この気持ちは。

意識をすると途端に胸に広がる、この感情の奔流はなんなのかセシリアにもわからない。

知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏の、ことを。

「……………」

（そのためには・・・）

と何かを考え浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

そして・・・次の日の放課後、本来初日にやるはずだったヒイロ対セシリアの対決になった。両者ともにビットで待機中だった。ヒイロはサーベルとマシンキャノンだけで戦うことになる。そんな不利なかでもヒイロは目をつぶって腕を組んで時間を待っていた。そばには一夏に箒、そしてなぜか本音がいた。

「ヒイロン〜お菓子いる〜？」

とボリボリ食べながら言う本音。それに対して今まで一切話さなかったヒイロは

「・・・いらない。水をもらえるか」

「いいよ」

とヒイロに水を渡すとヒイロはそれを飲んで、そして歩きはじめた。

「時間だ・・・」

「頑張れよ、ヒイロ」

「オルコットは強いぞ」

と一夏と箒がそう言う。ヒイロはそれを背中ごしに聞いてゼロを展開して空へあがった。

ヒイロの機体を見た生徒たちはざわめき始めた。

『全身装甲！？』

『あんなIS見たことないわ』

と言った感じである。

アリーナに出ると目の前にセシリアが待機していた。ただし、その目は前の男を見下す目ではない。対等に見ている目だった。ヒイロはそれに気づき話し始めた。

「・・・どうやら昨日、一夏から『何か』を得たようだな」

とヒイロが話しかけてきたのでセシリアは一瞬驚いたがすぐに冷静になり答えた。

「・・・そうですね。『一夏さん』から何かを得ましたわ。だから・・・今のわたくしは油断もしませんわ。わたくしとあなたではわたくしの方が弱いのも今ならあなたを見て分かりますわ。なので足掻かせてもらいますわよ!!」

そう言った時だった。

ブザーが鳴り響き、試合が開始した。

「・・・任務開始。内容、セシリア・オルコット専用IS、『ブル・ティアーズ』の撃墜」

ヒイロがそう言うのと右手でビームサーベルを取り出す。それと同時にセシリアは手に持っていた六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』で牽制攻撃をしながら後ろに下がる。

ヒイロはそのレーザーを避けながらかく乱するため飛び回る。

「やはりかわしますわね・・・でしたら」

セシリアは『スターライトmk?』の照準をヒイロの狙いやすい胴体を止め、宙に浮いたままその場にしゃがみ込みスコップを覗く精密射撃の体勢に入る。ヒイロはその様子を確認したので急接近をした。精密射撃にはかなりの集中力が必要になる。だが今のウイングゼロのスピードにその状態になられると完全に回避ができなくなる可能性がある。ウイングゼロのシールドエネルギーは300・・・ちよっとのダメージが危うくなってくるのだ。

ヒイロは一気にセシリアに近づく。だがこれはセシリアの罠である。

セシリアはこの体制の状態で特殊装備『ブルー・ティアーズ』
通称BT兵器のビットを四機射出した。そしてヒイロの死角になる
ところから遠隔操作によるオールレンジ攻撃を行った。

「・・・なんだこれは」

ヒイロは驚いた。初めて見る兵器、それも小さな機械が飛び回り、
ビームで攻撃をしてくるのだ。だが、多対一で戦い続けてきたヒイ
ロは少ない動きで回避できると判断した。
しかし・・・

ヒイロが自分のボディーと翼の間の隙間を作ってビームを回避しよ
うとした時だった。シールドが勝手にはられ、被弾したのだ。本来
なら回避できていたはずだがなぜか被弾したのだ。

「なにっ!？」

ダメージ54 残りシールドエネルギー246、装甲 損傷なし

と表示されるのを見てヒイロはさらに驚いたのだった。

「まさか・・・ならば、これで決着を決めますわ。わたくし、セシ
リア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!!」

その様子を見ていた千冬は一人だけ落ち着いてみていた。残りの一夏、箒、真耶は驚きを隠せずにいた。映像に移るヒイロの被弾。それがB T兵器になって突然食らうようになっていた。

「やはりな・・・」

「なにがやはりなんだ・・・千冬姉え？」

と一夏がそう言ったので拳骨を頭にきめた千冬。一夏は痛さでのたうちまわった。

「ヒイロは自分の機体のシールドエネルギーがどこで展開するのか把握しきれていない」

「つまり、ちゃんとした設定をまだしていなかったから・・・」

「だろうな。本来なら避けれている攻撃でも被弾扱いになるのはヒイロがギリギリすぎるところで避けようとするからだ」

そう、本来ならウイングゼロは翼は楯代わりになるので翼には対ビームコーティングがされているのだがシールドの展開場所の設定がしていない故にこのような事態が起こってしまったている。

「ま・・・それでも、アイツは把握しきったみたいだな」

ヒイロのシールドエネルギーは残り50を切っていたがそこから攻撃が当たらなくなった。セシリアもそれに気が付いていた。

（く・・・どうやら、自身の機体のシールドの効果範囲を把握したみたいですね。たった3分で把握するなんて・・・）

そうこうしている間にヒイロはサーベルとマシンガンでビットを二つ破壊する。セシリアはこのままではいくら被弾してないって言うってもやられると判断。当初から考えていた作戦を実行することにした。

ビット二つを攻撃させる中で『ブルー・ティアーズ』のスカートが動き、二機のミサイルビットから10数発のミサイルを発射した。ヒイロはそれを回避して一気に真正面からセシリアに近づく。だが正面に来させるためにわざとセシリアが攻撃した誘導攻撃だった。

「これで貰いますわ!!」

と言って『スターライトmk?』からビームが発射された。

ヒイロの接近するスピードとビームの速度を考えると回避は不可能。セシリアはこれで!!と思っていた。しかしヒイロはなんとビームサーベルでビームを切り裂いた。

「な!!」

セシリアとしてもそれは予想外だった。本来ならそんなこと並みの人間じゃできない。六十七口径のビームに対してサーベルを当てようとすると必ず消すためにはタイミングが重要になってくる。それをヒイロは行ったのだ。

一気に接近を許されてしまったセシリアにヒイロは言った。

「お前の強さ・・・見せてもらった」

そう言つてヒイロは袈裟斬り、返し薙ぎをして最後に多段抜き胴をした。抜き胴をした時、ヒイロはただセシリアの後ろに言っただけに見えたが後から『ブルー・ティアーズ』から火花が飛び散り、連続攻撃していたことが分かった。そして・・・

「任務完了」

と天使の羽をまき散らせながらつぶやき、セシリアの機体はゆっくりと地面に落ちて行つた。

セシリアは負けたけどすがすがしい気持ちだった。世の中には一夏やヒイロのような男もいるとわかったから・・・この後、

『試合終了。勝者　ヒイロ・ユイ』

というアナウンスが流れてくるのだった。

一夏はそれを見て、思った。俺も・・・ヒイロに示さないといけない。俺の意志を。そう考えていると後ろから肩を叩かれた。一夏が振り返るとそこには槇村がいた。

「槇村さん」

「一夏、ヒロに勝ちたいかい？」

「え!!」

「今回だけしか使えないが君の腕でも勝てる可能性がある戦法を教えよう」

と槇村は一夏的心情を考慮して助言をしたのだった。

第06話 セシリア・オルコットの力（後書き）

次回、一夏対ヒロですが一瞬で終わります・

後気付いていると思いますが白式は作者はアニメ版の設定からアレ
ンジしています・なので少しおかしいなっと思うかもしれませんが
許してください・

なんせ、アニメ版は雪片の展開装甲と零落白夜は別でしたしね・・・

これからもよろしく願います

第07話 織斑 一夏の力（前書き）

タイトルと内容があまりあっていませんかもしれませんがよろしく
お願いします

第07話 織斑 一夏の力

試合が終わった後、ヒイロは放課後、皐月を呼び出すために2組の教室まで行った。

ヒイロが2組の前まで行くと2組の女子は大声を發した。

『きゃあああああああああああああああああ！！ヒイロくんよ！！』

『ほんとだわ！！どうして2組に！？』

『ああ・・・寡黙なところがかっこいい～～』

と暴走気味の女子たちを無視してヒイロは眼鏡をかけたおとなしそうな女子に

「すまん・・・早瀬 皐月を呼んできてほしい」

と言った。

女生徒は顔を真っ赤にさせ返事を返した後、皐月を呼びに行ったのだった。

もちろんその時『なんであの子だけ呼ばれるのよ！！』とヒステリックな声が響いていたが彼女が倉持技研の人間っだという事を知っていたのでそこまで問題にならなかった。

皐月を呼び、ヒイロは自分が寝泊まりしている研究室に行った。皐月は目を輝かせながらついてきている。

「……ゼロのシールドエネルギーによるシールドの自動展開の調整をしたい。頼めるか？」

と歩きながらヒイロは言った。そう先ほどの戦い、ヒイロは避けたつもりがギリギリのかわし方過ぎてウイングゼロのシールドが勝手に発動したのだ。しかし、ヒイロは最後までシールドエネルギーの調整をしたことがない。なので臯月を頼ったのだった。臯月はそれを聞いて笑顔で答えた。

「ウイングゼロはISと同じ部分とGコアによる新規の部分の二つを兼ね揃えてる機体だと3月の調査で分かったからね。ほとんどGコアの部分で構成させて最近やっとできるようになったけどシールドエネルギー関係だったらISと同じだからすぐにできるよ」

と答えた。3月から行われていたウイングゼロの調査。ただし、世界のバランスを変えかねないGコアとエネルギージェネレーターだけは調査しなかった。

ヒイロは臯月の様子を見ていた時、ふと思い出した。

「スマン……この指輪……誰のか分かるか？」

と言ってヒイロは臯月に見せた。それはこの間ヒイロが拾った指輪だった。

それを見て、臯月は驚く。

「……………これって!?!」

『あ…………あの…………』

後ろからものすごく控えめで、聞き逃しそうな声が聞こえた。

ヒロたちが振り返ってみると、そこには水色のセミロングヘヤーで、内側に少しはねており、長方形のメガネをかけていて、雰囲気暗いとか、薄幸少女とかいう言葉を連想させる。そんな女の子がいた。

少し、ビクビクしている感じにヒロはとらえたが・・・

「お前は・・・」

ヒロもこのタイミングで思い出した。彼女は初めてこの研究室に来たときぶつかった女の子である。

「・・・・・・・・・・更識よりし 簪かんざしさん・・・ですね」

皐月が真顔でそう言ったのだった。

「このたびは、我が社が起こしたことでご迷惑をおかけしました事、申し訳ございません」

とあの後、研究室の奥にある研究員用の簡易宿直室（ソファ、シャワールーム、簡易冷蔵庫、簡易ベット、ロッカーがなく、寮の部屋とは大違い）のソファで皐月は簪に頭を下げた。

実はヒイロが拾った指輪は、簪が日本代表候補生である自分の専用IS『打鉄式』だったのだ。なのでずっとどこにやってしまったのか・・・簪は探し回っていたようだ。

そして皐月は倉持技研を代表して謝った理由・・・それは一夏の専用機になった白式の調整のため、倉持技研で開発していた打鉄式式の開発が止まってしまったのだ。本来なら別の人員を割くのだが、倉持技研は『Gプロジェクト』も行っていたのでそんな人員はいなかった。

「・・・・・・・・い・・・・・・・・いえ、あの・・・・・・・・謝らないでください」

簪は慌てて手を振りながらそう言う。そこで皐月は顔を上げて真顔で話を続ける。

「それで、私たち『Gプロジェクト』のメンバー・・・・と言ってもしばらくは私だけなんですけど、『打鉄式』の開発をするように本社から言われています。これで完成させられると・・・・」

「ま・・・・・・・・待ってください・・・・・・・・お願い。一人で作らせてください・・・・・・・・。」

その時、場の空気が固まった。

ISを自分で作る・・・・ただでさえ研究者たちでも難しいことなのにそれを15歳・・・・しかも皐月と違い、研究者関係ではない人間がだ。無謀にもほどがある。

皐月は無理と言おうとしたとき、ヒイロが手を皐月の口元にかざし止めた。

「理由を聞かせてもらおう・・・・・・・・普通に考えると無謀に思える」

ここで初めてヒロがしゃべったので簪は驚いたが、ヒロの目が怖いけど自分を試していると気づいた。

「え、う、んと………。私の……。お姉ちゃん。この学園の……。生徒会長。そ、それで……。お、お姉ちゃん……。も、専用機……。持つて……。る。で、でも……。お姉ちゃん。専用機、一人で……。作った、から」

「生徒会長……。楯無さんか……。お姉ちゃんと同じように自分も一人で作り上げてみたいと」

皐月がそう言う。

「う、うん。だから……。あの」

簪はそう言う。

ヒロは目をつぶってそれを聞いていた。そして……

「それは……。お前の心がそうしたいと願っているのか？」

と質問に対して簪はうなずいた。その目はどこか子供がする目だったが……。それでも……。あの一夏と同じ強い意志を感じた。

「……。感情に従うことに異論はない。お前の好きにやればいい」

「ヒロさん!」

「皐月には俺から頼みたいことがある。ツインバスターライフルの

出力制御装置の開発を大至急してくれ」

皐月が反対する前にヒイロは皐月に仕事を与えた。確かにヒイロとしてもできるだけ早くツインバスターが使える方が今後の事を考えるとよかった。そしてそれはものすごく時間がかかること・・・なにせその気になればISを装備した人間も蒸発できるほどの威力を持つものを調整するのだから。

皐月はそう言われて溜息をつく・・・

「・・・わかりました。じゃあ・・・それまでの間、保留で」

「あ・・・・・・・・・・ありがとうございます」

簪が頭を下げ、そろそろ戻らないといけないそうなのでソファーから立ち上がり去って行った。

この日、簪はヒイロに兄のような感情を抱いていた。今まで、簪がすることは無謀で周りはずっと止めてきた。今回もそうだった。だがヒイロは違った。

『お前の好きにやればいい』

その一言が簪はうれしかった。

この人なら相談したら私の感情も踏まえて助言してくれる。助けはくれないけど、見守ってくれる・・・そう思われてしまった。

そのことが原因でのち、一人のシスコン大将とヒイロは戦う羽目になるのだった。

その後、ヒイロは皐月とウイングゼロのシールドの設定をした。それによりできるだけギリギリでなおかつ翼には判定をなくした。これで明日の試合に臨む。

そしてそれは一夏も同じだった。

ヒイロの試合を見た後、剣道場で竹刀を振っていた。

ヒイロに勝つための方法を榎村から教えてもらったが、その方法は今回・・・しかも一回しか通用しない。失敗は許されない。

ゆえに精神を研ぎ澄ましていた。その様子を箒は見る。箒は感じていた。一夏の強い意志を・・・そしてその姿に再び惚れ直したことを・・・

そして・・・運命の最終戦・・・

白き騎士とゼロの名を持つ天使。二つの影が競技場にたたずんではいる。

観客は大勢入っている。男子同士の戦い

「来い・・・一夏。お前が俺に見せたその目に宿る強い光。・・・それをこの場で示せ・・・」

ヒイロはそう言ってビームサーベルを抜く。

そう言われて一夏も雪片式型を展開する。そして一呼吸した後・・・

「行くぞ・・・ヒイロ!!」

と言って試合の合図がなった。

最初に動いたのは予想に反してヒロだった。ウイングゼロは翼を羽ばたかせ、一気に白式に接近する。一夏はそれを迎え撃つように構える。

ヒロがビームサーベルを一夏から見て左上から斬りかかってくる。それを一夏は受け止めるように剣を振る。

そして受け止める瞬間・・・一夏のIS、白式が金色のオーラに包まれ、雪片と接触した瞬間ビームサーベルのビームがかき消された。そしてそのままヒロを斬りかかる。

（俺は！！この力で俺の大切なものを・・・・・・
・守る！！）

ヒロもビームサーベルが消えた瞬間、マズイと判断したがすでに遅く、ボディーに少し傷が入り、シールドエネルギーがなくなってしまった。本来なら戦闘続行できる損傷だが、ISバトルはシールドエネルギーがなくなった方が負け・・・つまり・・・

『勝者、織斑 一夏』

と言うアナウンスが流れたのだった。

一夏は息をゼイゼイ言わせていた。その数秒だけだがヒロに外れないように全神経をタイミングを見極めるために使ったからだ。

そう・・・『零落白夜』を使うタイミングを・・・

『今回だけしか使えないが君の腕でも勝てる可能性がある戦法を教えよう。それは・・・零落白夜だ』

『零落白夜』

『白式の単一仕様能力だ。ワンオフ・アビリティー本来なら二次移行で得られるかもしれない能力なんだが、これはそういう風にできているんだ。簡単に言えばバリアー無効化能力を持つ雪片式型の全力攻撃。そしてそれは時にビーム兵器を無効化する』

『え!!ビーム兵器を!!』

『そう。ヒイロはまだそのことを知らない。そこを突けばビームサーベルとぶつかる瞬間に零落白夜を使えばいい。そうするとサーベルの刃は消え、そのまま攻撃が入る。ウイングゼロもシールドを突破されると絶対防御は発動しないがエネルギーは大幅に減る。と言うかなくなる。だからそこを突けば勝てる・・・ただし、問題はタイミングだ』

とこれが昨日、榎村との会話の内容だった。

そう、この作戦はタイミングが問題なのである。早すぎるとヒイロに感づかれ、遅すぎると反撃するタイミングが失うことになる。一夏はこの一瞬のタイミングを見極めたのだった。

「・・・一夏」

ウイングゼロを展開した状態でヒイロは一夏に近づいた。そして・

・

「お前の強さ・・・確かに確認した」

そう言うで一夏は笑いながら地上に降りた。

そしてこれによりクラス代表決定戦は終了したのだった。そして、
榎村も倉持技研に帰って行った。

なぜこうなった・・・次の日の一夏の心の声の第一声がそれだった。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりで
いい感じですね!」

もう一度言う。なぜこうなった。
と繰り返し、心の中で思う一夏。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺はなんでクラス代表になってるんでしょうか？」

そう勝敗は全員、一勝一敗である。なのになぜか一夏が選ばれた。そのわけは・・・

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

山田先生が理由を言おうとしたらその本人が理由を述べた。相変わらず様になっている腰に手を当てるポーズ。そう、セシリア・オルコットである。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。・・・それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして・・・」
「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表になれば戦いには事欠きませんもの」

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく男でISを使える人が二人も居るんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとね！」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、二人とも」

他の女子たちもセシリアに賛成し始める。

結局、その意向で返られず、一夏は代表、ヒイロはその補佐と言う形になった。

ヒイロとしてもその方が一夏の行動が把握できてよいからだ。

その後、だれが一夏にESを教えるか・・・箒とセシリアで争い始めたが千冬の出席簿アタックが炸裂・・・沈黙したのだった。

第07話 織斑 一夏の力（後書き）

次回はセカンド幼馴染の登場です・

シスコン大将との絡みはクラス対抗戦後になります・

ちなみに作者はセカン党なのですごく楽しく書きたいと思います

第08話 転校生はセカンド幼馴染（前書き）

今回はヒロのセリフおかしいかも・・・

みんな！！オラにアドバイスをくれ（笑）

第08話 転校生はセカンド幼馴染

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ユイ。試しに飛んでみせる」

クラス代表が決まった数日がたった。今、一夏やヒロたち一组はグランドでISの実習授業をしている。まずは専用機持ちがすぐに行けるので千冬はそう言った。

「わかりましたわ」

セシリアはそう言って左耳のイヤークラスフになっている『ブルーテイアーズ』を起動させ、瞬時に展開させた。

「任務了解・・・ウイングゼロ起動」

ヒロもウイングゼロをセシリアと同じぐらいの速さで展開した。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開までに1秒とかからないぞ」

しかし一夏だけ千冬にげきを飛ばされていた。一夏はまだ慣れていないらしく展開がうまくいかないからだ。

「集中しろ」

そう言われ一夏は初めて『白式』を纏った時の自分の姿を思い出す。そして

「来い!!!白式!!!」

と言う気合が入った掛け声とともに白式は展開された。
千冬は内心ほっとしながらそれを見届けると次の指示を出す。

「よし、飛べ」

その声を受けてヒロ、セシリア、一夏の順番で上昇する。

一夏もそれを追い掛ける形で上昇するが二人ほどのスピードは出せない。

「何をやっている。スペック上の出力では『白式』は『ガンダム』と同じで『ブルーティアーズ』より上だぞ」

だが一夏は飛ぶイメージがうまく出来ないらしく最後尾にいる。

「ヒロもセシリアも早いな」

一夏の感想に対して一夏の近くによってきたセシリアは一夏に優しく言う。

「一夏さんイメージは所詮イメージでしょ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですわ」

「そうなんだけども、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよなあ。何で浮いてんだこれ」

「教えても構いませんがかなり難しいですわよ・・・反重力力翼と流動波干涉の話になりますので・・・」

「わかった。説明しなくていい。俺の頭ではさっぱりだ」

と一夏はあきらめた顔をした。ヒイロはまだ無言で翼を羽ばたかせている。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。そのときはふたりきりで」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！！」

セシリアが一夏にアピールをしようとしたときに通信回線から怒鳴り声が響く。地上を見ると真耶のインカムを箒が奪い取っていた。一夏はいきなりだったのでかなり驚いていた。そして真耶に至っては泣きそうな顔をしている。彼女は本当に成人なのだろうか？

「織斑、オルコット、ユイ、急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から10センチだ」

「了解です。ではお先に」

千冬の指示の後すぐセシリアの姿がぐんぐんと小さくなっていくのを一夏は感心しながら見ていた。そして見事に急降下と完全停止をやったのけた。ヒイロも一夏のそばでその様子を見届ける。

「上手いもんだなあ」

「……奴は代表候補だ。あれ位は造作もないだろう」

ヒイロは普段と同じようにそう言った。

しかし、ヒイロの頭の中ではあることを考えていた。

それはISの存在。セシリアの動きと言い、もはや彼女は“兵士”と呼んでもいいレベルである。そんな争いの道具となるものを何故生み出したのか。

『篠之乃 束』

同じクラスの箒の実姉であり今から十年前にISを開発した彼女は一体何を考え、そして何の目的でISを生み出したのか・・・ヒロ口はその答えを見つけられなかった。

そして・・・『ゼロ』もそのことには答えてくれなかった。

「ヒロ、先に行くぞ」

「・・・ああ」

一夏がそう言つて急降下を開始する。だが・・・

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラントに穴をあけてどうする」

「・・・すいません」

案の定墜落したのだった。

それを受けて箒が一夏に文句を言う。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

ヒロはその後セシリアが参加して三人で漫才をしている一夏を見ながら地上に急降下、完全停止をウイングスラスターで行った。

ちなみに以前、一夏が箒に教えてもらった時は、効果音だけで全然わからないのだった。

「織斑、武装を展開しろそのくらいは自在にできるようになっただろっ」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はい！」

「よしはじめる」

それとともに一夏が《雪片弑型》を展開する。

その速度は1秒ぐらいだった。通常、これら武装もIS展開同様に0.5秒でできるのが望ましい。しかし初心者としてはよい方だった。

「どうやら、大分慣れてきたようだな。次はオルコット。武装を展開してみろ」

「はい」

次にセシリアが一瞬でついていた六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』を展開する。その速さは0.5秒と上出来だった。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるよ

うにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な」

「直せ。いいな」

「……はい」

セシリアの弁解は認められなかった。

「次はユイ……と言いたいがお前の機体は量子変換がIS展開時のみだったな。ならいい。オルコット。近接用武装を展開しろ」

「えっ、あ、はいっ」

心の中で文句を言っていたみたいでセシリアの反応が遅かった。セシリアはレーザーライフルを収納してショートブレードを展開しようとするが上手く形にならない。それは本人があまり使わないからである。

「まだか？」

「すぐです……。ああもう！インターセプター！」

ヤケクソ気味に叫んで武装を形成する。セシリアはかなり悔しそうな顔をしていた。

ヒイロと戦った時も使ったかなり前から用意していたからショートブレードを呼び出すのは苦手なのだろう。

「……どれだけかかっている。実戦で相手に待ってもらうつもりか？」

「……………以後気をつけます」

ヒロとの戦いでプライドの一部を捨てている彼女は自然とそう答えた。

「練習あるのみだ。……………時間だ。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

ヒロは解散と言われたのでふと一夏の方を見た。
一夏はグラウンドの穴を塞ぐのを手伝ってほしいような目でヒロを見つめる。まるで雨の中捨てられた子犬のように。

セシリアと箒は既にいなかった。ヒロは無言のまま一夏に近づき、

「……………さつさと終わらせるぞ、一夏」

「……………ゴメン、ヒロ」

手伝った。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

その日の夜、学園の正面ゲート前に一人の少女がいた。
小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持ち、長い黒髪を高い位

置でツインテールで纏めた少女はゲートを通り敷地内をずんずんと進んでいく。

「えーと、受付は・・・本校舎一階総合事務受付・・・・・・・・どこよそれ」

上着から出したメモをポケットに突っ込み案内出来そうな人を探す。一瞬ISを展開して探そうかと考えたが日本が誇るあらゆる法律を乗せ、時には某北海道のどこかにあるレストラン、グナイアでバイトをしている小っちゃいの大好き主人公の姉の武器にもなる全書を上回る厚さの学園内重要規約書を思い出してやめた。

転入が済んでいないのに外国でISを展開したら外交問題に発展する恐れがある。それだけはやめてくれと情けない顔をして少女に懇願していた政府高官や軍関係者（叔父）が少しも不憫だと思わないのがこの少女だった。

（・・・元気かな、あいつ）

力や年齢で偉そうにする男や大人が嫌いな彼女。と言っても、この少女は女尊男卑も好きではない。なので好きな男ぐらいいる。今回のIS学園への入学はぶっちゃけそれが目的であった。

「だから・・・でだな」

ふと聞こえてきた声に、『案内役発見！！ラッキー！！』と言わんばかりに反応し声のした方へ向かっていく。

「だからそのイメージがわからないんだよ。何だそのクイツて感じは」

「・・・クイツて感じた」

「だあもうそれがわからないんだって。ヒイロも『体で覚える』しか言わねえし・・・って待てって篤!!」

向かった先にいたのは 再開を待ち望んだ少年。

その姿を視界に捕えた時少女の鼓動はギアを上げたようにペースを速めたが、彼の隣にいる女の子、そして彼がその女の子の名前を呼び親しそうにしているのを知って彼女の感情は氷点下まで下がった。そして目からは光が消えている。

外から見ると頭が逝った人にも見えた。

それからすぐ受付は見つかった。

彼を目撃した場所のすぐ近くが本校舎だったからだ。

「では、これで転入手続きは終わりです。IS学園へようこそ、ファン凰
リンイン鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉が届かないほど鈴音・・・以後愛称の鈴と呼ぶが、鈴は不機嫌だった。

「織斑 一夏って何組ですか？」

「織斑くんは一組ね。凰さんは二組だからお隣よ。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。織斑先生の弟さんだけあるわね。あと一組と言えばもう一人男子がいるのよ」

鈴はそれについて聞かされていた。

日本の倉持技研の新プロジェクトのテストパイロットの一人が男でそのISがとてつもない力を秘めていると軍部から・・・しかし、今の鈴にそんな話は関係ない。

「二組のクラス代表ってもう決まってますか？」

「決まっているわよ」

「誰ですか？」

「え、ええと・・・聞いてどうするの？」

事務員は鈴音の様子に疑問を感じて戸惑うように聞いた。

「クラス代表を譲ってもらおうかと思って」

そのにつこりとした笑顔のこめかみには血管がばつちりと浮いていた。

それを見た受付の事務員は涙目になっていたのだった。

「というわけです！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「」「」おめでとー！！」「」

ものスゴイ勢いと量で乱射されるクラッカーと三十人を超す女子達

の洗礼を受ける一夏。

クラスメイトとの唱和と共に、食堂で行われる織斑一夏クラス代表
就任記念パーティーが始まったのだ。

無論、一組の人数は現在31人（一夏、ヒロ入れて）なのだが・
・それを超える女子がいるってことは他のクラスまたは先輩たちが
紛れ込んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

周囲の女子が各々盛り上がってる横で、当の一夏は深いため息をつ
いていた。

「・・・・・・・・・・随分深いため息だな」

その声を聴いて振り返るとヒロがゴップ二つを持ったまま一夏を
見ていた。ヒロは参加するつもりはなかったが、本音に捕まり、
連れてこられたのだった。

「ん？ああ・・・・もらっていいか？」

「好きにしろ、これは本音に押し付けられたものだ」

2人で座ってジュースを飲む。

ヒロもこういうのはあまりしなかったので自身でも不思議な感覚
に襲われていた。

（・・・・・・・・・・悪くはないがな・・・・）

と内心思っているのでもいいのだが、一夏の様子をみてヒロはつぶ
やいた。

「・・・・・・・・クラス代表、気に入らないのか・・・・」

「気に入らない………というのはちょっと違うんだよな。まあ元々やりたいかやりたくなかったかと言えば、やりたくはなかったけど」

「……負けたのに、結果、クラス代表だけは自分の方に転んだのが納得いかないのか？」

「ああ、そんな感じだな」

「……この立場を利用して、強くなれ一夏。お前は戦い的时候が一番集中している。戦っている時が一番成長している。だから利用しろ、お前が求めるもののためにもな」

ヒロがそう言うで一夏は

そうだな……そうだよな……とつぶやき、やる気を出した。二人が沈黙を保ちながら目の前のポテトを食っていると鏡をかけた女子がやってきた。リボンから察するに彼女は二年生であった。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑 一夏君とヒロ・ユイ君に特別インタビューをしに来ましたー！」

オーと盛り上がる女子一同。食堂にいる全員の注目をいまや集めている一夏。

気づいたらそわそわした様子のセシリアや、ぶすつとした顔でお茶を飲んでいる箒が一夏の近くに陣取っている。ヒロは箒がその時ものすごい形相をしていたので変わってやったのだった。

「あ、私は二年の^{まゆすみ}薫子^{かおるこ}。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

ずっと差し出された名刺を受取る一夏とヒイロ。そして名刺を受取るはずいとい今度はボイスレコーダーが迫って来た。一夏からしてみればこの学園に来てインタビューされるとは思ってもみなかった。

「ではではずばり織斑くん！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「え〜っと・・・皆の期待に応えて頑張ろうと思います」

「え〜。もっと良いコメントちょうだいよ。『俺に触るとヤケドするぜ！』とか！」

随分ネタが古く、今時漫画でもそんな台詞使う奴いないのに使う薫子。

それに対して一夏は・・・

「自分、不器用ですから」

と高 健の有名なセリフで対抗した。

「うわ、前時代的！！・・・じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

捏造・・・っておい！！と言っ反応を示すこの場全員をスルーする薫子・・・かなりやり手だ。

「ユイくん、同じ男子としての一言！！」

ヒロはそう言われてもインタビューはされたことはない。

元々、今ではまだ協調性があるが、昔は皆無だったので、そう言うのにも無視していた。

なので、戸惑いを感じていたが、とりあえず・・・

「・・・俺は・・・俺のやるべきことをやるだけだ」

と言った。

「ふん……。じゃあっ適当に捏造しておこう」

「・・・・・・・・」

ヒロは無言で薫子を見つめ・・・いやにらんだ。

「あははは！冗談だつて。そんなに驚かなくてもいいじゃない。そんなじゃ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「あまりこういったのは得意ではないのですが仕方ないですわね。

コホン、では何故今回私がクラス代表を辞退したかとm「長くなりそうだからいいや。こちらで捏造しておくから」さ、最後まで聞きなさい！！」

マスメディアの鏡にも置けないような発言をしまくる彼女はどうしたのか・・・

一夏とヒロは呆れていると

「じゃあ最後に専用機持ちで写真撮っちゃおう。セシリアちゃんと織斑ちゃんとユイくんそこに並んで」

黨に言われたので三人で並ぶ。

（あ、あの後で一夏さんとのツーショットいただけませんか？）

（ふむ……。今度織斑くんの情報くれるなら）

（交渉成立ですわー！！）

（毎度あり〜）

・・・セシリアが黨と何やら話していたがヒロは無視することにした。興味もないし、何より……………邪推な気がするからであつた。

「じゃあ撮るよ〜。 $35 \times 51 \div 24$ は〜？」

「74。375だ」

「ヒロ……。なんで一瞬で答えられるんだ？」

と一夏が聞いている時に写真のシャッターが切られた。ちなみに写真にはここに居る全員が入っていたもちろん一夏の隣は筈だった。

「あ、あなたたちねえっ！」

セシリアが騒いでいたけど周りの女子は

「いいじゃんいいじゃん」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出としてさ」

と言った。

その後、パーティーは十時過ぎまで続いた。ちなみにセシリアが一夏とツーショットを撮ろうとして他の女子と騒ぎになったのは言うまでもない。

ヒイロは初めて、戦闘以外で疲れた。女子のテンションが異常で体力はあそこまであるのか・・・と信じられなかったからだ。そして普段とは考えられないこと・・・たとえばポテトをもった女子30人がヒイロに『あゝん』をしようとしたりなどがありヒイロの体力は限界に来ていた。その日は研究室に戻ってそばに簪が作業をしていたがそのまま通り過ぎでベットにダイブ。すぐに眠りについた。簪はヒイロに近づき布団をかけてやった。ヒイロは本来訓練で自分に近づくものがあると目が覚めるのだが、最近は殺気を感じたときだけになったので簪は簡単に近づくことができた。そして・・・

「ちゃん」

と言ったのだった。

翌日、何とかパーティーの疲労から回復したヒイロたちは、席に着くなりクラスメイトに話し掛けられた。

「織斑くん、ユイくん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「そう、中国の代表候補生だつて」

このIS学園の転入はかなり厳しく、試験だけでなく国からの推薦も必要なのであるのだが・・・中国の代表候補ならあり得る。

ヒロとしてはその情報源がどこかは気になるところだった。一方、一夏は

（中国か・・・あいつ、どうしてるかな・・・）

とかつてのセカンド幼馴染を思い出していた。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

今日も腰に手を当て髪をもう片方の手で流すセシリアがヒロたちの後ろから登場した。

イギリスの女性・・・いや、ヨーロッパの女性はこの動作は癖なのだろうか？とヒロはかつて、同じような仕草をしていたドロシーを思いだしていた。

「このクラスに来るわけではあるまい。騒ぐ必要は無い」

いつの間にか箒も近くに来ていた。一夏、ヒロの席から箒の席まで4mはあるはずだがレポートでも使ったのだろうか？

「それよりも、来月はクラス対抗戦だろう」

「そうですね、一夏さん！是非一夏さんには勝ってもらわないと。ですからより実践的な訓練をするために、この私、セシリア・オルコットが相手を努めさせていただきますわ」

普通の生徒が訓練機を借りるのには申請、許可、整備に一日費やしてしまうから専用機を持っているセシリアや明らかにこの中では一番強いヒロにやつてもらった方がいいだろう。

「男たるものなら勝ってみせろ一夏」

「一夏くんが勝つとクラス皆が幸せだよ！」

「フリーパスのためにも！」

「今年から2対2だからヒロンもおやつのために……」

優勝クラスには学食デザート半年フリーパスが配られる。そして今年からより実践的にするために各クラスの代表とその補佐役が出場する。

一組は一夏と補佐役のヒロなので本音はヒロの後ろから抱きついてお願いした。

ヒロはそれをゆっくり引きはがす

「専用機持っているのはあと四組に一人と二組の早瀬さんぐらいだから楽勝だよ！」

「おつ」

「・・・・・・・・了解した」

と一夏とヒイロは答える。しかし・・・・・・・・

「その情報、古いよ」

「「・・・・・・・・！？」」

急に声が聞こえた。ヒイロは気配から気づいていたが他は気が付いていなかった。

そして、一夏にとってはどこか懐かしい声が聞こえたような気がした。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」

声の主・・・、教室の入り口で腕を組み片膝を立ててドアにもたれている女子を一夏や周りを見る。

「鈴・・・・・・・・？おまえ、鈴か？」

そこにいたのは一夏にとって中学の時別れたっきりの・・・。

「そう、二組代表になった中国代表候補生 ファン 鳳 リンイン 鈴音!!。今日は
宣戦布告に来たってわけ。久しぶり、一夏!!」

小さな笑みを浮かべ、トレードマークのツインテールを揺らす一夏のセカンド幼なじみこと鈴がそこにいた。

第08話 転校生はセカンド幼馴染（後書き）

感想・・・たくさんほしいな

みなさんどしどしおくってくださいー！

第09話 あなたの過去は？（前書き）

お待たせしました！！
それではどうぞ！！

第09話 あなたの過去は？

「そう、二組代表になった中国代表候補生 ファン 鳳 リンイン 鈴音！！。今日は
宣戦布告に来たってわけ。久しぶり、一夏！！」

「何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ！なんてこと言うのよ、アンタは！！」

そう言つて再開の喜びの笑みを浮かべながら一夏と話を始める鈴。
箒、セシリアは一体この少女は一夏とどういう関係なのか、・・・
仲が良いのはわかったのだがおかげで二人のボルテージは上がる一
方だった。

ヒイロはこの少女の事は弾・・・一夏のバイト先で親友の五反田
弾から聞いていた。写真も見ていたので覚えていた。なので鈴の後
ろの人物に気づき声をかけた。

「・・・・・・ ファン 鳳 リンイン 鈴音、そろそろ教室に戻った方がいい。
後ろに・・・」

「なによ！？」

ヒイロにそう言い返す鈴の頭に出席簿アタックが決まる。鈴はもの
すごく痛がり、そして後ろを振り向きながら文句を言った。

「なにするのよー！！」

そこにいたのは・・・・・・鬼だった。

「SHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

この鈴は千冬と言うとんでもない鬼がとても苦手なのである。
それを目の前にして、鈴はおびえる子猫のようになってしまった。

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません・・・また後で来るからね！逃げないでよ一夏！
！」

「さつさと行け」
「は、はい！！」

そして扉の前に立っていた鈴はそのまま教室にダッシュで戻って行った。

「ってかあいつ、代表候補生だったのか・・・。初耳だぞ」

と一夏が言う。ヒロも鈴の事は一夏、弾に聞いた範囲しか知らないで知らなかった。セシリアとは違い、鈴に関しては政府主導ではなく軍主導なので情報が規制されているからであった。無論・・・ハッキングすれば話は別だが・・・

「・・・一夏、今のは誰だ！？えらく親しそだったが・・・？」
「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で！？」

いまだに騒いでいる筈とセシリア。そんな二人には鬼の出席簿が火を噴いてしまったのだった。

「おまえのせいだ!!」

「あなたのせいですわ!!」

昼休みに入るなり開口一番に文句を言われた一夏。

というのも理由は二人が授業中に真耶と千冬に散在（教育的）指導をくらっていたからだが、原因が一夏と鈴との関係で二人がやきもちを焼いたことである。（筈はその後、同室であることを思い出し、にやにやして出席簿アタックをくらっていたが・・・）

ヒイロも一緒に来ている。ヒイロはおそらく昼休みのどこかで鈴は一夏に会いに来ると思い、彼女が何者なのか、自分の目でまずは見極めようと考えたのだ。

「ヒイロ、今日何食べるつもりだ？」

「カロリーメイ」

「お前の飯は俺と同じな。勝手に買っておくぞ」

と一夏とヒイロのよくある会話を繰り広げながら食堂に向かってみると・・・

「待ってたわよ一夏！」

ドーン!!と戦隊ヒーローの登場の如くエフェクトが出そうな勢いで一夏たちの前に立ちはだかり、待っていたのは鈴だった。手にはラーメンが鎮座しているトレーを持っている。

だがそのラーメンはすでに面が汁を吸いこみ始めていた。

「伸びるぞ？」

「う、うるさいわね。あんたを待ってたんでしょが!もっと早く

来なさいよ！」

無論人間はどこぞのスーパーな金色サルのように瞬間移動はできないし、どこぞの対話をしようと機動兵器に乗って、量子レポートする人類の進化形みたいにもなれない。授業を終えてすぐに来たのだからこれが限界であるのにそう言われた一夏は内心呆れていたが、話を変えることにした。

「にしても久しぶりだな。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたこそどうなのよ」

「俺はずっと元気だぜ？皆勤賞ものだ」

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンツ！一夏さん、注文の品が出来ましてよ？」

鈴との会話に夢中になっていた一夏は定食が用意されていることに気が付かず、鈴と仲良くしていることにおもしろくないセシリアはワザとらしい咳をして一夏に伝えた。

食堂のおばちゃんから料理を受け取り、空いていた席に座る一夏たち。ヒイロは一夏の隣のテーブルに筈たちと座った。一夏は鈴と同じテーブルに座り、再び話し始める。

「いつ帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。あんたこそ、何IS使ってるのよ。びつくりしたじゃない」

無意識のうちにいくつも質問を投げ掛けていく二人。

だが、やはり面白くないのは筈とセシリアだ。二人は急に立ち上がり、そして机をたたいて聞いた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！まさかこちらの方と・・・つつ・・・付き合ってたしゃるの！？」

二人はトゲのある声で一夏に詰め寄る。他のクラスメイトも興味津々とばかりに頷いていた。ヒイロは無表情でご飯を食べていた。だがヒイロも鈴の人間性を知るために耳を立てていた。

「べ・・・べべべ、別に付き合ってる訳じゃ・・・」

鈴は顔を赤くしながらゴニョゴニョと声をこもらせる。そこで空気を読まない男、一夏は言う。

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「幼なじみ・・・？」

鈴が一夏を睨んでいるが、本人は理解できず・・・そんな二人をほっといて箒は一夏の質問の答えを再び言った。一夏再び答える。

「そうか・・・その時には箒はいなかったんだっただな・・・箒が引越したのが小四の終わりだろ？鈴はその後転校してきたんだ。で、中二の終わりに国に戻ったんだよ。いわば箒はファースト幼馴染、鈴はセカンド幼馴染って奴だな。鈴、こっちが篠之乃 箒。前に話した小学校からの幼なじみで、俺が織斑先生と通っていた道場の娘だ」

「ふうん・・・、初めまして。これからよろしく」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人の間に火花が散ったようにヒイロに

は見えた。最近、皐月と一緒に寝る時間を削って（実際はヒイロのみ寝る時間を削っているのだが）ツインバスターライフルの出力制御装置開発を行っているせいか疲れからついには幻覚を見るようになってしまったのか？と本人は思っていた。決して嫉妬から来るものではないだろう・・・ヒイロはそう考えることにした。

（・・・俺自身・・・よくわからない感情だからな）

「ンンッ！私のことを忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、^{ファン}鳳 ^{リンイン}鈴音さん？」

セシリアは毎度おなじみのポーズをとり、鈴に言うが・・・

「・・・誰？」

と鈴は本当に『あなた誰』みたいな顔でセシリアに言ったのだった。

「なっ！？私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさか、ご存じないの！？」

「あたし、他の国には興味無いもん」

「なっ、なっ、なっ・・・！？わ、私はあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたし勝つよ。悪いけど強いもん」

鈴はあっけらかんに答える。

（昔っからこうなんだよなこいつ。妙に確信じていてしかも嫌味のない言い方をする）

素でこうなのだと一夏は心の中でそう思った。

しかし、箒は箒を止め、セシリアは拳をわなわなと震わせている。

これ以上空気が悪くなる前に一夏は話題を変えようとしたときにヒイロが立ち上がって鈴の目の前に行ったのだ。

すでにご飯を食べ終えており、問題はなかった。何よりさっきの会話の一連で鈴は一夏に害をなす存在ではないと判断したからだった。

「……ファン 鳳 リンイン 鈴音……お前の事は居候先の一夏や五反田 弾から聞いている。」

「弾から！？それに居候って……道理で一夏とも仲好さそうだし、あたしの名前を知ってたのね」

「そう言う事だ。……ヒイロ・ユイだ、よろしく頼む」
「よろしくね、ヒイロ」

五反田 弾と言う一夏、鈴の知り合いとヒイロは知りあっていることで鈴の警戒心も薄くなっていた。

「ねえ、一夏、あんたクラス代表なんだって？」

「成り行きでな……」

「ふーん……。ね、ねえ。あたしがISの操縦訓練付き合っ
てあげようか？」

「そりゃたすか」

ダンッ！！と大きく、そして再び机から音が発せられる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。一夏に頼まれたからな」

「これは一組の問題ですわ。二組が出る幕はありませんわよ」

「あたしは一夏に聞いているの。あんたたちは黙ってて」

全員が全員、一夏の名前を強調する。ふつう見たらわかりやすい感情なのだが、一夏、ヒイロはよくわからなかった。

「それもだけどさ、一夏、今日は放課後予定空いてる？久しぶりにどこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとか」

「あそこ去年潰れたぞ。ていうか今日はヒイロと模擬戦があるんだ。」

「そうだぞ。私との特訓もあるからな」

と篤が言うと一夏は『え！？』と言う顔をした。篤の特訓の話は聞いていないからだ。無論ヒイロも聞いていない。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて特訓が必要ですもの。専用機持ちの私も参加させていただきますわ」

さらにセシリアまで参戦し事態はさらにややこしくなってきた。

「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、一夏！」

食べ終わった食器を片付けて食堂を出ていってしまう鈴。一夏は断ることもできなくなり・・・啞然茫然とする。

「一夏、特訓が最優先だからな」

「私たちの有意義な時間も使っていることもお忘れなく」

そんな空気も読まず、残りの2人は一夏にそう言うのだった。

結局、その日一夏の訓練は幕とセシリアが行った。ヒイロは最初やるうとしたが『私をおいてご飯食べに行ったなんてひどいよ〜ヒイロン〜』と泣きながら腕に抱きついてきた本音やその友達によって寮の食堂でお菓子パーティーに近い状態でお菓子を食べさせられた。ヒイロとしては食べてみて『・・・意外とおいしい』というのが感想だった。ちなみに一番好きなのはワラのマーチだった。その後、そのままご飯となり、そしてそのまま食堂で本音に捕まってお喋りと言う名の一方的な話（内容はお菓子）を本音の部屋で聞かされてしまった。

ヒイロにとって今までない経験で少し疲れたが、きつとこれが本来の10代後半の生活なんだと悟っていた。

ヒイロが寮の廊下を歩いているとその時、走ってくる少女がヒイロにあたり、壮大にこけた。ヒイロは簪のときと同じように手をさしのばす。

「大丈夫か・・・ん・・・泣いているのか？ファン 鳳 リンイン 鈴音」

さしのばすその先は泣いている鈴であった。

「う、うるさい！！なんでもないわよ」

「・・・一夏と何かあったのか？」

「あんたには、関係ないでしょ！！」

「・・・そうだな、関係ない。だがこういう時誰かに言った方がスッキリすると『アイツ』から聞いた。お前がこうしていると一夏が落ち着かないだろう」

と言うがヒイロはなぜか鈴と話してみたいと思った。さっきの本音の会話が自分でも信じられないくらい面白かったのかもしれないと自己分析した。

鈴はすべてヒロに話した。

鈴が一夏の事が好きで、相部屋の簾に部屋を変われと言ってきたこと、一夏に昔交わした約束を憶えているかと聞いてみるとあらぬ間違え方をしている自分は必至な思いで言ったのに腹が立ってひっぱたいて出てきたところだったと。

なぜヒロに話したのか・・・鈴もわからなかったがヒロなら公言はしないと思ったからだろう。

ヒロは鈴の横で壁にもたれかかりながら腕を組んで目をつぶって聞いた。

「・・・ヒロ？」

「・・・すまない。俺にはそう言う経験がないから何とも言えん」

ヒロは大切な思春期を殺してまでコロニーのために作戦行動をしていた。恋愛ごとにはとても疎いのだった。

「そつか・・・じゃあ・・・アンタさ？特別な感情を持った相手なんていた？」

「・・・特別な感情だと？」

「アタシはさ・・・一夏と一緒にいると、胸の奥が暖かくなるのよ。そしてアイツが・・・誰か違う女の人と仲良くしていると胸が締め付けられるように痛く感じて・・・まうちよっと周りが見れなくなるのよ、ヒロはそんな気持ちになったこと・・・ある？」

鈴は自分でもどうしてヒロにこんな質問をしたのか判らなかった、でも聞きたかった。

ヒロは鈴に言った。

「・・・あつた」

鈴はヒイロの言葉に気が付いた。それは・・・【過去形】であること・・・

ヒイロは話を続ける。

「彼女は・・・初めてあつた時は任務の妨げになると思っていた。しかし出会いを重ね、彼女の事をドンドン知って行くうちに・・・殺そうなんて思わなくなった、むしろ彼女がこの先どのような生きて、自分の理想を実現していくのか見たくなっていた、多分・・・お前が一夏に抱いている感情と同じものだったんだろう」

「・・・・・・・・」

鈴はその話を聞き続ける。このヒイロにこう言わせる女性は一体どんな人なのか思った。しかしそれよりこの内容が【過去形】になっていることが一番気になっていた。だから鈴は・・・

「俺にもこういう感情はよくわからない、カトルなら何か判るかもしれないがな・・・・・・・・」

「そう。・・・・・・・・ねえ・・・なんで」

「

なんで・・・・・・・・過去形なの・・・・・・・・？

と聞いてしまったのだった。

その後ヒイロは鈴と別れ、自身が寝泊まりしている研究室に行った。そこにいたのは一枚のディスクを持ってヒイロに差し出してくる簪だった。ヒイロはそのディスクを見て・・・

「・・・何のつもりだ？」

「えと・・・これ・・・ISの基本武器情報のデータ・・・参考になるかなと思って」

そう聞いてヒイロはディスクを受け取り、

「いいのか？」

「うん。・・・使って・・・」おにいちゃん『」

と簪はつぶやいた瞬間、はっとした。今の発言は無意識にしまったものだからだった。簪は恥ずかしいそうな顔をして下を向いた。

「お兄ちゃん・・・人違いだ。お前には姉がいるだろう」

とヒイロはいい、簪の肩を叩く。そして耳元で

「……………感謝する」

とつぶやき、研究室の奥にいった。簪はその姿を後ろから眺めていた。尊敬の目で…………

その後、4時間後、忘れ物した簪は研究室でヒイロがソファで寝ていたので膝枕をしたりした。その監視カメラから見られていることも知らず…………

また、ヒイロも起きていることも気づかずに…………

あれからしばらく経ち、5月となったが一夏と鈴の事態はあまりよろしくなかった。

一夏は何度か鈴と顔を合わせることがあったが露骨に顔を背けられ、日増しに不機嫌になってきている。聞こうにも地雷原の如く近寄れないのだ。だが鈴は時々ものすごく悲しい顔で何かを考えている。その様子が見えるのも一夏は気づいていた。

来週からクラス対抗戦が始まるのでアリーナの整備の都合上今日の特訓が最後だった。

そのクラス対抗戦の一夏の初戦の対戦相手は鈴と皐月だった。

今現在、ほぼいつものメンツ、箒、セシリア、一夏、ヒイロで第三アリーナへ向かっていた。ここ数日はずっとヒイロと模擬戦、セシリア、箒、そして『あの人』と特訓していて今日も行っからだ。

「待っていたわよ、一夏！」

驚くことにアリーナのピットに入った先には鈴がいた。

腕を組みふふんと不敵な笑みを浮かべているが、昨日まで怒り心頭だったがこういう心境の変化なのだろうか？

ヒイロはその様子を見ていた。

「貴様、どうやってここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あたしは一夏の関係者だから問題ないわ。むしろ部外者なのはあんたたちよ」

鈴の強気な姿勢に箒とセシリアがキレかかっているが、鈴はそれを無視している。

かなり根性があるようだ。

「で、一夏、反省した？」

「反省も何も、おまえが今まで避けてたんだし自分が納得出来ずに謝れるか」

「なっ！？あんたまだわかってないの！？」

「説明してくれなきゃわかんねえだろうが！」

「せ、説明って・・・、したくないからこうして来てんでしようが！」

（なんじゃそりゃ。意味わかんねえよ。無理をしても流石にこの道理は引つ込まねえぞ）

と考える一夏。鈴も考え、そして言った。

「じゃあこうしましょう！クラス対抗戦、勝った方が敗けた方に何でも言うことを一つ聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

「わ・・・わかったわよ！！その代り、全力でぶちのめしてあげる。首洗ってまってなさい」

そう言って鈴はアリーナから出て行った。その時、ヒイ口の顔を見ってしまった鈴はまた複雑な顔をした。

「鈴・・・大丈夫なのか？」

「・・・いくぞ一夏」

ヒロはそう言い、一夏は後ろをついて行った。

鈴は前の・・・ヒロと話した夜の事を思い出していた・・・

(どうして・・・・・・ヒロ・ユイ・・・アンタには何があるっていうの?)

と考える彼女・・・何故なら、その原因はその時の一言だったからだ。

あの日、最後に聞いたのが・・・

「そう。・・・・・・ねえ・・・なんで・・・なんで・・・
・過去形なの・・・?」

だった。ヒロは鈴の目を見てこう答えたのだった。

「・・・・・・したからだ」

俺が・・・殺したからだ

ヒロはそうつぶやいたのだった。

第09話 あなたの過去は？（後書き）

次回はクラス対抗戦です・
感想待っています！！

第10話 クラス対抗戦（前書き）

今回はものすごいボリュームでお届けします・

第10話 クラス対抗戦

あれから数日がさらに経ち、ついにクラス対抗戦の日になった。

「まさか最初から鈴が相手か」

ピットにて一夏、ヒイロ、箒、セシリアがいた

何かばやいている一夏の目にウィンドウが開きISの情報が表示されて真耶が説明する。

『^{ファン}鳳さんのISは『^{シェンロン}甲龍』 織斑君と同じ近接格闘型です』

すでにフィールドで待機している鈴の映像も同時に公開された。

鈴の機体は中国製第三世代機『^{シェンロン}甲龍』。両肩のスパイク付き非固定^{アンロ}浮遊装甲が特徴的で、手には大型の青龍刀『双天牙月』が二本柄を繋ぎ合体された状態で握られている。

だが、それよりも一夏や箒たちが気になっていたのが・・・

『そして、補佐の速瀬^{はやせ}さんのIS『ガンダムアテナ』です』

ヒイロと同じ全身装甲のIS、皐月の『ガンダムアテナ』だった。装備は隠しているのかこの段階ではわからないが、周りから大きな騒ぎ声が聞こえるのでかなり注目されている。

「わたくしの時とは勝手が違いましてよ、油断は禁物ですわ」

「硬くなるな、練習の時と同じようにやれば勝てる」

箒とセシリアが一夏にアドバイスする、そこにヒイロも言った。
ヒイロのウィングゼロの手には前にヒイロが使った実弾のロングラ

イフルがあつた。これは本来通常装備のツインバスターライフルの代わりと言う事で特別に許可が出たのだった。

「基本、『ガンダムアテナ』の相手は俺がする。お前は鈴音に勝つことだけを考えろ、・・・危ないときは援護する」

「・・・ああ！！白式、いくぜ！！」

「・・・出撃する」

そうして二人はアリーナに出たのだった。

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促されて、一夏、ヒイロと鈴、皐月は空中で向かい合う。その距離は5メートル。ISなら一瞬で距離を詰めれる距離だ。一瞬たりとも油断できない距離。この5メートルの空間に居るだけでやけにピリピリとした空気や緊張感が一夏は押し掛かって来るのが感じられた。

「一夏、今謝れば少しは手加減してあげてもいいけど？」

「そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、シールドエネルギーを突破出来る攻撃力があれば絶対防御に関係なく本体にダメージを与えられる。意味わかっているわよね」

一夏はわかっていた。それは事実で操縦者のみにダメージを与える装備は競技規約違反で禁止されているが、規約を守っている装備で『殺さない程度にいたぶる』ことは可能であることを。

鈴の口振りから恐らく鈴はそれが可能なんだろうと一夏は確信していた。

けれど、一夏は負けられないと思っていた。

『試合を開始します』

ビ ツ！

合図とともに一夏と鈴が動き、雪片式型と双天牙月がぶつかり合う。

「やるじゃない、初撃を防ぐなんて。でも・・・せいっ!!」

「ぐあっ!?!」

鈴の連続攻撃に一夏は展開されている雪片式型で何とか受け止めるがやはり鈴の方が有利に進んでいる。ヒイロはアテナの攻撃を自慢の機動性で回避しつつ飛び回り、逃げていたがここに来て一夏がピンチになっていたのでロングライフルを鈴に向けて放つ。

弾丸は鈴の双天牙月を持つ手に当たりそうになるが、鈴の甲龍シェンロンのハイパーセンサーに反応があり、紙一重で回避する。

「くっ・・・ウイングゼロ!!」

鈴がヒイロの方を見ると、すでにライフルを左手に持ち替え右手でサーベルを抜いて接近し鈴と競り合う。その様子を見た皐月も複合兵装シールドガンブレード『烈斬』を呼び出し、ヒイロの後ろから攻撃しようとする。だが・・・

「皐月!! 後ろ!! 一夏が!!」

「なっ!!」

いつの間にか、一夏は皐月の後ろに回り、皐月の肩にキックを食らわせる。

「ぐう!!」

ヒイロも鈴に右主翼を動かし薙ぎ払う事で鈴からダメージを取る。
その間に離脱、そのまま後ろに飛ばされている皐月を後ろからすれ
違いさまにサーベルで斬る。

『^{シエンロン}
甲龍』

ダメージ34 残りシールドエネルギー564、装甲 右胴体損
傷軽微

『ガンダムアテナ』

ダメージ214 残りシールドエネルギー550、装甲 左肩損
傷軽微

と二機のハイパーセンサーの表示に出てくる。

「鈴落ち着きなさい、ガンダムの相手は同じガンダムの相手の私が
するわ」

「わかったわ」

皐月と鈴がそう言うと同時に動き、鈴は双天牙月で一夏に猛攻する。
一方、皐月は『烈斬』の五十二口径機関砲でヒイロを一夏から遠ざ
ける。ヒイロもマシンキャノンで対抗する。

火花を散らしぶつかり合う一夏の刃と鈴の刃。青龍刀と呼ぶにはあ
まりにもそれにはかけ離れている形状の両先端に刃を持つ鈴の得物
は見た目通りの重みのある一撃を繰り出し一夏の雪片ごと弾き飛ば
してしまう。

（駄目だ！！さっきので気づいたけど、やっぱり接近戦では鈴の方
が一枚も二枚も上手だ！あれを使うか？・・・いや、駄目だ。）

雪片式型の特殊能力・・・零落白夜を使用すれば一撃の威力ならまず鈴に負ける事は無いだろう。白式の零落白夜の一撃は現存するどの兵器よりも接近戦では遥かに上回る威力を持っている。でも、それを代償に自身のシールドエネルギーを大きく消費して稼動するため、使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもある。そう何度も使う事は出来ない。ただでさえ雪片式型でもエネルギーを消費しているのだから。

どう動くべきか一夏は悩やむが先ほどやられている鈴がそれを許してくれる筈も無く容赦無く追撃しかけてくる。両端についたその刃を利用し自在に角度を変えてくる斬撃は、一夏に応戦する隙すら与えず絶えず襲い掛かってくる。

「くそっ！」

「一夏・・・っ!!」

「あなたの相手はわ・た・し」

一夏の焦りの声にヒイロは再びロングライフルを鈴に向けるがそれを皐月は実体槍でロングライフルの軌道を変えヒイロは誤射した。それで済んだらよかったのだが・・・

「いくわよ」

「!!」

いきなり槍の先端からビームがでて、接触していたロングライフルが破壊された。

これが『ガンダムアテナ』のビーム発生デバイス装備型実体槍『アマノスホコ天之瓊矛』の力である。実体槍の刀身にビーム発生デバイスを内蔵し、ゼロのビームサーベルからデータを引用して作られた。ビーム兵器はエネルギー消費が激しいので、刀身の根元にエネルギーを内包したカートリッジを六発入れるリボルバーを装備。ビームの形状

固定までは再現出来なかったので相手に突き刺して機体から信号を送り、ビームを射出する。一発につきカートリッジ一つ消費し高い威力を示す。

ヒイロはそのまま壊れたライフルを臍月に投げつけ、翼で一気に上昇する。

「ヒイロー!!」

「・・・問題ない、来るぞ」

一夏とヒイロの秘匿通信の間に鈴は一夏に近づく。一夏は少し距離を取ろうとするが、

「甘い!」

鈴がそう言うのと甲龍の肩装甲の非固定浮遊装甲がスライドして開く。アンロックユニット装甲が開かれて中心の球体が姿を晒すとその球体は輝き始め、その光は極限にまで強く輝いた瞬間、一夏は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

（な、んだ・・・!?）

「今のはジャブだからね」

（牽制の後は本命と決まっている。やばい・・・!!）

と一夏が思った時にはすでにドンっという鈍い音が白式から聞こえた。

「ぐあっ!!」

再び見えない衝撃に殴られ、一夏のシールドバリアーを貫通して痛みが身体を襲う。エネルギーもかなり消費し、白式のエネルギーは

この段階で250を切っていた。

「何だあれは・・・？」

モニタールームでモニター見る筈が呟く。その疑問に答えたのは同じモニターを見つめるセシリアだった。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけ、砲身を形成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

筈はそう聞いて心配そうにモニターを見ていたのだった。

「驚いたわ。この龍砲をこうも避け続けるなんて。砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

鈴の言う通り、一夏は龍砲を何とか避けていた。砲弾が見えないのはまだしも、砲身までもが見えないのはきつい。しかもどうやらこの衝撃砲、砲身斜角がほぼ制限無しで撃てるようだった。真上真下はもちろん、真後ろまで展開して撃ってくる。弾は銃口から飛び出してくる物だと言う概念に囚われている一夏には全方位に撃つ事が出来る砲身に警戒して避け続ける事しか出来ず、反撃の糸口を見つけれないでいた。

（ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせているが、これじゃ遅い。撃たれてからわかっているようなものだ。何処かで先手を打たなければ・・・）

ぎゅっと右手に持つ雪片式型を握り締める。雪片式型が持つ『バリアー無効化攻撃』。

（やはり今回もこれに頼るしかないのか・・・）

一夏がそう考えている隙に皐月がシールド装備ボウガン型エネルギー砲『烈洗』で一夏を攻撃した。こちらと同じく倉持技研の最新作で左腕に取付けるボウガン型エネルギー砲。連射は効かないが一発の威力はレールガンに、速度はレーザーに匹敵する。ガンダニウム合金製物理シールドを表面に装備し、弓の部分はアテナが伴う梟の翼のイメージで未使用時には折り畳める武器だ。一夏はそれに気づき回避するが

「フフ・・・もらったわ」

皐月がそう言うその後ろに鈴が龍砲を構えていた。

「しまった!!」

「終わりよ!!」

鈴が衝撃砲を放ったが、その二人の間に翼を前に展開したヒイロが割り込み、身代わりになった。しかし、翼にはほんの少し汚れただけでは無傷だった。

それもそのはず、ウイングゼロの翼はシールドの役目をしているのでガンダニウム合金も何重にしているかなり強いものを使用している。龍砲の一発ぐらいでは変形したりしない。

「一夏……思い出せ。俺との模擬戦後に言ったことを」

ヒイロは秘匿通信プライベート・チャンネルそう言っているとビームサーベルで皐月に斬りかかる。

一夏は動き回りながら模擬戦後の事を思い出していた。

『なあ、ヒイロ。どうやってみんなは射撃とか躲してんだ？』

『……人それぞれだと思うが基本は銃身と砲口の角度、そして引き金を引く瞬間を見ることで判断しているだろう。後は視線や気配だ』

『視線？』

『人間、無意識のうちに目標とする部分を見る性質がある。……相手の視線を見れば何処を狙っているかわかる』

『ふーん……』

その言葉を思い出し、一夏は鈴の視線を見ると……

（間違いないエ。人間としての視界に入るうちは目で追っている……なら、『あれ』を使うしかない）

一夏はそう結論付けると動き回り龍砲からクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回で逃げ回る。

一方ヒイロと皐月の方はヒイロが優勢だった。いくら武装が優れて

いる皐月でも歴戦の兵士のヒイロ相手にダメージを取れないのが現状である。しかしヒイロも優勢と言ってもマシンキャノンで少しづつ与えてるだけでなかなかエネルギーを減らせていない。ツインバスターライフルが使えないことで武装、機体性能両方をみてウイングゼロの方が武装が少なすぎて有効打を与えられない状態である。損傷覚悟の本当の戦いならヒイロは接近してサーベルで終えている。しかし、ウイングゼロのシールドエネルギーはものすごく少ないのでそれはできない。よってなかなか決まらないでいた。

だが、ここで一夏が自分の間合いに鈴を入れた。それも今まで見たことのない動きで。

その様子を見ていた皐月は驚きを隠せなかった。

イグニッション・ブースト

「な！！瞬間加速！？いつの間におぼえたの？」

「千冬直伝だからな・・・隙だらけだぞ」

イグニッション・ブースト

瞬間加速

ISの後部スラスター翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する技術だ。一夏は鈴が衝撃砲を撃った瞬間に避け、一気に使って雪片が届く範囲に接近したのだ。

そして隙が生まれてしまった皐月にヒイロも接近する。そして二人がトドメを刺そうとした時だった・・・

突然、爆音とともに衝撃が走った。そして土煙が上がり、その中から『何か』がアリーナのステージ中央にたたずんでいた。さっきの爆音は『何か』がアリーナの遮断シールドを貫通して入って来た衝

撃波だった。

「な、なんだ！？何が起こって・・・」

（一体何が起こっていった？今の衝撃は一体・・・。事故か？いや、遮断シールドを貫く程の威力がある何かが発生する程の事故って何だ？）

状況も分からず混乱する一夏に、鈴からオープン・チャンネルが繋がる。

「一夏、試合は中止よ！すぐピットに戻って！」

鈴は焦っている口ぶりだがけれど冷静にそう言った。

一夏は何をいきなり言い出すのか。鈴にそう思った瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています

「なっ

」

アリーナの遮断シールドはISと同じ物で作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入し、しかも此方をロックしてきている。混乱する頭で漸くそれを理解するとぶわっと嫌な汗が一夏から噴き出した。

唯でさえ鈴たちとの戦闘で消耗していると言うのに遮断シールドを貫通する程の攻撃を受ければひとたまりも無い。

「お前はどつするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって・・・女を置いてそんな事出来るか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

一夏は苦虫を食ったような顔をした。真実であることを自覚し、なにもできない自分にいらだちを感じたからだ

「別に、あたしも最後までやり合うつもりは無いわよ。こんな異常事態。すぐに学園の先生達がやって来て事態を収拾」

警告！敵ISから高エネルギーを確認

ハイパーセンサーからの警告に一夏はつとして所属不明のISを見る。すると、所属不明のISはエネルギーを充填して紫に輝く右手を持ち上げて鈴を狙っているのに漸く気付く。そして、鈴はそれに気付いていない。

「あぶねえっ！」

一夏は間一髪、鈴の体を抱きかかえて回避したが、その直後にさっきまでいた空間が熱線で砲撃された。当たったらひとたまりもないだろう。

「ビーム兵器かよ・・・・・・しかもセシリアのISより出力が上だ」

ハイパーセンサーの簡易解説でその熱量を知った一夏は、もし避けずにあのままあの場に居たらと想像してぶるりと身体を震わしてしまふ。

そしてその攻撃によって土煙が晴れる。そこにいたのは・・・全身装甲のISだった

「ち、ちよつと・・・離さないよ・・・」

「ん、ああ！悪い。怪我無いか？」

一夏は腕を離すと、何だか恥ずかしそうにして離れる鈴。それはそうだろう。

大好きな一夏にお姫様だっこに近いことをされたのだから。

「だ、だいじょうぶ。・・・アンタが守ってくれたし」

「当たり前だろ。それくらい」

「ど、どうして？」

「そりゃ、あんな攻撃受ければ危ないのは分かりきってるからだろ？自分だけ助かるうなんて薄情な真似できるかよ」

「こ、こいつは・・・はあ、アンタらしいわ」

警告！敵ISからエネルギー充填を確認。

2人のISが警告音を発する。

「来るぞ！避けるっ！」

「言われなくても分かってるわよ！」

再び放たれるビーム。それをどうにかかわすと、ビームを撃って来たISがふわりと浮かび上がって来た・・・。

「なんなんだ、こいつ・・・」

一夏はそう言った。

なぜなら姿からして異形だったからだ。深い灰色をしたそのISの手が異常に長くつま先よりも下まで伸びている。しかも首という物がない。肩と頭が一体化している様な形になっている。そして、何

より特異なのは、その『全身装甲』だった。

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。何故なら必要無いからだ。防御は殆どはシールドエネルギーによって行われている。もちろん防御特化型ISで、物理シールドを搭載している機体もあるが、それにしたって1ミリも露出していないISなんて聞いたことが無いのだ。

しいて言うならヒロのガンダムもそうだがあれは絶対防御がない代わりの装甲だ。しかしこいつからはシールドがあることがわかる。そしてその巨体も異常だ。腕を入れると恐らく2メートルはするであろうその巨体は。姿勢を保持する為なのか全身にスラスタ・口が見える。頭部には剥き出しの無秩序に並ぶ複数のセンサーレンズ。腕には先程のビーム砲口が左右合計4つあった……。

「お前、何者だよ」

「……………」

オープン・チャンネル

一夏は通信で問うが当然、返事は返って来ない。謎の乱入者は一夏をただ黙って見てくるだけだ。

「織斑くん！！鈴！！」

皐月が大声で二人の名前を言う。

皐月は急いで二人の援護に行こうとしたときすでにものすごいスピードで向かっていく者がいた。ヒロである。

「任務変更……内容、所属不明敵ISの撃退、及び織斑 一夏の護衛」

ヒロが再びビームサーベルを抜き、全身装甲のISに接近しようとする。しかし先ほど開けられた穴からビームがふりそそぐ。

ヒイロはそれを回避したが、皐月は少し被弾してしまい、残りエネルギーが300を切った。

その穴からはオーカー（黄土色）を基調とした全身装甲のISが30機もやって来たのだ。その姿にヒイロ驚きを隠せなかった。なぜならそれは・・・

「ビルゴ？だと！」

そう、ヒイロの世界にいたMS・・・ビルゴ？だったのだった。ヒイロはビルゴ？の猛攻を回避する。

「これでもくらいなさい」

皐月は色気ムンムンに言いながら30機いるビルゴ？の1機に『烈斬』の五十二口径機関砲と『烈洗』のビームアローで攻撃するがビルゴは両肩に8基搭載している円盤をだし、自身を何かのフィールドで包まれた、そして皐月の攻撃はすべて無効化された。それを見たヒイロは

「プラネイトディフェンサーまであるのか」

とつぶやいた。

プラネイトディフェンサーとは円盤から出るのフィールドジェネレーター。強力な電磁フィールドを発生させ敵のビームを弾く防御用兵器。対ビーム防御用に開発されたがマシンキャノンやミサイルなど実体弾・物理的衝撃にも有効でジェネレーターは分離後それぞれ独立して行動し、防御範囲を自在にコントロール可能。密度を高めればビームサーベルの斬撃すら無効化するとんでもない装備である。ただし耐久力は有限でありウイングゼロのツインバスターライフル級のビームに対しては数秒の防御が限度である。

しかし、ISの武器は基本威力が高いものは用意できないので無敵の楯となってしまった。

ISの武器で唯一いけるのはバリア無効化の雪片ぐらいだろう・・・

「臯月、奴らには接近戦・・・それも実剣で挑め。まだ攻撃が通る可能性がある・・・後、俺のそばから離れるな」
「わ・・・わかったわ」

そう言ってヒイロと臯月はビルゴの大群に挑んだ。

『織斑くん！凰さん！ユイくん！早瀬さん！今直ぐアリーナから脱出して下さい！！すぐに先生達がISで制圧に行きます！！』

プライベート・チャンネル

突然4人の秘匿通信一で割り込んで来たのは真耶だった。心なしかいつもより声に威厳がある。

真耶の脱出しろという言葉は一夏たちの身を心配しての事なんだろうけど。それは出来ない理由があった。

「いや、先生達が来るまで俺達で食い止めます。いいな、鈴」
「誰に言ってるのよ」

ニヤリと余裕の笑みを浮かべる鈴。

（ああ、お前はそう言う奴だよ）

一夏も鈴の返答にニヤリと笑みを浮かべる。

『お、織斑くん！？だ、駄目ですよ！生徒さんにもしものことがあったら』

真耶の言葉は敵ISの攻撃のよつて最後まで聞く事無く終わつてしまふ。身体を傾けての突進を一夏と鈴は左右に分かれて回避する。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

一夏と鈴の横並びになつてそれぞれの得物を構える。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしか無いんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

近接武器しか持たない一夏とでは、鈴の役割はどうしてもそうなつてしまふだろう。

「じゃあ」

「いくぞっ！」

一夏と鈴を引き割く様に飛んできたビームを避けて一夏と鈴は異形のISに目掛けて飛び出した。

一方ヒイロも真耶に言う。

「これは俺にしか倒せない。奴らにはプラネイトディフェンサーがある。ゼロの攻撃力がないと無理だ。後は任せろ・・・」

『ゆーユイ君！聞いていますか！？』

そう言つてヒイロは通信を切つた。

真耶が大声でプライベート・チャネルで呼び掛ける。チャネルは声を発する需要が無いのだがそれほど真耶は焦っていた。

「山田先生、本人がやると言っているのだからやらせればいいだろう」

「織斑先生！！何を呑気なことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲んで糖分を補給しろ」

「・・・あの、それ塩ですけど・・・」

手を止め自分がコーヒーに入れようとしたものを見る。そこには確かに『塩』と書かれていた。

「・・・何故塩があるんだ」

「さ、さあ・・・。あつ！織斑くんのが心配なんですわね！？やっぱり弟さんですか・・・ら・・・？」

真耶は感じ取った。

（あ、これまずいかも・・・）

千冬は黙ったままである。だがイヤな沈黙が流れていた。この部屋には千冬と真耶、そして最初からここで試合を観戦していたセシリアと篝だけだ。他の先生は避難誘導等に向かっていた。

「山田先生。これを飲むといい」

背後に般若の幻影を出しながらにつこりとした笑顔で真耶にコーヒ―を押しつける。

それも真耶の目の前で塩をドバドバと入れながらにだ。

「えっ、でも、それ沢山塩が・・・」

「どうぞ」

「いや、その・・・」

「・・・どうぞ」

「い、いただきます・・・」

ついには押しつけられたコーヒー（ほぼ塩）。真耶は自分を責めつつ必死でこれをどう処理するか悩んだ。

「一気に飲むといい」

千冬のこの言葉は真耶にとって死刑宣告と同義だった。

そう言われたせいで真耶は一気に飲まされ、ボウエと言う謎の叫び声と一緒にリバーズした。

そこにセシリアがこう言ってきた。

「織斑先生！私にIS使用許可を！！」

「無理だな。これを見る」

そう言って表示したのはアリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・。全てのハッチが封鎖・・・。
あのISの所為ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かう事も出来ないな」

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。
遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

「はああ・・・。結局、待っている事しか出来ないのですね」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって！？」

セシリアには信じられない言葉だった。しかし、千冬は淡々と言う。

「お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」
「そんなことありませんわ！このわたくしが邪魔などと」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定している？連続稼働時間」

「わ、わかりました！もう結構です！」

「ふん。分かればいい」

「はあ・・・言い返せない自分が悔しいですわ・・・」

降参のポーズでセシリアが溜め息を吐きながらベンチに座る。

千冬も正気ではいらなかった。自分の大切な弟が命がけの戦いをしている。気が付けば抑え切れない心がせわしなく画面を叩かせる。明らかに動揺、もしくは焦っている。それを抑えられないでいた。自分は何もできないことに。セシリアに自分も言える立場ではないなと心で感じていた。だから・・・

（頼む・・・ヒイロ、一夏を・・・）

千冬の目線の先にはモニターに映るビルゴ？とサーベル同士で競り合うヒイロのウイングガンダムゼロだった。

しかし、ここで気づくべきだった。・・・筈がいつの間にかいなくなっていたことに・・・

ヒイロはビルゴ？と交戦していた。敵にはシールド防御もないのでサーベルで斬りさける。ヒイロはビルゴ？と交戦して、あることに気が付き、皐月に言った。

「皐月・・・こいつらに遠慮はいらない・・・これはMDだ」
「MD？なんなの？それ」

皐月には聞いたことのない単語だった。ヒイロは簡単に説明した。

「集団で行動する無人機だ」

モビルドール（MOBILE DOLL）とは、”MOBILE Direct Operational Leaded Lab or” の略称であり、かつてヒイロのいた世界・・・アフターコロニーでは軍事組織OZに採用され、その生産ラインを奪ったコロニー側の革命組織ホワイトフアングによっても運用された。他のパイロットの戦闘データをもとに作られた戦闘アルゴリズムが組み込まれ、完全な自立行動がとれる他、外部からの遠隔操作も可能で人間を遥かに超える反応速度、人体が耐え得る以上の高G機動が可能であり、精密無比な攻撃力と併せ、初期には有人機を圧倒、ガンダムでも悪条件下では、あえなく敗れることもあった。

しかし、ヒイロにとっては戦いなれた奴らなので楽ではあったが問題は今もまだまだ投入されてくることだった。

現に、10機落しているが、10機あの後また同じ穴から入ってきたからだ。

皐月は烈斬の実剣で攻撃するが、やはりMD相手に戦うのは初めてで反応速度で負けてしまう。ヒイロはそんな皐月をかばったりして戦っているのでシールドエネルギーはすでに0であった。

一方、一夏たちも苦戦していた。

「くっ………！」

一撃必殺の間合い。けれど、一夏の斬撃はするりとかわされてしまう。これで一夏は絶好のチャンスを5回ぐらい逃してしまっている。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！！」

鈴が激を飛ばすが、それでも避けられてしまうのだ。普通では避けられる筈も無い速度と角度での攻撃をあの全身に付けられたスラスターが回避を可能としているのだろ。あれのおかげで何処からの奇襲でも対処出来ているのだ。そして、そのスラスターの出力もまた尋常ではない。零距离から離脱するのに一秒もかからない。化け物のようなISだった。

（まずい。シールドエネルギー残量が。バリアー無効化攻撃を出せるのは、よくてあと一回か……）

「一夏っ！離脱！！」

「お、おうっ！」

敵は攻撃を避けた後、必ず反撃に転じてくる。しかもその方法が無茶苦茶だった。でたらめに長い腕をぶんまわして此方に接近して来るのだ。まるでコマのように。しかも高速回転の状態からビームを撃ってくるのだから一夏たちの手に負えないのだった。

「ああもっつ！めんどくさいわねコイツ！」

鈴は焦れたように衝撃砲を放つ　　が、しかし、敵の腕が見えない砲撃を叩き落とした。どうやら、見えないものもセンサー等で感知していると一夏と鈴は考えた。

（どうする？どうする！？鈴との戦闘のダメージ、そして奴にかわされ続けて消費したエネルギーの事を考えると・・・）

一夏たちはマズイ状況になっていた。それは・・・

「・・・鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つとところね」

そう、エネルギー切れである。ヒイロのゼロと違い、シールドエネルギーで動くISはエネルギー切れをすると動けなくなる。

ここで鈴が一夏にばやいた

「・・・かなり厳しい状況ね。今のあたし達の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁いくんじゃない？」「ゼロじゃないならいいさ」

「あつきた。確率はデカイ方が良いに決まってるじゃない。アンタって良く分からないところで健康第一っていうかジジ臭いけど、根本的には宝くじ買うタイプよね」

「うつせーな・・・。俺は宝くじ買わねえよ！俺はくじ運弱なんだ！」

「うわっ！やめてよ。疫病神。こっち近づいてくんない」

しっしと近づいて来るなと一夏に言ってくる鈴。

「ふざけるのはこの辺にして・・・どうするの？」

「逃げたければ逃げて良いんだぜ？責めたりしないし逃げ切れるま

で守ってやる」

（女を守るのは男の役目だからな。まあ、鈴がそのままやられっぱなしで逃げる様なタマじゃないって事は知ってるけどな）

と一夏は心のなかでそう思う。案の定、鈴は

「なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ」

と答えたのだった。

「そうか。じゃあ、お前の背中くらいは守らせてくれ」

「え？あ。う、うん・・・ありが「鈴！避ける！」ひゃあ！？」

再び鈴目掛けて放たれたビームに、鈴は慌てて回避行動をとる。しかし、それで一夏はあることに気が付いた。

（会話中は攻撃してこないから油断してたな・・・ん？会話中は攻撃してこない？どうしてだ？絶好の攻撃する機会なのに・・・）

「・・・なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？コマとか言うんじゃないでしょうね？」

「それは見たまんまだろうが。何て言えばいいーのかな・・・
・ロボットって言えばいいのか？機械ばいっていうか」

「ISは機械じゃない。何言ってるんのアンタ？」

あんたバカあ？みたいな顔をする鈴。一夏はムツとしながらも話を続ける。

「そう言うんじゃないくてだな。えーと・・・あれって本当に人が乗

つてるのか？」

「は？人が乗らないとISは動かな

」

とそこまで言っつて鈴の言葉は止まる。

「　　そう言えばアレ、さっきからあたし達が会話してるときつてあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があつて聞いているような……うん。でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういう物だもの」

『ISは人が乗らないと絶対に動かない』

一夏もそれは教科書で読んだ。ISは人が乗らないと絶対に動かない。しかしそれは本当なのだろうか？ISは今だ不明な所が多い存在。絶対なんて言いきれる筈がない。まだ説明されてないその部分に、それを可能とする物があるかもしれないのだから。そして、それを公表しなければ誰もその存在を知らないまま。一夏はそう推測したのだ。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機だったら勝てるっていうの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦無く全力で攻撃しても大丈夫だしな」

全力攻撃……それは『雪片式型』の力を最大に引き出す単一仕様ワンオフ・アビリティ能力、『零落白夜』のことだ。それはあまりにも威力が強すぎて訓練や学内対戦で全力……零落白夜をフルパワーで使う訳には無理だが、無人機なら最悪の事態を想定しなくてもいいからだつた。

ヒイロはガンダニウム合金が雪片の攻撃に多少耐えられるから使用した。

それに、一夏には一つ策があった。

「全力も何も、その攻撃が当たらなきゃ意味無いじゃない。分かっているの？今まだアンタ一度も攻撃を当てて無いのよ？」

「次は当てる」

一夏にはその自信があった。自分が考えた策が上手くいけばきっと奴に必殺の一撃で斬り伏せる自信が。

「言い切ったわね。じゃあ、そんな事絶対に有り得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか。で？何を企んでるの？」

「ありゃ、バレてたか」

「何年アンタの幼馴染やつてると思ってたのよ。アンタが何か企んでることくらいお見通しよ。あたしは何をすればいいの？あたしはこれと言って策なんて考えてないし、とことん付き合ってあげるわよ」

鈴がそう言う。流石は筈よりも長く一夏と一緒にいた幼馴染と言ったところなのだろう。

一夏は鈴にこう言った。

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ。当たらなくても」

（目的は別にあるんだからな）

「じゃあ、早速」

『一夏あああああ！！！』

一夏が敵に向かって突撃しようとしたその瞬間だった、アリーナに
此処に居る筈の無い人物の声が響いたのは・・・。

何事だと思い、一夏やヒロ達はそれぞれハイパーセンサーで中継
室の方を見た。見ればそこには筈の姿があつた。そこにいるであろ
う審判とナレーターはすぐ横で気を失っている。筈が伸してしまっ
たからだ。

そして筈は大声で言った。

『男なら・・・男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんと
する!』

肩で息を切らしながら、一夏に向けて喝を入れる。しかし、当の本
人はビックリした用に目をパチクリしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その声を聴き、謎のISが筈の方を向いて攻撃態勢を取った。

一夏は死の恐怖とは違う何かが襲い急激に体温が低下するのが分か
った。そして、言葉に表し様の無い感情が爆発した。

「鈴! やれえええええっ!」

「わ、わかった!」

一夏の気迫に圧されてながらも鈴は衝撃砲を構えて射撃体勢に入る。
しかしその射線上に一夏が躍り出た。このままでは一夏に衝撃砲が
当たる。

鈴は大声で慌てながら言った。

「ち、ちよつと馬鹿! 何してんのよ! ? ときなさいよ!」

「いいから撃て！」

「ああもうつ……どうなっても知らないわよ！」

そう言つて鈴は衝撃砲『龍砲』を発射した。

高エネルギー反応を背中に受け、一夏はミシミシと言う音がする痛みに耐えながら瞬間加速のエネルギーチャージを行った。
イグニッション・ブースト

先ほども言つた通り、瞬間加速はISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する技術だ。しかしそれは外部からのエネルギーもスラスタから取り込めば使用でき、またエネルギーの量に比例して出力が上がる。

一夏は衝撃砲の莫大なエネルギーを使つて一気に加速した。

「うおおおおおおおおおつ！！！」

俺の咆哮に呼応して、右手に持つ雪片式型が強い光を放ち始める。そして、ヒイロの時と同様に全身が金色のオーラに包まれる。

零落白夜の使用可能。エネルギー転換率90%オーバー。零落白夜発動

ハイパーセンサーがそう告げていた。

加速中、ISが加速Gを軽減してくれているとは言え、一夏の身体にさらに軋むような痛みが走る。

それでも一夏は敵に向かって突っ込む。

そしていつの間にかビルゴ？をすべて倒しきつたヒイロから秘匿通
ンネル信が入る。

「行け……一夏」

その一言が一夏に力と、勇気を与えた。

（俺は・・・千冬姉を、箒を、鈴を、そしていつかはヒイロも・・・俺に関わる人すべてを・・・守る！！）

必殺の一撃は、敵ISが箒に向けて突き出していた右腕を切断した。しかし、その反撃で左拳をモロに受ける。そして敵ISは零距离からの砲撃を一夏にしようとする。

箒と鈴が声を上げる。しかし一夏はしてやったと笑っていた。なぜなら・・・

「・・・狙いは？」

『完璧ですわ！』

そんなISの通信と同時に青い複数のビームが無人機ISを撃ち貫く。観客席からセシリアによるブルー・ティアーズの狙撃が入ったからだ。あの時、一夏は零落白夜の力で遮断シールドを破壊した。そして、敵ISのシールドも破壊していた。そんな状態での狙撃を喰らえばひとたまりもない。無人機ISから小さな爆発が起こり、

地面に倒れ込んだ。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

「セシリアならやれると思っていたさ」

『そ、そうですね。とっ当然ですわね！ なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！』

「ふう。何にしてもこれで終わ」

「一夏、まだだ!!」

敵ISの再起動を確認。警告。ロックされています

「!?!」

ヒロロからの通信と警告音で一夏は振り返る。片方だけ残った左腕。それを一夏に向けていた敵IS。

次の瞬間、迫り来るビームに向かって一夏は

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

突進した。そして、真っ白な視界の中で雪片が相手の装甲を切り裂く手応えを感じながら一夏は意識を失った。

「一夏!!」

鈴が倒れている一夏に近づく。セシリア、皐月も一夏に向かう。鈴に至っては泣いていた。

ヒロは、この時、自分に腹を立てていた。千冬に一夏を守ると約束したのにそれを果たせなかった。ヒロはいつの間にか強く拳を握っていた。

しかし、敵は待つてはくれなかった。

再び穴から今度は50機のビルゴ？とそして一夏たちがやっとの思いで倒したあの謎のISも再び現れた。

「ま・・・またですの」

「も・・・もうエネルギーが残ってないわ」

セシリアと皐月はそう言った。すでにエネルギーが残っているのはセシリアのみ、絶望的な状況だった。

それでも鈴は泣きながら恨む目で謎のISを見ていた。

「よくも・・・よくも一夏を！！」

鈴がそう叫ぶがすでに鈴もエネルギーがなく、どうしようもできない。

謎のISが鈴たちに向かって右腕のビームを放とうとする。しかし・・・

轟音と主に山吹色のビームが謎のISの腕を飲み込み破壊した。空を見上げるとヒロが右手のバスターライフルが敵に向けられていた。

「鈴音、一夏を連れて離脱しろ。遮断シールドはさっきので破壊されて観客ももう逃げたようだ。セシリアが入ってきたところから行け。箒、お前もだ。皐月はそのISを回収しろ、調べる必要がある。セシリアはこいつらの護衛だ」

ヒイロはそう言う。

しかし、セシリアが反論した

「ちょっと待ってくださいまし、ヒイロさんはどうするつもりですか。それにこの沢山の敵から逃げるのは無理に等しいですね。また私が入ってきたところも瓦礫でもう通れませんのよ」

「なら、俺が相手をする。その間に上から逃げろ」

そう言つてヒイロは通信でアリーナ全体に言う。
オープン・チャンネル

「このアリーナに残っている全員に言う。これより、バスターライフルを使用する。教職員含め全員ただちにここから離れる」

ヒイロはそう言いながら、ビルゴ？に向かう。ビルゴ？10機は一斉射撃を行うが、ヒイロはさっきとは考えられない反応速度で光の矢の雨の中を無傷でかいくぐる。

ウイングゼロの胸元の緑の水晶体は光がともっていた。

「俺の敵・・・俺の仲間を傷つけるもの・・・そして、俺から大切なものを奪うもの・・・すべてが俺の敵だ！！ゼロ・・・俺を導いてくれ！」

ヒイロの目にはかつて見なれた映像が映っていた。それはかつてMSとしてのゼロに会った半球のモニター。

そして、それが起動する音がヒイロの耳に入った。

そう、ウイングガンダムゼロが最強の名を得ている理由・・・ゼロ
システムの起動音だった。

第10話 クラス対抗戦（後書き）

次回、ヒロ無双！！

ゼロシステムって本来は起動しなきゃなんですけどね・・・こついう風にしないと後々きついで許してください．
感想お願いします

第11話 未来を見せるシステム（前書き）

うわ．．．．

今回はいろいろ波紋が呼びそう．．

でも感想はたくさんほしいのでお願いします．

第11話 未来を見せるシステム

上空からのビルゴ？10機が放つメガビーム砲やビームライフルの雨をウイングゼロは無傷で避けながら上昇していく。それは普通の人間ではありえない反応速度でかわしていた。

そして、ビームサーベルでビルゴ？の1機を一撃で真つ二つにした。

ゼロシステム………

正式名称「Zoning and Emotional Range Omitted System」。直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」というのだが、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結末を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うところ、勝利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構である。

コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによって得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状リーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミー・マークーのみで戦闘行為を行う。

ただし、これはMSの時の話である。ISとなった今はシステムのオンオフができるようになり、そしてシステムがオフのときは目で敵を捕らえていた。今はシステムが起動してるので脳に直接伝わってくる。目でリーダーを見ているだけだ。

そして、このシステムは時に人の未来まで見せることもある。

ただヒイロはこれを今まで使わなかった理由はビームサーベルを見

てわかるだろう。そうすべてが一撃で殺傷できるほど武器の威力が上がっているのだ。そもそも、ゼロシステムが提示する戦術とは、基本的に単機での勝利を目的としたもので、目的達成のためであればたとえ搭乗者の意思や倫理に反する行為も平然と選択する。状況によっては搭乗者自身の死や機体の自爆、友軍の犠牲もいとわない攻撃など、非人間的な選択が強要されることもあり、これがパイロットの精神に多大な負担をかける。そのため、ただゼロシステムを使うだけでは、システムに命令されるがまま暴走するか、もしくは負荷に耐え切れず精神崩壊・廃人化を招く恐れがある。そのため、このシステムを使いこなすには、自身の感情をコントロールし、かつシステムの命令を押さえ込むだけの強靱な精神力が要求されるのだ。このゼロシステムの特徴で敵は殺すものと判断されるので強制的にすべての武器がリミッターが外れ、一撃で大けが、或いは死に至らしめる可能性があるのだ。

ヒロがサーベルで次々とビルゴ？を破壊していく。ヒロの後ろのビルゴ3機は同時にメガビーム砲を3方向から放つ。

「ヒロ危ない!!」

地上で一夏を抱きかかえたままの鈴が叫ぶ。しかし・・・

「フッ・・・」

とヒロは鼻で笑い、体を少し動かす。

すると、そのことによってできた3か所の隙間からビームが抜けそのままヒロの目の前にいたビルゴ？にむかう。急なことによりヒロの前にいたビルゴ？はプラネイトディフェンサーを展開する前に当たり損傷、その隙にヒロはすごいスピードでサーベルで倒す。

そのままものすごい勢いでビルゴを破壊する。ビルゴの攻撃をただ避けるのではなく避けたまま違うビルゴに攻撃をし、破壊する。まるで未来が見えているような動きをしていると鈴やセシリア、皐月は思った。

ヒイロは実際にゼロシステムでビルゴの動きを完全に予測していた。勝つための未来を見せる力・・・これこそがウイングガンダムゼロが最強と呼ばれる所以だった。

わずか1分・・・それもサーベルだけでビルゴ？を20機破壊したゼロをモニタールームで千冬と真耶は驚きを隠せなかった。二人はこの動きの原因がヒイロが秘匿したあの「Zoning and Emotional Range Omitted System」の力だとすぐに理解した。

「か・・・勝つための未来を見せるシステム。もしそんなものがあったら・・・」

「・・・奴は・・・化け物か」

千冬は戦場で舞う天使の力に恐怖さえも感じていたのだった。

ヒイロがいまだに戦闘を続けているとついにビルゴ？の1機がセシリアの方に攻撃をしようとしてきた。セシリアはブルー・ティアーズで攻撃するが、このビルゴ？は単機でプラネイトディフェンサーのフィールドが自身を覆うぐらいの全方位に展開できるので防がれていた。しかしヒイロは援護しようとしない・・・なぜなら・・・

(やはりな・・・)

ヒイロはそう思った。

ここで強力なビームがビルゴを飲み込み、破壊まで行かないが一撃でプラネイトディフェンサーをダメにした。そうそれをしたのは片腕をなくしたあの謎のISだった。

「おかしいわね」

皐月がそうつぶやく、セシリアもそれに同意した。

「ええ・・・おかしすぎますわ。なぜいきなり守ってくださいったのでしょうか」

「そいつは守ったわけではない。ただ今のターゲットがビルゴと俺に変更されているからだ」

ヒイロは増援で40機増えたビルゴ？を相手にしながら通信でそう言う。ではなぜそうなったのかセシリアがそれを聞こうとしている時に通信が入る

『ヒイロ！！聞こえるか！？』

「箒か・・・どうした？」

箒オープン・チャンネルが通信で話しかけてきた。ヒイロはいまだにビームサーベルで戦っていた。ヒイロは箒の通信を待っていたのだった。

『たった今、生徒全員の避難が完全に完了した。残っているのはモニタールームにいる織斑先生と山田先生、それと入り口付近にいる教師部隊だけだ。どうやらアリーナ内に入る扉だけ解除されてないら

しい』

「そうか・・・わかった」

ヒイロは箒との通信を終えると今度は千冬に向けてプライベート・チャンネル秘匿通信を開く。

『千冬・・・今すぐ教師部隊を下がらせる。今度こそバスターライフル・・・及びツインバスターライフルを使用する。巻き込まれるぞ』

『だ！だめですよ！！ユイ君。今から先生たちが解決させますからここは早く逃げて』

と真耶は言うがヒイロは続ける。

『訓練用のISではビルゴ？のプラネイトディフェンサーは突破できない。千冬・・・約束を破った俺が言えるセリフではないが・・・俺を信じる！』

ヒイロは真剣な声ではっきりと言った。

千冬は腕を組み、目をつぶって考えた。そして・・・

『山田先生、教師部隊に撤退命令を・・・ここはヒイロ・ユイに任ずる』

『織斑先生！！』

『ヒイロ・・・後は頼む』

そう言っただけ千冬の通信を終えるのを確認すると、ゼロが未来をヒイロに見せる。それは千冬と真耶が脱出する映像だった。

「・・・これより、バスターライフルを使用する」

ヒイロはビームサーベルをしまうと主翼から格納されていた長大で無骨なデザインの大型ライフルを両手に一丁ずつ合計二丁再び出した。

鈴たちは初めてバスターライフルをしっかりと見た。

「あれ・・・さっきの戦いじゃ使ってなかったわよね」
「そうですね」

鈴とセシリア不思議に思った。さっきの戦い・・・それこそクラス代表決定戦でヒイロがこの武器を使っていたらもつと優位に進めていたはずだ。なのにヒイロはなぜ使わなかったのか。その疑問に皐月が答えた。

「使わなかったじゃないのよ。・・・使えなかったのよ」

「え？」
「さっきはあの謎のISもエネルギーを集中させてたからまだ緩和できたのね・・・」

皐月が意味深なことを言った時だった。どこからかものすごい爆音が響いた。鈴とセシリアは音の方を振り向くとアリーナの遮断シールドどころか観客席に人一人分が通れるぐらいの大穴が開いていた。

「え・・・」

そして、その射線上にいたビルゴ10機が一気に爆発した。何機かのビルゴはプラネイトディフェンサーを張っていたが一瞬で突破されていた。

「バスターライフルはISの絶対防御を突破して人にも大けがさせれるほどの威力なのよ。一般の試合に使えるわけないわ」

鈴とセシリアは開いた穴から目を離せなかった。ISの協定で兵器レベルのものを作ってはいけないのだがこんなものは今のどの国でも作ることではできなかったからだ。謎のISの攻撃もすんなりとかわし、ヒイロは無視しながらビルゴだけ倒し続ける。バスターライフルを照射し続けながらうごいたりして残りビルゴを25機になるまで殲滅した。バスターライフルの射線上にあった壁はもう穴が開きまくっていて煙が立ち上がっていた。

殲滅の天使・・・まさにそのように思えた。

「・・・この隙に上から離脱しろ」

そう言われたので鈴は一夏を、皐月は一夏が破壊した謎のISを抱え上昇した。セシリアは近づこうとするビルゴに『ブルー・ティアーズ』のミサイルタイプの方で牽制する。しかし、プラネイトディフェンサーで防がれてしまう。そうしながらも何とか上の入り口付近で待つヒイロのところまできた。

そこでセシリアが疑問を言う。

「ヒイロさん。どうして自分が開けた穴から出るように言わず、ここから出るように言っただんですか？」

そう、ヒイロが開けた穴から脱出すればいいのだがなぜか上からヒイロは脱出するように言った。

「・・・理由は二つある。一つはこいつをセシリアに運んでもらう」

そう言ってヒイロは横から近づいてきたビルゴ？の頭を振り向かずにバスターライフルでそこだけ打ち抜いた。そしてヒイロはバスターライフルを持ったまま破壊したビルゴ？の手を持ってセシリアに

投げた。セシリアは慌ててライフルをしまつて受け止める。

「何かわかるかもしれんからな。そして二つ目だが……こいつらが上に来るように仕向けるためだ」

そう言うに残りのビルゴ？やその後ろから謎のISがセシリアたちを追って上昇してくる。

そう、これがヒロの狙いだつた。

「戦術レベル、効果最大確認……」

そう言うヒロは両手のバスターライフルを自分の真上に持つていき、連結させて構える。そう……ツインバスターライフルの発射体制に入つたのだ。

「ターゲット……ロックオン」

そして、平行連結された銃口に光が集まり、

「ツインバスターライフル………発射！」

次の瞬間、ツインバスターライフルの銃口から山吹色をした膨大なエネルギー量の極太ビームがアリーナに向かって発射した。直径がIS2機分あるそのビームはかすめただけのビルゴさえも爆発させ、謎のISを地上に叩きつける。地面でぶつかるビーム。その瞬間、爆発し、光がアリーナすべてを飲み込む。

鈴たちは啞然した。あの皐月もさえもだ。

光がなくなつたときにはアリーナは跡形もなくなり、IS学園が誇る5つあるアリーナのひとつが大きなクレーターになつてしまつた。

そして謎のISもビルゴも跡形もなく完全蒸発させてしまったのだ
った。

ヒイロはその光景を目にした後、ツインバスターライフルをしまい
言った。

しかしそのセリフは鈴たちの予想を裏切る、叫び声だった。

「・・・俺の・・・俺のミスだアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「つうう………ッ？」

刺す様な鋭い痛みが全身を走り、一夏は目を覚ました。
目に映った天井は、寮のそれとは違っていた。

「ここは………保健室か？」

自分がベッドに寝かされている事に気が付き、鼻腔をくすぐる消毒液の臭いや横から見える包帯やガーゼつと言ったもので、そこが何処かを理解した。窓からは太陽の光が差し込む。

「あの後、どうなったんだ………？」

再起動した無人機に向かって雪片を振り下ろした そこから
が思い出せない。

「 あの後、再びあのISとロボットが現れたがすべてヒイロが倒した」

「………っ！？ 千冬姉え………痛う！？」

仕切りのカーテンを引いて、姿を見せたのは千冬だった。思わず、

一夏は体を起こそうとしたが背骨に激痛が走り、ベッドに倒れこんだ。

「全身打撲だから、無理に動くな。衝撃砲の最大出力を背中であけた上にあのビームの中に自ら突っ込んだんだ。それだけで済んだ事を幸運に思え。しかもお前絶対防御を解除していたそうだな？よく死ななかったものだ」

「千冬姉え、他のみんなは……………」

「心配するな。みんな無事だ」

「そうか……………良かった……………」

安堵の息を漏らす一夏に千冬はいつもよりずっと柔らかな表情を向けた。それは、世界にたった二人だけ家族にだけ見せる表情だった。

「お前も無事で良かったよ。家族に死なれるのは目覚めが悪い」

「……………その……………ゴメン、心配かけて」

なので一夏は謝る。自分が無茶をして心配をかけたのは間違いないからだ。

千冬は一瞬きよとした後、優しく笑った。

「心配などしていないさ。おまえはそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だが、それは千冬の照れ隠しの一種だとわかっている。一夏には気にはならない。それに一夏は気づいていた。ヒイロが自分を守っていること。そしてそれは千冬が頼んだか、ヒイロを動かせるようなことを言ったんだろうと……………2

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだ

ら部屋に戻っていいぞ。一夏……よく頑張ったな」

実質、最初のあのISを止めたのは一夏だろう。そう考えるとISに2か月ぐらいしか触れていない一夏であそこまでできたのは驚異的だった。だから千冬は最後に一夏に聞こえない程度に褒めたのだった。

それだけ言い残すと、千冬はすたすたと保健室を出ていった。

千冬が出ていったのを感じ、一夏は瞼を閉じた。

（強くなるう……もつと……もつとだ。俺に関わる全てを……守れるように）

そう思っただけでそのまま眠りに入った。

それからどれ程かの時間が経った頃、一夏は顔の間近に人の気配を感じてうつすらと目を開いた。

視界一杯に入ってきたのはツインテールが特徴的な少女
リンリン
鈴音の顔であった。 鳳

鈴は目を閉じて、鼻先三センチの距離まで一夏に迫ってきていた。

「……………」

「……………ッ!？」

バツ！ と、とてつもない勢いで一夏から離れる鈴。その動きはまるで漫画でよく見かける咄嗟に誰かのおやつを食べて隠そうとする程に速かった。

「鈴か……………」

「いや!? 何でもないわよ!？」

声が裏返っているが、寝起きでボ～っとしている一夏には理解出来

ない。

起きていても理解できたかと言われるととても怪しいと思われるだろうが……。

「あー、そういえば試合はどうなったんだ？ やっぱり無効試合か？」

「え、ええ。当然でしょ。あんなことが起きたんだから」

恥ずかしさと気まずさを誤魔化すように、鈴は早口で答える。

「 やっぱりか。あ、そういえば……あの賭けってどうなるんだ？」

「ふえっ！？ し、試合は中止だし……む、無効でいいんじゃない？」

そういえばそうだったと鈴も思い出したのか、顔を赤らめて慌てるが、夕焼けが保健室全体を赤く染めてくれていたお陰で一夏には分からなかった。

もう完全に日は沈み、ただ赤い空が広がるのみだ。ふと、その夕焼けの赤で鈴と約束した時のことが蘇ってきた。たしか、小6のときだ。場所は教室。今みたいに夕暮れに染まっていた。

「正確には『料理が上達したら……あたしの酢豚、毎日食べてくれる？』だったけ。で、どうだ？ 上達したか？」

「え、あ、ううう」

さらりと口走られた言葉に、鈴は夕焼けの赤では誤魔化せない程に顔を赤くして、鈴は右へ左へ視線をやったあと、うつむいた。

決死の想いでした告白を言った相手にリピートされるとか、どんなプレイだ。

「なあ、あの約束つてもしかして、”違う意味”だったのか？俺はてつきりタダ飯を食わせてくれるって事だと思ってたんだけど

」

「ち、違わない！ 違わないわよっ！？ ほ、ほら、誰かに食べてもらったほうが料理つて上達早くなるでしょ！？ だから、そう、だから！ そういう事よ！」

「た、確かにそうだよな。別の意味じゃ『毎日味噌汁を』なんて事になっちまうもんな。いや、深読みしすぎだろ、俺。恥ずかしいな。ヒイ口に聞いてもわからんって言われるしな。」

「へえっ！？ そ、そうね！ 深読みしすぎじゃない！？ あは、あはは、アハハハハハ！！！」

引きつった顔で、鈴はやけくそ気味に笑う。というか完全にヤケになっている。

「こっちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？お前の酢豚だけじゃなくて、また親父さんの料理も食べたいぜ」

「あ………。その、お店は………。しないんだ」

「え？なんで？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから………」

「……。え？一夏の口から間抜けの音が洩れた。そんな一夏かり視線を外し、鈴は窓の外を見遣った。その表情は普段の快活として物とは真逆の暗く沈んだ物だった。

「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいなんだよね」

今にして思えば、あの頃の鈴はひどく不安定だった。何かを隠すように明るく振る舞うことが多く、一夏はそれが妙に気になっていた。

気前のいい親父さんの顔を思い出す。活動的なおばさんの顔を思い出す。家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじゃない。けれど、そうせざるを得ないくらいの、何かがあったのだろうか。

一夏にはそれらしい原因が思い浮かばなかった。けれど、鈴に訊けることではない。一夏はそこまで子供ではないのだから。

「家族って、難しいよね」

鈴の溶けて消えてしまいそうな小さな呟きに一夏は答えることが出来なかった。

一夏にとって家族は姉である千冬だけだ。両親の事は知らないし、知りたいと思った事もない。だから、鈴の言葉の重さを知ることには出来ない。しかし・・・

一夏は無言で鈴を自分の胸に引き寄せた。そして優しく頭を撫でる。手を動かす度に痛みが走るがそんなの気にしない。

「ひつぐ・・・ぐす・・・」

鈴はここで初めて泣けた気がした。

鈴の泣き顔を見ない様に気を遣い天井を見上げる一夏。保健室にはいつまでも鈴の泣く声が哀しく響いていた・・・。

ヒイロは外で腕を組んでその保健室の扉の前で寄りかかってその様子を目をつぶって聞いていたのだった。そして、そのまま歩いて去って行った。

学園の地下、五十メートルの位置に存在する隠された空間。
そこは、レベル4権限の持った者しか入れない場所である。

一夏やヒロ達によって破壊された謎のIS・・・その本当の名『
ゴーレム?』とビルゴ?はそこにすぐさま運び込まれ、解析が続け
られていた。

千冬はモニターに映る戦闘映像を繰り返し見続けながら真耶の報告
に耳を傾けていた。

「謎のISはやはり無人機でした。コアも、登録されていた物では
ありませんでした」

世界中で開発が進むISのそのまだ完成していない技術。リモートコントロール
スタンドアローンと独立駆動。

更に、467機存在するコアは全てが登録済み。つまりは、誰かが
コア作った可能性がある。そんな事ができるのはこの世界に一人し
かない。

この事実に対してすぐさま、学園関係者全員に緘口令が敷かれた。

「それと、織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れてます。修
復は不可能ですね。そして、あのオーカー（黄土色）のISですが・
・あれは・・・」

真耶が言葉を濁す。千冬は何故かと言うのは予測できていたがあえ
て真耶に続きを言うように指示した。そして放たれた言葉は・・・

「あれにはあのISとは全く異なる構造でして・・・なおかつ劣化版のガンダニウム合金、そしてGコアが使用されていました」

「やはりか・・・こいつは一体・・・」

「・・・ビルゴ？だ・・・俺たちの世界で使われていたMDだ」
モビル・ドール

真耶の報告を受けて、千冬が考えている時後ろから声が聞こえた。二人は振り返ってみるとそこにはヒロが普段着で立っていた。

「ヒロ！！どうやってここに・・・いや、今はどうだっていい・・・ビルゴ？はどういう機体だ？」

「俺たちの世界の量産型MDだ」
モビル・ドール
完全独立駆動で反応速度が速く、集団戦法を得意とする。俺もかつては苦戦を強いられた相手だ。どうやらISの方にはMDシステムが内蔵されてないところから見てもこの2体は別々で作られたんだろう。それより・・・すまなかった、お前との約束を守れなくて」

ヒロは頭を下げようとするが千冬に手を前に出してさせなかった。

「お前は約束を守ってくれている。一夏どころか、一夏のまわりのものまで守ろうとしているだからな。これからも頼む。」

そう言っただけで千冬が頭を下げた。

ヒロは一瞬眉を上にあげて驚いたが、すぐに平常心にもどって

「・・・任務了解」

と答えた。

それを見た真耶はここで疑問を発する。

「しかし・・・何故Gコアが・・・」

そう・・・Gコアを搭載してるのは今のところヒイロのゼロのみである。GコアはISコアと違い、コア人格というものがない。そして何より、誰でも操縦できると言う事だ・・・

つまり、Gコアが出回れば女尊男卑は終わりを告げるだろう・・・しかし、それは悲しくみじめな戦争の引き金にもなりかねない・・・だからヒイロや学園上層部はGコアと同じぐらい危険なエネルギージェネレーターの解析は凍結したのだった。

（ゼロの中にはまだ見せていない他のガンダム4機のデータしかなく、ビルゴに関することはなかった・・・）

ヒイロは自身の手首についている緑の水晶が付いているブレスレット・・・ゼロを見た。

ゼロは何も答えてはくれなかった・・・

ヒイロは夕食を本音と食べ、再び研究室に戻ろうとしたとき、すつきりとした顔の鈴に会った。

「あ・・・」

鈴がヒイロの顔を見たとき、声を詰まらせた。その原因は前のヒイロが言った言葉・・・

『俺が・・・殺したからだ』

が気になつていたからだ。鈴は何を言ったらいいか悩んでいるとヒイロから声をかけられた。

「・・・一夏と仲直りできたか？」

「え・・・ええ」

「そうか・・・」

鈴の返事を聞いて納得したのかヒイロはそのまま去ろうとする。その前に鈴は

「ま!!待って!!」

と言つてヒイロの手を掴んだ。そして鈴は覚悟を決めて聞いた。

「なんで・・・アンタにとって愛しい人を殺さないといけなかったの？」

ヒイロは鈴の顔を見る。鈴はものすごく真剣な顔で見ている。

一瞬の刹那がすごく長く感じる。それほど緊迫した空気に2人は包まれていた。

そして・・・

「・・・それしか方法がなかった」

ぽそつとヒイロは言った。

鈴は『え・・・』と言う顔をした。思わず手を放してしまう。そしてヒイロは鈴に真正面を向いて話す。

「俺が行動するのが遅すぎた結果、他の手段がなくなっていた。一人のために、せつかくの好機を逃すわけにはいかなかったんだ・・・

。鈴音・・・お前は、俺のようになるな・・・」

「ヒイロ・・・」

「俺のような・・・もっとも守りたかった奴を守れなかったような奴にな・・・」

そう言つてヒイロは寮から出て行つた。鈴はヒイロも一夏と同じなんだと気が付いた。

守れない自分の不甲斐なさを引きずるつて自分を自分で傷つけている不器用な人間だと・・・。

ヒイロはさっきの言葉で思い出していた。あの最後の戦いを・・・自分も最後は彼女の後を追ひ、死ぬつもりだった。だけど・・・この世界で一夏の生き様を見たくて生きている・・・

（俺も必ず後を追う・・・だが、もうしばらく・・・一夏の未来の行く末が見れるその時まで・・・待っていてくれ・・・）

「・・・リリーナ」

満点の星空の見つめながらヒイロは小さな声でそう言ったのだつた。

「むー・・・」

カタカタカタカタ・・・とキーボードを叩く音が響く。

そこは外界から完全に隔離された空間。日の光は決して入り込まず、無造作に置かれた電子機器の画面から放たれる光のみが空間を照らしている。

その画面の一つに向かい合っている、メカニカルなウサミミを付け『不思議の国のアリス』の主人公アリスと同じ格好をした一人の女性。

自称一日に三十五時間生きる女。ISを開発した張本人、篠ノ之束である。

「あのIS・・・じゃないね・・・明らかにひーくんのガンダムと同族だわ。あれ・・・なんで無人であそこまでの動きができるんだろ？流石は異世界の力ってこと？」

しかし、ここで束でも驚きな事になってしまった。

「マズイな〜これじゃいつくんが『来たるべき戦い』の前に死ぬかも」

『来たるべき戦い』・・・これが何を示すのか今はわからない。だが束はそのために今回の事をしたようだ。

「やはり・・・近いうちにアレを届ける必要があるみたいだね」

そう言つて束はニヤッと笑った。

とある場所で二人の女が会話していた。

『そう・・・ビルゴは全部やられてしまったのね・・・』

『はい』

『それはそうと・・・オーギス1。あなたの機体・・・完成したわ』

『本当ですか!!』

『ええ、その名は』

『』

『ありがとうございます。しかし、今回は何というタイミングでしたね』

『そうね。まさかISの無人機が出てくるとは・・・さて、下がっていてもいいわ。私はまたこの子を使ってGコアを生産しないといけないから・・・』

『はい』

そう言つて女は去る。

そしてもう一人の女は目の前にあるウイングガンダムゼロと同じ大きさぐらいのあるものに目を向ける。その機体の色は赤く、騎士のような感じだった。そしてどこかガンダムに似ていた。

『』

『には「ゼロシステムVer.2.5」を搭載し

たからこれで慣れてほしいわ。そしていつかあなたを使えるようになつてほしいわよね・・・』

『ねえ・・・エピオン』

第11話 未来を見せるシステム（後書き）

感想お願いします．

設定も少し書き加えておきます．

次回は日常編なのである作品のキャラが出てきてギャグ話になります．

この時にアンケートを取りますのでお願いします．

そしてその後はお待ちなのシスコン大将です

それでは次回お願いします

第11・5話 空から生鮭の切り身が降ってくるって・・・日常だよな（前書き

今回は日常編・

ギャグ要素を加えるためにギャグのある作品を取り入れることにしました・詳しくは後書きで

第11・5話 空から生鮭の切り身が降ってくるって・・・日常だよな

あの事件から数日がたった。

学園はビルゴ？の事を隠すことに決め、また密かにプラネイトディフェンサー対策を研究することになった。そのため、一夏やセシリア、鈴、皐月には箝口令が引かれた。

今日は一夏は鈴と遊びに行っている。（と言っても後ろには箒とセシリアもいたので結局4人でだろう・・・）ヒイロもこっそりと付いて行くつもりだったが、これまた本音に捕まり、完全に見失ったのだった。

そこで千冬はヒイロに夏の普段着と携帯を買って来いと言った。

ヒイロはお金を支給されていたが、ほとんどウィダー・イン・リーやカリーメイト、最近ではコアラのーチにも使っているが有り余っていた。また服も緑のタンクトップとジーパン、そして上着しかない。携帯も今まで必要ではなかったので持っていなかった。

そしてヒイロは町にでかけ、普段の格好と同じような感じで揃え、携帯も普通のを購入。財布の中身が5016円残っているが帰ろうと駅に向かっていった。途中中身がない財布（なぜか蛇の皮があつたが・・・）を拾い、周りを見渡しながら進む。

町は活気づいており、人々は笑顔で歩いている。

（・・・いい世界だ）

ヒイロが目指した世界が目の前に広がっている。しかし、それは一部であつてこの世界でもまだ、戦争の火種になる要因がある。

IS・・・インフィニット・ストラトス・・・

本来は宇宙で活動するために開発されたのに、今では兵器と化して

いた。ヒイロは考える。

篠ノ之 東・・・彼女は何のためにISを作ったのか・・・天災と呼ばれ、人間関係がなくなめちやくちゃだった彼女はこの世界に對して絶望しかなかったのだろうか？

そう考えていると目の前にとんでもない顔をした女子高校生が立っていた。

茶色のセミロングヘアで中背のその女子高生は無表情で歩いてくる。向こうはヒイロに気が付かず、肩にぶつかって尻餅をつくがそれでも表情を変えない。

流石にヒイロも気になり始める。昔の彼では考えられないがここでの生活がヒイロに殺したはずの思春期を取り戻させているのかもしれない。

「どうした・・・何かあったのか？」

ヒイロは手を差し出しながら無表情の少女に聞いた。
彼女は小声でぼそっと

「・・・・・・・・財布落とした」

と言った。ヒイロは先ほど拾った財布ではないかと思ったが、その前に聞いておくことがあった。

「・・・・・・・・いくら入っていたんだ？」

「4016円」

「細かいな・・・」

ヒイロはお金には特にこだわってなかったので自分の財布から一瞬で拾った財布の中に4016円を入れる。残り1000円あればここからIS学園には帰れるだろう。そう考えての行動だった。そも

そもヒイロはお金に執着しておらず、少女を哀れに思えたからだっ
た。

「・・・財布っていうのはこれの事か？」

ヒイロは拾った財布を少女に渡す。その財布を見た途端に彼女の顔
が喜びに満ちた顔をする。

「ええ！！拾ってくれたの！？中身は・・・ちゃんとある～～～
！！」

「よかつたな・・・俺は行くぞ・・・」

「待つて！！お礼させてよ」

と言われ無理やり腕を引つ張られた。

ヒイロは嫌な感じにはならなかった。きつとこついうのも思春期に
経験するものの一部なのだろうと思ったからだ。なので彼女に付い
て行く。

彼女と歩く際、いろいろな話をした。

「ねえねえ・・・何歳？私と同年に見えるんだけど」

「・・・16だ」

「え・・・私より一歳上だ。ごめんなさい。生意気な言い方で」

「気にするな・・・お前はどの辺りの人間か？」

「近くの高校に通っている高校1年です。だから家も近いんですよ」

地元の高校か・・・ヒイロはそう考え、深く何も言わなかった。

一応ヒイロの所属はまだ世間一般には公開していない。ISに深く
かかわっている者たちだけが知っているのだ。つまりIS学園に通
っているとはまだ言えないのでこの話はあえてスルーしておいた。
ちなみにこの3日後にヒイロのことが『特殊な例でISが使える男』

として公開されたのだった。

ヒイロたちはこのままどこかの喫茶店に行く予定だったんだがその行く途中に酒屋に置いてある自販機前にいる赤いラインの入ったベージュのトートバックを持った小柄で、瞳は青色、水色の髪の毛を左右両側で小さな木製キューブの髪留めで縛っている少女の後ろ姿を見かける。

茶髪の少女・・・以後U子とするがU子は彼女を見つけると「あ！」「と言って駆け出して彼女の名前を呼んだのか、呼び止めた。水色の髪の少女、以後MとするがMはビクッ！！と体を震わせ、後ろを振り向いた。

ヒイロもその後を追いかける。

「・・・どしたの？」

「どしたのって他人行儀な。これからこの人に財布拾ってもらったからいつものあそこでおごろうと思って、一緒に行こうよ」

とU子はMも誘おうとする。ヒイロは別にどっちでもいいので何も言わずただ見ていた。

Mは両手の手のひらをみせ、よくやる断るポーズ（なんて言っていないか分からない・・・申し訳ないBy作者）をする。

「いやーーーー・・・ちょっとこれから用事が・・・・・・」

「え？なんなの？用事って。ねえねえ」

「あーーーー・・・・・・えーーーーっと・・・・・・」

・・・まあそれといって・・・」

とMは困り始める。どうやらあまり人には言いたくない内容のようだ。それでも気になるのは人のさが。U子はいまだに聞きたがる。そこに口をはさんだのはヒイロだった。

「そのへんにしておけ・・・そいつも言いたくないのだろ」

「えゝ気にならないんですかゝ？」

「・・・興味ないな」

U子の言葉に反論するヒロ。その時、後ろから足音が聞こえる。
そして、

「ちょっといいかな？」

と言う声で三人は振り向く。そこにいたのは若い茶色の髪の男性警官だった。

少し沈黙ができ、ヒロは始め、何事かとわからなかった。それもそうだろう。ヒロはまだこの世界の日本の警察官の服装を知らなかった。いくら一夏と過ごしていたとはいえ、警察を見る機会はない。一夏の護衛は基本ヒロだったので警察が出てくることはこの世界に来て3か月なかった。

しかし、何とかTVなどの知識（警察 4時などから）からこの男が警察の人間だと分かった。

「ス・・・・・・・・」

「？」

「ス・・・・・・・・」

とU子がおかを言おうとして警官やヒロ、Mが注目する。
次の瞬間

「スイマセンでした――――――――――」

「――――――――――」

「え――――――――――っ！

！」

「ええ!!」
「なっ!!」

といきなり90°に体を曲げ謝りだすU子にM、警官、ヒイロは驚いてしまった。

しかも見事なお辞儀だった。

「ちよっ!! あんた、なにやったの!？」

「……盗んだバイクで走り出したことがあるのか？」

とMとヒイロに言われる。

2人に突っ込まれたU子ははっとして右手を口元にもってきて、

「はっ!! なんか、つい謝っちゃった。てかお兄さん、私は15歳ですけど盗んだバイクで夜を走り出したりしていませんよ」

「あははは……いや、僕も驚いたよ。イキナリ謝られたから」

警官も苦笑いしながらそう答え、話を続ける。

「いやね最近、自販機の二セ札事件が多くてね、この辺りで怪しい人物なんて見てないかなと思ってね」

この町はIS学園へ向かうモノレールの終点なので内陸だが外国人も多い。さらに日本は倉持技研の9割が男性職員であることや国民性で他の国より女尊男卑はきつくない。なので普通に男性警官が女性に職務質問もよくするのだが外国人女性からなめられているので無視される。なので日本では外国人犯罪率の増加と男性の冤罪問題が深刻になっている。この町は特にこの二つの問題が大きくなっている。日本以外では本気でそのまま刑務所送りになってしまうという問題もある。

それでもめげずに日本の警察官たちは職務をまっとうしていた。

「目撃情報によると犯人は赤いラインの入ったベージュのトートバックを持って・・・」

と言つて3人はMが持っているトートバックを注目する。

「ってまさかそんなわ

」

とU子が言いかけてMを見た時だった。

「んうはあ!!・・・はあはあ!!んはあ!!ああ!!はああ!!
うはあ!!ああ!!ああ!!」

(ええええええええええ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
~~~~~~~~~~~~!!?)

(!!!!!!)

Mの顔や体中からものすごく汗をだし、動機、息切れをおこしている。さらに目の焦点が合っていなくなつて体を震えている。明らかに動揺していた。その様子を見たU子は右手をまた口元に持つていき今度は口を覆う。ヒイ口もMのすごい反応で見た目は普通だが内心すごく驚いていた。

(なに!?この尋常じゃない反応!!持ってるの!?二せ札・・・  
持ってるの!!?)

(・・・・・・この動揺ぶり・・・明らかに持っていると  
言う反応だな・・・だが、ここまでの動揺は見たことがない・・・)

そう考えている間もMはカバンを取られないよう両手でぎゅっと握り警官からカバンを自身の後ろの方に遠ざける。明らかにカバンを

取られたく……あるいは見られたくないのだろう。

(いやいやいや、まさかね……)

「も、冗談よしてよ。み

とU子が言った途端、Mが両手を差し出してまるで逮捕してくださいと言うポーズをし始める。顔は下を向いて見れないがとんでもない顔をしているだろう。

更なるとんでもない行動にU子もついに身震いをし始める。ヒイロも冷や汗をかき、Mの行動に

と思う。ひ子と会って間もないが人柄から信頼できると判断していた。警官もさすがに不信感を感じ、

「ま・・・ままままままさか、どこからバレーボールが来て  
もいように構えているだけです、ねえ？」

「……そ、そうだな」

言うがU子は手を振りながら否定し、話をふられたヒイロも目をそらしながらU子の援護をする。

Mはいまだに手を出したポーズのままで何の発言もしない。

警官はすごく悩んだ顔をした後、MやU子、ヒイロの顔を見ながら

「……まあいいか。一応念のため3人ともカバンの中を見せて」

「はい、もちろん!!」

「……了解した」

U子は持っていたカバンをヒイロは購入した服と携帯を入れた紙袋を見せようとする。

そして、MにもするようにU子が声をかけようとしたときMの方を見してみると

千円札を出して、道路に頭をつけて土下座していた。

(いや――――――――――)

ーっ!!!!)

(な……)

2人はものすごい勢いで驚く。

（出しおった・・・ニセ札出しおった！！！！）

(ま……まさか本当に持つてるとはな……)

う子は泣きながら右手で目を抑え、天を仰ぐ。ヒイロは冷や汗がさつきよりも出まくっている。ここでMがついに言葉を発する。

「これで……カンベンしてください……」

「これでカンベン!!してください!!!」

イキナリ顔を上げてものすごい形相で警官に言うM。警官はその千円札を右手にとり、Mに問いただす。

「これ一枚だけか！！？二セ札は？」



「ニセ札じゃないです！！リアルな賄賂です！！！」  
「言っている意味が分かん！！！」

Mの言い訳に言い返す警官。その様子を無言で見つめるU子とヒイロ。ヒイロは正直、この辺りでトンずらしようか悩んでいたがすでにU子に手を握られていて逃げれる状況ではなくなっていた。そうこうしているうちに警官がMのトートバックの中を見ようとす。しかし、Mは取られないよう抵抗する。

「とにかくカバンを            な、なぜ抵抗する！！！」  
「親戚のだからあ！！このカバン、親戚のだからあ！！！！！！！」

と少し涙を浮かべて必死に抵抗するが男女の力の差は明白で警官にカバンを取られ・・・中を取り出される。中からは紙が6枚出てきて

「あああああああああああ~~~~っ！！！」

とMが叫ぶが、警官がその中身を見る。  
その中身は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Ｙシャツだけの男が後ろから裸のメガネをかけた男に覆いかぶさつて、『バカやろうだな』『あ・・・センパイ・・・おれ』といった感じで絡み合っていた。

俗に言う・・・BL漫画である。

「うわあああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！」

目を両手でおさえて天を仰ぐ。まさに触れてはいけない彼女の秘密に触れた瞬間だった。

しかし、状況を把握できないU子とヒイロは呆然とする。

そして、天を仰いでいたMはいつの間にか同じポーズで顔を下に向け、

「 ..... おお ..... 」

と唸りながらU子の肩を持ち、震えだす。そして一気にU子とヒイ  
口の前に出るM。

「おおっ……おお……おお おおおおおおおおお

おおおおおおおお おおおおおおおおおおおお！！  
「うー！」

Mは警官の胸筋の真ん中に強烈な張り手の一撃をくらって膝から崩れ去る。

警官が持っていた漫画の原稿は空中で散らばる。

Mは大きくジャンプし、回収をはかる。その高さは家屋の屋根まで飛んでいた。

「<sup>ワン</sup>1、<sup>ツー</sup>2・・・<sup>スリー</sup>3、・・・<sup>フォー</sup>4・・・<sup>ファイブ</sup>5」

と途中、空中でアクロバティックな回転をしながら原稿を回収するM。そして見事に足で着地するが原稿が一枚足りない。そして・・・

「<sup>ロク</sup>6・・・」

とU子の方を見ると、最後の6枚目を両手でもって、漫画の内容を見てしまっていた。・・・『熱は下がったみたいだな』と先ほどの裸のメガネ男がもう一人の男のシャツを脱がし、そしてそのままキスをしているシーンだった。

「あはっはははははははははは・・・あひやはひゃひゃひゃひゃは・・・あはははは・・・ああああ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

U子はバグった。それを見たMは声にならない奇声をあげる。その後、歩いてU子の目の前まで行き、丁寧に原稿を置いた後、U子の片足を両腕で取り、足首を脇腹に押し付けるようにクラッチし、その体勢から自ら素早く内側にきりもみ状態で倒れこむことで、相手を回転力で投げ飛ばす技・・・ドラゴンスクリーをした。

元々は藤波がカール・ゴツチから指導を受けていた際に学んだ、レスリングにおける伝統的なテクニクがベースであるのだが、藤波本人がインタビュ内で語ったところによれば、ゴツチからは足の膝部分に重心を預けてテイクダウンする実戦的なポイントを教わり、後年回転する動作を独自に加えたという。

ジュニアヘビー級時代から得意としていた技で、蹴り技に対する對抗手段として通常的に使われていたが、あくまでつなぎ技でしかなく、それほど脚光を浴びることは無かった。藤波の場合、相手の足を痛めるといよりは、足を取っての巻き投げに近く、テイクダウンを取るための技であった。

この技を必殺技にまで昇華したのは、武藤敬司である。1995年10月9日、東京ドーム・新日本プロレス対UWFインターナショナル全面対抗戦のメインイベント、武藤敬司対高田延彦戦において、高田の蹴りをキャッチした武藤はドラゴンスクリューを繰り出し、高田は抵抗したがために受身に失敗し膝の靱帯を損傷、足4の字固めによる武藤の勝利につながった。これ以降、武藤はこの技の連発から足4の字固めに移行するという連携技を使用し始めた。現在では、多くの日本人レスラーが使用しており、アメリカマットではWEのザ・ロックやショーン・マイケルズ等も使用する（アメリカでは『レッグ・レイス』と呼ばれる）。

とまあ・・・トリビアはここまでとし、U子はMによって超高速回転した状態で地面に叩きつけられ口から白くて絶対口から出て行つてはいけないものが出て行った。

そして、ドラゴンスクリュー（以後Dスクリュー）を受けたことにより空中から落ちてきた原稿を右手で素早く取り、状態を確かめる。ヒイ口はこれが今のこの世界の日常なのかと勘違いをしそうになっ

(な・・・何っ!!)

歴戦の兵士であるはずのヒイロがただの女子高生に後れを取ったのだ。ヒイロはかなり驚いた。そしてそのままDスクリーンを見事に決まる。ヒイロは超高速回転しながら地面に叩きつけられたがそのまま空中で体制を整える。いまだに原稿を手を持ったままだ。

本来普通の人ならU子のように出てはいけないものが出てくるだろうがヒイロは超人的な肉体の持ち主ゆえに意識があった。しかし、ヒイロ気づいていなかった。

すでにMがヒイロの真後ろにスタンバっていることを・・・

空中のはずなのにMはそのままヒイロの両股を手で掴み頭上に逆さに持ち上げ（実際は落下中に）、ヒイロの首を自分の肩口で支える。この状態で地面に尻餅をつくように着地し、衝撃で同時に首折り、背骨折り、股裂きのダメージを与えた・・・

「が!!」

流石にこの技・・・『五所蹂躪絡み』ごしやうりゅうからみを受けたヒイロは道路でうつ伏せになって気絶した。

Mは『おおお・・・おおおおう・・・』と唸りながら今までの経緯を思い出し再び右手で両目を抑え、天を仰ぐ。

いろいろと見られてはいけないものを見られたMはそのまま原稿を回収してその場を去って行った。

原稿は最後の一枚がクシャクシャになり出せなかったそうだ・・・

「ん・・・」

U子は目を覚ますと真っ先に見えたのは誰かの頭だった。そしてそれにより自分がおんぶされていることに気が付いて

「目が覚めたか・・・祐子」

「あれ・・・お兄さん、はっ!!も!!もう大丈夫です!!」

そう言つてU子・・・いや祐子はヒイロから降りる。裕子が周りを見渡すとよく見かける景色・・・そう家への帰り道だった。

「そういえば・・・お兄さん、なんで私の名前知ってるの?」

「・・・一番最初に起きた俺はお前の所持品から生徒手帳を発見してその住所のところに運ぼうと思ってその際にな・・・カバン勝手

に見てすまなかつたな」

「いいですよ。そんなの。そう言えばお兄さんのお名前は？」

祐子は手を振りながらそう言つとヒロに聞いてきた。昔のACにいたヒロなら名を名乗ることはなかっただろうがここでは自分も一般市民なので・・・

「・・・ヒロ・ユイだ」

「じゃーヒロさんだね」

「好きにしろ・・・お前の友達は何故あいつた行為にでたんだ？」

「あゝ・・・みおちゃんだね。多分触れてはいけなところに触れたんじゃない？」

そう言われてヒロはかつてあつたある悲惨な出来事を思い出す。

そう・・・ガンダムパイロットたちが忘れることのできないあの事件を・・・ヒロはそう思うとみおの気持ちが少しだけわかったように感じた。

そうこうしている間に彼女の家に着いた。ヒロは祐子の荷物を本人に渡し、

「・・・今後会う事もないだろう。」

「そうですね。けど、せつかく知り合つたのになんかな・・・ん？」

ヒロの言葉に不服を感じた祐子が導き出した答えは・・・

「あの・・・ヒロさん」

時刻は門限ギリギリの19時。食堂に行くともものすごく疲れた顔をした一夏がいた。ヒイロは一夏の目の前の席を取り、

「……………どうだったんだ？」

と聞くと、一夏はものすごい溜息をつき、

「午後に箒とセシリアが混ざってやってたんだけど、途中から喧嘩し始めて……………」

「あ……………言わなくていい。察した」

流石のヒイロもあの三人が暴れ出したら洒落にならないことを知っている。

「ヒイロの方はどうだったんだ？」

「……俺か？……プロレスだな」
「ぶ……プロレス？……何があったんだ？」

一夏がそう言ったら突然音が鳴り始めた。

その音を聞いたヒイロはポケットから携帯を取り出し、メールを見た。

「今日買った携帯か、誰のアドレス入れたんだ？」

「今日知り合った奴だ。……メールは返事を出すものと教えてもらったからな」

そう言つてヒイロはメールに目を通して、返事として『ああ』とだけ打って返す。

「二文字はないだろ……」

「そうか……じゃあ……『スラマツマラン』と付け加えておこう」

「それ何語だよー！」

「……インドネシア語だ。今日知り合った奴がメールで『スラマツパギ』って挨拶してきたからな……流行語って書いてある……」

「それ絶対違うからなー！」

そう言いながらもヒイロはメールを返す。その宛先名には『相生祐子』と名前があったのであった。

第11・5話 空から生鮭の切り身が降ってくるって・・・日常だよな（後書き

ってことで今回、日常を加えてお話を進めました。

今後彼女たちの扱いですが、これはあくまで笑いのために入れたので今後重要な案件には登場しません。ヒイロ単体だったらボケられないゆえの処置です。もし登場させるとしたら学園祭と夏休み、後はメールっていう形のみだけです。またものすごい不評意見が多い場合は今後も登場しません。

ってことでアンケートはこのままギャグパートには日常のキャラを使ってもいいか？ってことです。締め切は次回の投稿までに

ちなみにもしOKなら後々面白い企画も用意していますので感想よろしくお願いします。

ちなみにちゃんみおが最後にやった技はググったらすぐにわかります。

第12話 探し物は・・・（前書き）

今回は・・・楯無さんが暴走しています．
批判が多そうですが許してほしいです．

後、前回の内容についてどうしたらいいのか感想がいつもより少なくて判断できなくなっています．
今後いい小説にするためにどうしたらいいか
アンケート・・・よろしく願います．

それではどうぞー！！

第12話 探し物は・・・

クラス対抗戦からさらに数日。一夏はIS学園ではなく、数少ない男友達の五反田 弾の家に遊びに来ていた。今回は遊園地の時みたいにみんなではなく一人だけだ。

赤髪の弾と2人で弾の友達くれたと言う格ゲーをしていると弾が一夏に聞いてきた。

「で？」

「で？ って、何がだよ？」

「だから、女の園の話だよ。良い思いしてんだろ？」

「してねえよ」

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。」

なにそのヘヴン。招待券ねえの？」

「ねえよバカ」

会話しながらも二人の両手はしきりにコントローラーを弄っていた。先ほど謎の腹黒そうなお嬢様を使っていた一夏だが、すぐに使用禁止になった。なんせ波動拳コマンドで『核兵器』が出て一撃で相手を葬ったからだ。いったいこのキャラはなんなんだ？と一夏は思わざるおえなかった・・・

「それにしても、鈴が転入してくれた助かったぜ、知り合いが少なかったしな」

「鈴か。鈴ねえ・・・・・・・・そう言えば、ヒイロはどうした？アイツも同じなんだろ？」

「ヒイロは俺よりさらに特殊なんだけどな・・・今日は実験があるらしい」

「そうか・・・あいつにもいろいろ聞きたかったんだけどな・・・」

「それより、このゲームのキャラ・・・パンツいつちよの男に幼児体型の女子高生、美男子執事・・・そして核兵器お嬢様・・・ってお前の友達って・・・」

「お兄！！さつきからお昼出来たって言うてんじゃん！！さつきと食べに」

その時、どかんと扉を蹴って入って来たのは弾の妹、五反田 蘭。
一夏たちの一つ下で現在中三。有名私立女子校に通っている優等生だ。

「あ、やあ蘭。久しぶり、邪魔してる」

「いつ、一夏・・・・・・・・さん!？」

一夏が来ていることを知った蘭は慌てて隠れ、顔だけを覗かせた。

「い、いやっ、き、来てたんですか・・・・・・・・・・?」

「ああ。偶々外出許可が出てな」

「蘭、お前なあ、ノックぐらいしろよ。恥知らずの女だと思われ」

ギンッ!という効果音を立てて蘭の視線一閃。それを受けた弾は蛇に睨まれた蛙の如くみるみる小さくなった。

「・・・・・・・・なんで言わないのよ・・・・・・・・」

「い、いや、言ってなかったか?そうか、そりゃ悪かった。ハハハ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ぎろりと再び弾を睨みつける蘭。それにより弾の顔は見事に蒼白になっている。

「あ、あの、よかつたら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ………」

ぱたんと静かに扉が閉じられ、静寂が訪れる。一夏は何とも言えない状況にされていたのだった……

ヒロは第3アリーナにいた。本日、先生の許可を得て完全封鎖してある実験を行うためだ。ヒロはすでにガンダムを装備していた。そしてその手にはあのバスターライフルがあった。

「……これより、バスターライフルの出力制限の稼働テストを行う」

『お願いします。ヒロさん』

「………任務開始」

そう言つてヒロは空中に浮かんでいるターゲットに向けて右手のバスターライフルを構える。銃口に光が集まり、以前より小さいのでうまく行つてると考えた。

だが次におこつたのはバスターライフルの真ん中から煙が吹くという事態だった。銃口の光もそれにつられて消えていった。

『あ……ヒロさん……ピットに戻ってください』

「………了解した」

実験はあきらかな結末だった・・・

「やはり厳しいですね・・・ジェネレーターからの供給量がものすごいからそれでダメになっちゃうんですね。カートリッジ式ならいけるんですけど・・・」

とイスに座ってデータを見ながら答える皐月、ヒイロも普段の格好をして後ろから立ってモニターを見る。ヒイロも装置開発にプログラムを組んだがうまく行かなかった。

ヒイロは原因がわかっていた。今のゼロのジェネレーターの出力が大きすぎるのだ。それもMSの時よりもだ。出なければ、ヒイロが組み立てたMS時代のプログラムで制御できるはずである。しかし、今できていない現状がここにある。

「・・・皐月、後は頼む。俺はもうちょっとアリーナで訓練する。まだ感覚に慣れてないから・・・」

そう言つてヒイロはモニタールームから出て行った。皐月は驚いた顔してヒイロの背中を見て閉められた扉を見ながら

「あ・・・あれでまだ本調子じゃないんだ・・・」

と呟いた。

アリーナでターゲットマーカをサーベルやマシンキャノン、そして借りてきたセシリアが使っているライフルよりはるかに弱い連続射ができるレーザーライフルで破壊するヒイロ。マーカを100枚破壊するまでの時間で優劣をつけるものであるこの訓練はかつて似たようなものでMSに乗っている時は1分以内でできたが今はまだ3秒遅くなっている。ISによつて操作は前よりよくなっているはずなのでヒイロは不服に思っていた。

ビーと鈍い音が鳴り、訓練が終わる。タイムは58秒・・・ヒイロの満足とは言えないがかつての勘と操作が覚えられてきたことを確認できた。

その時ヒイロはついに『奴』に声をかける。

「・・・・いい加減出てきたらどうだ」

そう言われてもまだ出てこない奴に対してヒイロはさらに言葉を言う。

「・・・・第一ゲートのところから見ていることはわかっているぞ」
「・・・・・・」

そうして出てきたのは青っぽい髪、瞳はルビーのように赤い。そして、髪の毛が外側に跳ねているのも特徴的でどこか簪に似た少女だった。髪の色、輪郭が似ていて、スタイルはこちらの方がいいが、明らかに関係のあるものとヒイロは推測した。そこである言葉を思い出だす。

『え、う、んと・・・・・・私の・・・・・・お姉ちゃん。この学園の・・・・生徒会長。そ、それで・・・・、お、お姉ちゃん。』

・も、専用機……持つて……る。で、でも、
・お姉ちゃん。専用機、一人で……作った、から』

と簪が言った言葉。ここでヒイロは誰かわかった。

「生徒会長の更識さうしき 楯無たてなしか……」

「そう。私が2年で生徒会長の更識さうしき 楯無たてなしよ。初めまして、ヒイロ・ユイくん」

と笑顔で言うが、明らかに作り笑っているのはわかっていた。

ヒイロは地面に降り、ガンダムを解除する。楯無はニコニコした顔でヒイロを見つめる。しかし、ヒイロは気づいている。この少女から殺気を殺したものが感じられることを。そのためヒイロは楯無の居場所が分かった。

ヒイロは楯無の目を見ながら

「……俺に何か用か？」

「ちよつとね。私と戦わない？ 歴戦の兵士の力……見せてほしいのよ」

そう言うがヒイロは明らかに楯無が自分に殺意……いや単にボコボコにしたいとしか思っていないと感じた。

面倒なことなのでヒイロは

「……断る。面倒だ」

と去ろうとするがその時ヒイロの顔の横を蛇腹剣「ラスティ・ネイル」がかすめる。ヒイロはそれを知っているの行為だったが本気でやってくるとは……と思っていた。

「……………何の真似だ」

「君に拒否権はないのよ……さっさと準備しなさい」

そう言う楯無の顔からはもはや表情と言うものは感じられなかった。

「……………いいだろう、ウイングゼロ起動」

そう言うてガンダムを纏うヒイロ。一方楯無も完全にISを展開する。ヒイロの目に楯無のIS情報が表示される。

（ロシア代表機……『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』。他の情報はなしか……）

ヒイロはあの機体の見た目……他のISに比べ装甲が少なく、左右一対で浮いているクリスタルに警戒をしていた。地面に置いているレーザーライフルを拾うヒイロを楯無は見つめる。楯無もヒイロの事情を知る一人であり、ヒイロの過去を知っている。戦闘の……それも命がけの前線のスペシャリスト……それがヒイロ・ユイである。あることで怒りに支配されている楯無でも同じように警戒を忘れない。

「ルールは先にシールドエネルギーがなくなった方が負けよ」
「……………わかった」

そうして待つのは試合を始める動き。長い緊迫とした時間……実際は数秒だがそう感じるのだろう。そして二人同時に動き出したのだった。

「任務開始・・・内容、敵機の撃退」

ヒイロはその白き翼で高機動戦を仕掛ける。ヒイロとしてはこの戦いできるだけ早く終わらせておきたかった。いきなり楯無の後ろを取り、マシンキャノンを放つ。普通ならここでシールドが働き、シールドエネルギーが減るのだが・・・

『霧纏の淑女』の左右一対で浮いているクリスタルから水のヴェールが出てきて、それからマントが展開され防がれた。ヒイロはそれを見て一瞬で理解する。

（水を使った兵器か・・・実弾では有効打を与えられん・・・なら）

ヒイロはレーザーライフルで攻撃する。楯無はマントをドレス形態に変更し蛇腹剣「ラスティー・ネイル」を持った右手の甲に水の楯を作りガードしながら左手で高周波振動する水を螺旋状に纏ったランスで四門のガトリングガンも装備されている蒼流旋を形成する。
カードしている水のナノマシンがレーザーによる熱蒸発で徐々に小さくなっている。

（早い・・・すぐに実弾が効かないとわかってビームサーベルやレーザーライフルと言った光学兵器に変えてきた）

楯無は蒼流旋そつりゅうせんについているガトリングで反撃する。しかし、ヒイロは簡単に避ける。そう・・・いくら学園最強でも一対一では歴戦の兵士・・・ヒイロ・ユイにかなわない・・・これはあくまでも今のような銃撃戦ではの場合だが・・・

「あの野郎・・・」

楯無は滅多に言わないような言葉を発した。

更識さらしき 楯無たてなし

二年生にして「学園最強」を意味する生徒会長に就任。

学生の身でありながら自力で第三世代型ISを組み上げた快挙。

そして自由国籍取得によりロシア国家代表に任命。

ミステリアスな美貌に加えて豊満な肢体と人たらしと称される程の
カリスマ。

まさに才色兼備の彼女だったが、唯一つままならぬことがあった。

それが愛する妹、簪との関係であった。楯無は簪のことが可愛くて
可愛くて仕方ない。

ずっと触れていたい・・・ずっと話をしたい。ずっと一緒にい
たい。そう思えるほど好きなのである。妹のためなら死んでもいい
と言っぐらいである

しかし、年子の姉妹などというものは、否が応でも周囲から比較さ
れてしまうものだ。簪とて世間から見れば優秀な部類ではあるが、
姉があまりに規格外すぎて・・・劣等感を感じざるおえなかった。
ひねくれるか、あるいは徹底的に嫌い、違う道を選べばともかく、
簪は茨の道とも言える、姉と同じ進路を選んだ。比較されるのはも
う避けられないようになっていた。

そして・・・神の悪戯とも言っべき一夏の出現によって、自身のI
Sが未完成のままおかれた状態になったのも楯無は困った。簪は姉・
・・・つまり楯無への複雑な感情から、自力で【打鉄式式】組み上げ
ると言い出し意固地になってしまったのだ。

その全てが楯無の悩みの種であった。簪に嫌われたくないためがゆえに、思い切った行動に出ることもできず、折角同じ学校にいるというのに、入学以来まともな会話もできない。

親友の新聞部の薫子に簪の隠し撮りを大量に仕入れ、会えない悲しみをそれで斬り抜けていた。

しかし、そこにある男が現れた・・・

ヒロ・ユイ

簪に『お前の好きにやればいい』と言った男。いままで「無駄だ」や「諦めろ」と言われ続けた簪にとって本当に見守ってくれる人に会えたのは初めてだった。いや・・・気づいたのがだった。楯無も見守っていたのだがやはり実姉の方が気づきにくいのが妹なのだろう。他人の好意ほど気づきやすく、身内の好意ほど気づきにくいものだ。

その後、簪はヒロになつき始めた。ヒロに布団をかけたたりして拳句の果てはヒロのためにESのデータを集めて見せたり、ついには『お兄ちゃん』と呼び、膝枕するレベルになっていた。

赤の他人なのに・・・私の方が簪ちゃんのこと・・・日に日に楯無のボルテージが上がって行き、そして今日・・・爆発したのだった。

蒼流旋^{そうつしゅせん}で攻撃するとヒイロは必ずビームサーベルを使う。このナノマシンで構成された水はシールドエネルギーで動かしている。つまり再び形成するのにまたシールドエネルギーが必要になるのだ。なので実体剣でもある蛇腹剣「ラスティー・ネイル」で攻撃する。ヒイロはそれをサーベルで受け止め競り合う形になる。お互いに引かない状況。しかし・・・

「更識^{さらしき} 楯無^{たてなし}。怒りを俺にぶつけていれば、簪との関係が改善されるのか？」

「！！」

ヒイロはいきなりそんな事を言った。その言葉で一瞬の隙ができてしまった楯無にヒイロは翼で横腹に振り切り、翼による打撃を食らわせた。反応が遅れた楯無は機体のシールドエネルギーを減らす。

「くっっ！！」

楯無は後退しながら蒼流旋^{そうつしゅせん}についているガトリングで牽制しながら後退する。楯無は何故、ヒイロが今回の動機を知っていたのか・・・戸惑いが大きかった。だがあることを思い出す。ウイングガンダムゼロには戦闘において勝つ未来を見せ、そして時には自身や誰かの未来、情報さえも見せるシステムが搭載していることを・・・

「ゼロシステム・・・ゼロシステムで私の情報を見たのね！！あなたに何がわかる！！」

楯無は敵意丸出しの言葉を吐きながら、再び接近戦を行う。ヒイロは翼の機動性を最大限に使いレーザーライフルで牽制するがすべて避けられ、「ラスティー・ネイル」から発せられた高圧水流によってライフルが破壊される。ヒイロは再びサーベルを取り出し、再び

剣同士が激しく斬り合い、ぶつかり合う

「ゼロが見せたものからはお前の気持ちすべてがわかるわけではない……だが、怒っていても何も変わらない」

「なにも変わらないですって！！簪ちゃんはそのせいで変わって言うのに！！あなたの……あなたのせいで！！」

「だから、怒ってお前から変わることをあきらめるのか？」

ヒイロの言葉の裏にはこのまま簪とにらみあった関係でいいのかと聞いているのだと怒りに支配されている楯無でもわかった。だから楯無は率直な気持ちで返答する。

「いや！！」

「では、探せ。探さなければみつからない」

「何を探せって言うのよ！！簪ちゃんとの仲良くするための方法！？」

「そうだ」

競り合っては離れ、また斬り合おうと接近しぶつかり合う。

「じゃ！！、どこを探せば……どうやったら簪ちゃんと仲良くになれるのよ！？」

「それは、俺にもわからない……だが、泣いていても怒っていてもお前の探し物は見つからない」

そう……楯無は泣いていた。もうどうやったら簪と仲良くできるか分からなくなっていたからだ。時間が解決する……そう言う事もあるがもう楯無は待てなくなっていた。だからの涙だった。しかし、ヒイロにその言葉を言われ、楯無は完全に怒った。

「なんて無責任なのよ！！これで終わらせてやる！！このアリーナ内にはナノマシンで構成された水を霧状にしてあなたの周りに散布してある！！」

そう言った瞬間ヒイロの周りの湿度が上昇していく。ヒイロはそれが攻撃だと気づき一気に上昇して避けようとする。しかし、

「もう遅い！！クリア・パッション清き熱情！！」

ぱちんつ、と楯無が指を鳴らす。その瞬間、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱がヒイロのガンダムを襲う。水が気化したことで周りは霧が発生したことでヒイロがどうなったか見えなくなってしまった。

だが楯無は勝利を確信していた。本来ならそんなミスを起こさない。怒りによる判断ミスだった。

「ふふ・・・ふふふふ・・・あははははは！！」

泣きながら大声で笑う楯無・・・しかしその霧を切り裂いて、ウィングガンダムゼロは無傷で現れた。

楯無は驚き、反撃しようとするがすでに遅く、アクア・クリスタルを一瞬でビームサーベルにより破壊され、そのままヒイロに体当たりされた状態でアリーナの壁にぶつけられる。そして密着した状態で首元にビームサーベルが付きつけられた。

「ど・・・どうして・・・」

「・・・ゼロは元々大気圏が突入可能のMSだった。ガンダニウム合金は耐熱にも優れている。また・・・翼はシールドの役目を持つためさらに硬度なガンダニウム合金が使用されている。相性が悪かったな・・・」

そう、ガンダニウム合金には耐熱性に優れている。なのでヒイロは自身の前に翼を展開して、また上空に行くことで上方方向の攻撃量を減らして耐えたのだ。もちろん減らしたことにより機体全体のガンダニウム合金で防げる熱量に抑えた。冷静さを取り戻した楯無はこう言う。

「これは……生徒会長やめないとね」

「……そうでもない。この勝負……俺の負けだ」

えっ!!とする楯無。すると情報が送られてくる。

ウイングガンダムゼロ 残りシールドエネルギー……0

「な……なんで」

「さっきの攻撃でガードできていない部分でシールドが自動発動したんだろ……俺の機体は300しかエネルギーがないからな」

そう言うってヒイロはピットに帰ろうとする。

楯無はその後ろ姿を見て呼び止めようとする。しかしその前にヒイロは止まり、後ろを向いたまま言う。

「楯無、覚えておけ。泣いて怒る前に、自分のできる事を精一杯やる事を」

「そうすれば、絶対見つかる？ 簪ちゃんと仲良くなる方法？」

「絶対に、とは言えない。けれど、行動を起こすことで変わるかもしれない」

そう言うってヒイロはある紙切れを投げる。楯無はそれを掴んで広げる……それはヒイロの携帯の連絡先だった。

「…………お前が探し続けるって言っなら……相談ぐらいなら乗ってやる」

と言って、ヒイロはピットに戻った。楯無は顔を少し赤くして

「一緒には探してくれないんだ……意地悪」

楯無はヒイロの後ろ姿をただただ……見つめていた。

そして、その日の夜。

「お引越しです」

「はい？」

真耶はいつも通りのにこやかさで一夏と箒のもとに現れた。横には少量の荷物を持ったヒイロもいた。一夏と箒はハモって疑問符を浮かべた。

「はい、ようやく手配できましたので、篠ノ之さんは移動してください」

そう、ようやく部屋の調整がついたからこの部屋はヒイロと一夏の

部屋になる。

「そんないきなり！今晚中じゃなきゃいけませんか？」

箒が異議を唱えている。

「ええ、早めをお願いします。やはり、年頃の男女が同じ部屋と言うのは学園でも問題視されてまして……。なにか間違いが起きたらどうするって言われて……」

「私たちに間違いなど！」

「まあまあ箒、落ち着けて。山田先生困ってるんだし。男女七歳にして同衾せず、ってことわざあるし」

「貴様がそれを言うか！いきなり私の裸を見たくせに！」

「誤解を招く言い方するな！あれは事故だ！それにバスタオル巻いてただろ！」

「一夏は私と離れて寂しくないのか！」

と言い争いになっているのをヒイロは呆然と見つめる。
そして……

「先生！今すぐ部屋を移動します！！」

といつの間にか箒がそんなことを言って、荷物をまとめて出て行った。

「なんであいつは怒ったんだ？」

「……さあな」

ヒロと一夏はベットに寝ころびながら会話する。

「しかしまあ・・・これからよろしくな、ヒロ」

「・・・・・・・・ああ」

ヒロがそう返事を返した時、コンコンとドアをたたく音が聞こえた。

一夏が返事を返しながらドアに近づく。

「はい、箒？忘れ物か？」

そこにいたのは先ほどまで一緒だった箒だった。そして箒の

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが・・・・・・・・わ、私が優勝したら・・・・・・・・つ、付き合ってもらおう!!」

「・・・・・・・・はい？」

この言葉を筆頭に今後の展開が更なることになることにヒロたちは気づかなかった。

そしてすでにあの“簡易ベット”があることに気づいていなかった。
・
・

そのまた翌日の月曜、この日の朝はいつもよりも騒がしかった。

「やっぱハヅキ社製のがいいなあ」

「え？ハヅキのってデザインだけって感じじゃない。私は性能的に

見てミューレイのスムーズモデルがいいと思うけど」
「でも高いでしょあれ」

個人でISスーツを用意するためにカタログを片手にあれやこれやと意見交換していた。

授業では学園指定の物を使っていたのだがISというのは人それぞれの仕様に変わるので早いうちから個別のスタイルを確立するためである。

ISスーツは皮下神経の電位差を感知することでISに操縦者の動きをダイレクトに伝える役割を果たすので、有り無しでは有った方がよりスムーズな操縦が可能となる。

と言ってもやはり自分専用って言うのがほしいって言うのも大きい要素ではある。

ちなみにウイングゼロは脳波で処理したりするためスーツは不必要なのである。

「諸君、おはよう」

「おはようございます」

「お、おはようございます！」

千冬と真耶が教室に入ると同時に全員が席に戻り軍隊顔負けの気を付けの姿勢になる。

普段の教育という名の調教の結果だろう・・・

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機のISを使用しての授業となるが各人気を引き締めるように。後ISスーツは個人が届くまでは学園指定の物を使うように。忘れたら学園指定の水着、それすら無い者は下着で構わんだろう」

本来ここには女子しかいないはずだし千冬なりの発破の仕方なんだ

ろうが男子の前で言うことではないだろう。

そして学園指定の水着とはこの時代ではもうアニメでしか見ることがないとなったスクール水着である。紺色で名札付き。ちなみにヒイロが知り合った少女の学校もスク水である。

「では山田先生、ホームルームを」

「はい。ええとですね。今日は転校生を紹介します！しかも二人です！！」

「「「えええっ！？」」」

クラス中の女子が一気に騒つく。女子特有情報網を掻い潜つてのいきなりの転校生なのだから驚きもするだろう。

「ではどうぞ！」

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室に入ってきたのは男子の制服に身を包んだ金髪の人間と軍服の様に改造された制服に身を包んだ銀髪の左目の眼帯が特徴的な人間だった。

ヒイロはこの二人から目を離せなかった・・・一夏の護衛として隠していることがあるこの二人を・・・

第12話 探し物は・・・（後書き）

感想よろしくお願いします．

一応前回の話を11．5話つてことにして別に読まなくても話が分かるっていうことにしようと思います

第13話 転校生（前書き）

今回は原作に近い感じですよ。

ヒイロの戦闘は少し先なのでそれまでお待ちください。

そして今回はあるキャラが読者参加型の企画を紹介します。よろしくお願いします。

第13話 転校生

教室に二人の転校生が入った瞬間、教室のざわめきが止まった。まるで時間が止まったような感じだった。

原因は転校生の一人の制服が男物だからだった。その一人が自己紹介を始める。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を・・・」

その佇まいや話し方からして育ちはいいようだが、もう一人ISを操縦出来る男子がいることは報道されていなかったとヒロは考えていた。

（それにコイツの動き方・・・）

もう一つヒロはある予測を立てていた。しかしその前に

「き、」

「はい？」

「「「きやあああああつ！」「」「」

女子の歓喜の叫び声が窓ガラスを揺らす事態になった。

恐らく騒音レベルはジェット飛行機と同じレベルに達しない。

「男子！三人目！！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ワールド系織斑君とイケメン系のユイ君に続いて守ってあげたくなる系！！」

「地球に生まれて・・・良かったー！！（織田 二風に）」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

もうどこかで織田 二をやっている奴もいた。真耶は涙目になりながら沈めようとするが聞かず、最終的に千冬が鬱陶しそうにそれを鎮める。

そして、もう一人の転校生だが・・・軍服のような改造制服に左目の眼帯、温度を感じさせない冷酷な紅い右目。そして全身から放たれる凍てつくような鋭い気配。まるで過去のヒイロに似た感じだった。明らかに軍人だとヒイロは感じ取った。そして一夏に憎しみに似た感情を向けていることも・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

当の本人は未だ口を開かない。目の前にいる人間を見下すような目でこちらを一瞥した後その視線を織斑先生にのみ向ける。

「・・・・・・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここでのお前は一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

かかとを揃え背筋を伸ばした姿勢と二人のやりとり。

（どうやら過去に千冬が外国の軍で教官をやっていたようだ・・・一夏に関係があるのか？）

ヒイロはそう考えているがそれでもラウラから目を離さなかった。
そして自己紹介がはじまりだす。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あの、以上・・・・ですか？」

「以上だ」

真耶のフォロー虚しく最低限な自己紹介で終わる。

そして一夏と目が合ったと思ったら彼に近付いていき、手を振り上げ、一夏の顔を叩こうとした。しかし、その手を止める者がいた。

ヒイロがラウラの手首をつかみ止めたのだった。

「貴様！！何をする」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヒイロは無言で答える。二人の視線が合う。それはまさしく兵士同士のにらみ合いでもあった。

やがてラウラはヒイロの手を振り払って、一夏に言った。

「私は認めない。貴様があの人弟であるなど、認めるものか」

その言葉に一夏はすぐにあの人というのが千冬とわかった。しかし・
・

（俺を認めない・・・・？アイツ、なぜ？・・・・千冬姉えに関係があるのか？）

と確証がないが言われる原因がわからなかった。

ラウラはその間に空いている席に着き、腕を組んで目を閉じて黙り込む。ヒイロもそれを見て席に着いた。

周りのクラスの女子は未だ状況が飲み込めていないのか呆然としていた。

「あー・・・ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！織斑、ユイ。デユノアの面倒を見てやれ」

千冬の号令にクラス全員が覚醒し動き始める。ヒイロは立ち上がり一夏の席に近づく

「行くぞ・・・一夏」

「わかってる！」

「君が織斑君？初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

一夏はシャルルの手を取り、引つ張りながら教室を出る。その後ろをヒイロが続く。

ヒイロはここで一応ラウラとの関係を一夏に聞いてみた。

「一夏・・・アイツとは昔に何かあったのか」

「いや・・・初対面だ。だけど千冬姉え絡みなのは間違いないと思う。千冬姉え、昔ドイツに居たし」

「えっと・・・君は特殊事例の・・・」

「・・・ヒイロ・ユイだ」

「うん・・・よろしく、ユイくん」

「ヒイロでいい」

移動しながら会話する3人。男子のみがアリーナの更衣室を使った

めである。

「いた！転校生！」

[illegible]

「な、なに！？何で皆騒いでるの？」

• • • • • ?

「男でISが操縦出来るのは俺達しかないだろ？」

ここでやっとシャルルが納得した。しかし、その様子をヒイロは見逃さなかった。

「それにこの学園の女子は極端に男子との接触が少ないからな。ウ

「パールーパー状態なんだよ」

「何それ・・・？」

「二十世紀の珍獣で昔日本で流行ったんだと」

「ふうん」

「それにしても良かったぜ」

「何が？」

「男がもう一人増えたからな。ヒロがいてくれたおかげで大分楽だったけどそれでも男が少ないのはキツいな」

「そうなの？」

とシャルルはさらに違和感のある発言をする。まるで今まで自分は関係なかったような反応だった。

しかし、一夏にとって今は更衣室に直行してさっさと着替えないと千冬の出席簿アタックが待っているためそっちを優先して考えるのを止めた。

「よし、到着！」

更衣室に入ると同時に一夏は一気に上半身裸になる。ヒロもそれに続き上着を脱ぎ始める。

「うわぁっ!？」

「？荷物でも忘れたか？つてか早く着替えないと遅れるぞ」

「う、うんっ？着替えるよ？でも、その、あっち向いてて・・・
・ね？」

「別に見る気はないが・・・」

（変な奴だな。同性の裸なぞ見ても嬉しくないだろうに・・・それをわかってるはずだよな？）

一夏はそう思いながら急いでISスーツを着る。
ヒイロはその間に、いつもの緑のタンクトップにジーパンと言う格好になる。

「ヒイロはいいよな・・・私服でいいし」

「・・・こっちの方がやりやすいからな」

ISスーツは吸汗機能もあるからベタつきとかない。しかし、素材がラバーに近いので苦しく感じるのだ。

一夏がふと後ろをみるとシャルルは既にジッパーを上げて着替え終わっていた。ちなみに構図としては一夏とヒイロが同じ方向を向いていて背後でシャルルが着替えていた。

シャルルの着替えの速さを見た一夏は驚きながら言う。

「シャルル着替え早いな。コツとかあんのか？」

「いや、別に・・・って一夏まだ着てないの？」

シャルルはそう言う。

一夏は今スーツを腰まで通したところであつた。

「引っ掛かって着づらいんだよなこれ」

「ひ、引っ掛かって・・・」

先ほども言った通りISスーツはラバーに似た素材でできている。そのため摩擦等で着にくいのだがよく見られるラバースーツよりは遥かに着やすい。

しかし、何故かシャルルは顔を赤くして驚いていた？これもまたヒイロに怪しいと思われる要因になった。

「そつえばシャルルのISスーツはどこのなんだ？」

「あ、うん。デュノア社のオリジナル品だよ」

「デュノア？それって・・・」

「うん。僕の家だよ。IS関連企業で父が社長しているんだ」

「それでか。納得した」

「何が？」

「つまりシャルルは社長の息子なんだろう？気品のいいっていうか、いいところの育ち！って感じがするじゃん」

「いいところね・・・」

シャルルは視線を逸らして複雑な表情を浮かべている。何か触れてほしくことでもあったのだろうか・・・一夏はそう考えている間にヒイロが

「・・・・・・・・そろそろ行くぞ」

と言って3人は更衣室を出たのだった。

「・・・・・・・・一夏のせい一夏のせい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ひ・・・人の頭をポンポンと・・・・・・・・」

先ほどのラウラの一件で鈴とセシリアは一夏から聞き出そうとし無駄口を叩いて千冬にはたかれた。今日から実戦的な訓練に入るため千冬もいつも以上に厳しい。

「今日は戦闘を実演してもらう。凰！！オルコット！！」

戦闘の実演役に鈴音とセシリアが指名される。

先ほどの罰も含んでいるのだろうが、鈴とセシリアは文句を言いながら前へ出てくる。

「何で私^{わたくし}が・・・」

「全部一夏のせいなのに・・・」

とやる気のない二人・・・当然の事だろうが、専用機を持っている二人はすぐに模擬戦が可能だからの選抜である。ここで千冬が二人のそばによりひそひそ声で二人の耳にささやく。

「お前らやる気を出せ。・・・あいつにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね!!」

「まあ、専用機持ちの実力の違いを見せるいい機会よね!!」

と魔法のことばでたゞのしゝいなかまゝが、　　ゝン!!と二人のやる気が上がる。

筈はそれに対してどす黒いオーラを放っていたがヒロは無視、一夏は気づいていなかった。

「それで、相手は鈴さんですか？それでも構いませんが」

「ふふん。それはこっちのセリフよ。返り討ちね」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は・・・」

と千冬が言いかけると空から風を切る音が聞こえ・・・

「あわわわあ!ど、どいてくださいっ!」

と涙声で叫ぶ真耶がISを装備して落ちてきた。

「バ、バランスがとれないんですー!」

このままじゃ確実に地面と仲良くなるなあ。と誰もが思い、全員逃げだす。ただ二人・・・ヒイロと一夏だけ逃げ遅れた。ヒイロはそのまま受け止めようと体制を整えるが一夏が白式を展開させ、山田先生を受け止める。

ただし、やはりかなりの衝撃で砂煙が立つ。ヒイロは右腕で砂を目に入らないよう防ぐ。

「いてて・・・。なんだ?この柔らかいの?」

「あんつ。・・・あ、あの。一夏君、教師と生徒はこのようなことは・・・。ああでも織斑先生がお義姉さんになるのならいいかも・・・」

「へ?」

一夏はとぼけた声を発する。そして状況を確認する。

一夏が真耶を押し倒した形で、胸をわしづかみ。しかもちよつと揉んでいる状況を・・・

真耶も少し受け入れている・・・と言うか千冬の妹になりたいのか?

(すげえ巨乳!!・・・千冬姉えよりも大き・・・ってイヤイヤイヤ!!・・・)

流石に状況を把握した一夏は冷や汗をおもいつきりかく。その時、

「右に避ける、一夏」

と言うヒイロの声と同時にシュンと高速で空気を切り裂く音が聞こ

える。

「うわっ！」

一夏の目の前、5センチぐらいレーザーが通過する。
撃ったのはもちろん・・・

「ホホホホホホ・・・私としたことが外してしまいましたわ？」

修羅と化しているセシリアだった。

しかし、甘く見てはいけない。修羅と化しているのはセシリアだけではない・・・

「一夏あー!!」

鈴が双天牙月を超高速スピンドで投げつける。普通の人間なら首がちょん切れる威力だろう。ヒロもさすがにまずいと感じ、ガンダムを起動、ビームサーベルを抜こうとした時だった。

「一夏君危ない！」

と言う声と同時に二発の銃弾が牙月を弾く。

「山田先生？」

なんと真耶が先程の体勢から、狙撃をし確実に当てて見せたのだった。これにはヒロもそして他のメンバーも驚きを隠せなかった。

「山田先生は元代表候補生だ。これくらい当然出来る」

「そんなあ。候補止まりでしたからあ」

謙遜する真耶。そう・・・かつて真耶は日本の国家代表候補生だった。その実力は千冬がほめるほどの折り紙つきでもある。

「ということで、オルコットと凰で山田先生と2対1の模擬戦闘をしてみよう」

「ええ？いくらなんでもそれでは」

「そうですよ？さすがに勝っちゃいますよ？」

セシリアさんが驚き、鈴が続ける。確かに他のクラスメイトも専用機持ちのセシリアと鈴が勝つと思っている。しかし、ヒイロは違った。

「・・・・・・油断は禁物だセシリア、鈴音。今のお前達の実力では勝てない可能性の方が高い」

そう言う二人の顔は少しムツとする。

そうして真耶対セシリア＆amp;・鈴の戦いはじまる。

「よし、デユノア。山田先生が使っている機体について説明しろ」
「はい。山田先生が使っている機体は、フランスデユノア社製の『ラファール・リヴァイヴ』です。全距離において対応可能なように武装が積まれています。第2世代最後期の開発で、スペック上は第3世代には劣りますが、戦い方によっては互角に戦うことも可能です」

空で戦いをしている中で千冬はシャルルに機体説明をさせる。

しかし、みんなは上空に夢中になっていた。

セシリアのレーザーを完璧に避ける真耶。癖とか知ってないと、あそこまできれいには無理だろうに軽々とやってのける。甲龍の龍砲まで絶対弾丸見えないのにタイミングとか狙いとか読み、回避していく。おそらくかつて一緒に行動していたことがあったルクレツィア・ノインと同じぐらいだとヒイロは感じていた。

「では、速瀬。日本の『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』の違いを分かりやすく言え」

「はい。私たち倉持技研で作った『打鉄』は安定した性能を誇るガード型で、初心者にも扱いやすいように作りました。今でこそ、多くの企業並びに国家、そしてES学園においても訓練機として一般的に使われていますが元々は専守防衛を基礎としている我が国に合わせた機体です。一方『ラファール・リヴァイヴ』ですが特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と多様な役割切り替えを両立している点です。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています。ただし、『打鉄』と比べると安定性は低く使いにくいと言う点から性能の高い『ラファール・リヴァイヴ』と『打鉄』両方を所有するところが多いと言う事です」

と皐月が説明している間に決着がつきそうになっている。

「くっ！鈴さん邪魔ですわよ！」

鈴がセシリアの射線に被っていて、セシリアは引き金を引けない。これもコンビネーションがうまく行っていない2人を真耶が誘導したからである

「うつさい！あんだこそ邪魔よ！」

そうして二人は激突。そこへ真耶が放ったグレネードが直撃。二人は撃墜されたのだった。

「くっ、うつ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

と二人が地上で喧嘩し始める。コンビネーションのことを考えると一夏とヒイロのコンビが一番完遂しているのもし二人ならここまではならなかっただろう。コンビネーションに関してだけだが・

「これで教員の實力がわかっただろう。以後、敬意を持って接するよう」

ちなみに今の真耶の武装ならヒイロだと勝てるだろう。しかしそれは教師の面をつぶすことなのでヒイロは内心に止めておいた。それは一夏も思っていた。

この後授業に入り、一夏と箒が何かの約束をしているところをヒイロは見たが今はシャルルをただただ監視していたのだった。

授業が終わり、お昼ご飯の時間。箒にとっては初めて一夏との2人きりの昼食だと思っていた。箒は先ほどの授業の時に勇気をだして一夏を誘ったからだ。

一夏の分の弁当も作ったから屋上で食べよう　と
しかし・・・

「・・・どういうことだ」

「ん？ 天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな」

箒は不満だった。一夏が『みんなで食べた方がいい』と言ってセシリア、鈴、シャルル、ヒロ、臯月を呼んだからだ。セシリアと鈴はそんなことなくても乱入していただろうが・・・

「それにしても、さっきは凄かったなシャルル」

「え、何が？」

「何がって、雪崩のように押し掛けてきた女子達に丁寧丁寧を二条した対応だったから」

と一夏は言う。その丁寧な対応のトドメにシャルルは

『僕のような者の為に咲き誇る花の一時を奪う事は出来ません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうなのですから』

と言ったのだった。

嫌味くさくないし、本当にそう感じているようで『ノーブルス・オブリージ貴族の義務』と言つのを見たような感じだった。

ちなみに直訳すると「高貴さは（義務を）強制する」を意味し、日本語では、しばしば「位高ければ徳高きを要す」などと訳される。一般的に財産、権力、社会的地位の保持には責任が伴うことを指すのだが・・・いい意味では使われない言葉のようだ・・・

「ま、これから仲良くしようぜ。わからないことがあったら俺等に聞いてくれ。あ、ちなみにISの事はわからん」

「ったく一夏、アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ、覚える事が。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くても皆ジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね」

「でもそれは海外だけであって日本は高校か大学からなんだけどね」

セシリアの言葉に皐月が付け加える。

そう、ISに関しては女性は選択で早い段階で勉強することができると言ってもそれは女尊男非が激しい海外であって日本では工学部の機械工学や電気・電子工学を専攻している人や高等専門学校に入った人でないと勉強しないのだ。

なので一夏が最初に参考書を電話帳として捨てたのがまずかったのである。

「ありがとう。一夏、優しいね」

「い、いや、まあ、これからルームメイトにもなるだろうし・・・ついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割がもう決まったのかしら？」

「・・・部屋にソファ型の簡易ベットがあった。おそらく3人で一部屋だろう」

とヒイロが呟く。周りはそれに納得する。

「・・・それより飯にしよう。俺は飲み物を買ってくる」
「ヒイロ！あたしメロジュー」

と鈴が手を挙げながら頼む。てか飯食いながらメロンジューズはどうかと思われるのだが・・・

「・・・わかった。お前たちはいらないのか？」

「じゃ・・・粗茶で」

「私も一夏と同じで頼む」

「わたくしはアップルティーをお願いしますわ。ペットボトルのもので構いませんので」

「僕もオルコットさんと同じものを」

「じゃー私は付いて行きます」

と一夏、箒、セシリア、シャルル、皐月の順に言う。

ヒイロは皐月とともに自販機にいつて飲み物を買う。その帰りに皐月は言う。

「バスターライフルなんですけど、このままだと限界があると思います。技術的に・・・」

「・・・確かに」

正直、いくら倉持技研の職員である皐月とあらゆることに精通しているヒイロを持ってしてもウイングセロのジェネレーターがあまりにも強すぎて限界が見えていた。

「今度の学年別トーナメントで俊之おじさんに頼もうかと思っているんですが」

「槇村にか・・・」

「はい・・・おじさん『光の翼計画』で強大なエネルギーの制御を行っているのでもしかすると」

『光の翼計画』・・・これは後々詳しく語られることだろう。なので今は置いておく。

ヒイロはわかったと言って屋上の扉を開けた。

「ほら、あゝん」

「あ、あゝん・・・」

そこに広がっていた光景は一夏が箒お手製の唐揚げを箒に絶賛あゝんをしているところであった。
作者から言わせてもらつと口から砂糖でも拭き出しそんな展開である。

「い、いいものだな・・・」

「だろ？ うまいよな、この唐揚げ」

「唐揚げではないが・・・うむ。いいものだ」

箒はとても幸せそうであった。皐月はニヤニヤしてヒイロはそれを見つつも何も感じず席に着く。

「一夏！（さん！）」

しかし、その行動に火がついたセシリアと鈴。自分達が作った（セシリアはサンドイッチ。鈴は酢豚）を一夏に向けて突き出している。屋上はすでにカオスと呼べるような空間に成り果てていたのだった。

今日一日の授業が終わり夕飯を終えた後、ヒイロ、一夏、シャルルは部屋に戻ってきた。

「……シャルル……お前は俺が使っていたベットを使え。俺は今から布団をもらってきて簡易ベットで寝る」

ヒイロはそう言って部屋を出ようとする。しかし、そこでシャルルが止める。

後から来た身としてベットが譲られるのが遠慮したんだろう。シャルルが何か言おうとする前にヒイロが顔を見て話す。

「気にするな。一夏……シャルルと茶を飲んで待っててくれ」

そう言ってヒイロは廊下に出て行った。

ヒイロは考える。それは今日入ってきた転校生の事だった。

（ラウラ……アイツのあの目はかつての俺と同じだ……戦うことに疑問を持たない者の……そして……シャルル、あの動き……明らかに何かで胸を縛っている動きだ）

本来ならわからない微細な動きでもヒイロの超人的な洞察力をもつ

てすれば気づくことができたのであった。

（シャルル・デュノア・・・奴はおそらく女だろう。何の目的でこのような形で入学したのか・・・聞き出す必要があるかもしれん）

性別を偽ってまでの入学。それは通常ではありえないことである。何か特別な任務があると考えていいだろう。

しかし、ヒイロはシャルルに聞き出すことができなかった。なぜならシャルルが女だと言う確実的な情報がないからだった。

（かといって今のままで行動を起こすとカトルの二の前になる可能性が・・・）

そう言つてヒイロは苦虫を噛んだような顔を他の人にわからない程度です。そうガンダムパイロットが忘れることができない事件。仲間のひとりのカトル・ラバーバ・ウィナーが実は女と言う二セ情報で残りのメンバーが翻弄され、最終的にはカトルがブチ切れ、暴れまくなると言う忘れることができない出来事があつたからだ。なにせカトルと比較的仲のいいトロワ・バートンさえも『カトル・・・元の優しいお前に戻つてく　グハア！』と言つた感じで顔を殴られていたからだ。そして普段叫ばないカトルが『ボクハ男ダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』と叫ぶと言つたことが起こつた。

シャルルはカトルに雰囲気似ていたのでどうも追求ができないでいた。

（フランス政府の国家代表候補生リストに名前がなかった。またフランス国籍のデータベースで写真検索をかけても出てこなかったことを考えると・・・意図的に消された可能性がある。やはり、確定するためにもさらに判断材料が必要だ。しかし・・・）

だがヒイロはいままでこんな任務をしたことがない。男か女か調べると言うものだ。いかにばれず、かつ確率的に判断できるか・・・思い浮かばなかった。

ヒイロは携帯を見る。そう・・・他の誰かに方法を聞こうと考えたのだ。こういうことは一般人の方がいいものを持っていると判断した結果だった。

（学校内の人に聞くと俺が調べていることがばれてしまう。ここは・・・）

そうしてヒイロは携帯の連絡先に目を落とすのであった。

第13話 転校生（後書き）

よう！！初めての奴が多いと思うけど、自己紹介しとくぜ。
逃げも隠れもするが嘘はつかないデュオ・マックスウェルだ。

今回、話が途中で終わったと思う。そう電話をしようとしあつとこ
ろでな、実は、今回は以下の3つからこれだと思つものを選んでこ
の先の展開を決めてほしいってわけよ。選択肢はこれらだ。

？五反田 弾に電話する。

？相生 裕子（5話に登場した日常のキャラ）に電話する。
？やはり一人で考える（あるキャラとの会話イベント発生）

期限は23日の午前0時までだ。

応募方法はメール、あるいは掲示板で頼む。おおっと！！掲示板の
場合、感想とはわけて投稿してくれよな。掲示板アンケートは予測
されないよう確認次第消去するからな。

選択肢でどのような事が起こるかは読んでからのお楽しみだぜ。
ちなみにこう言う機会は今後もやる予定だからドシドシ参加よろしく
な。

それじゃ、これからよろしく頼むぜえ

第14話 シャルル・デュノア（前書き）

今回はできが悪いです。がそれでもよろしければ感想をお願いします。
ちなみにアンケートの結果は？でした。なのでそのような展開にな
っています。が少し変わっています。

第14話 シャルル・デュノア

ヒイロは携帯の連絡帳を見る。

そこに載っている名前はかなり少なかった。一夏や箒、セシリアに鈴、皐月、本音と学園の人間がほとんどだった。それらを除いて連絡が取れるのは2人だけだった。

一人は一夏と一緒にバイトをしていた『五反田 弾』

もう一人はヒイロとたまたま知り合い連絡先を交換、時々メールを出し合っている女子高生『相生 裕子』

だけだった。ヒイロはとりあえず、裕子に電話をかけることにした。

『もしもし』

「俺だ。裕子」

『ヒイロさん！？めずらしい、電話なんて！？』

『ゆっこ？誰と話してるの？』

『みおちゃんがこの間『五所蹂躪絡み』をしたヒイロさんだよ』

『……ゆっこのお友達？』

どうやら裕子とその友だち、長野原 みおと水上 麻衣とお泊り会をしていたようだった。

ちなみに……『五所蹂躪絡み』とは……かの有名な バスタ

ーの事である。

「裕子、俺の相談に乗ってほしい」

『えー！なにになに？どんなの？』

「……男か女が分からない奴がいる。どうやったらわかるか？」

『うーん……』

と裕子は考え始める。そして……

「久しぶりだな・・・弾」

『その声・・・ヒイロか！？元氣していたか！！』

久しぶりに聞いたヒイロの声に弾はテンションを上げる。弾にとつてヒイロは一夏同様、かけがえのない友だからである。ヒイロはさらに本題に入ろうとする。

「ああ、弾・・・俺の質問に答えてほしい」

『急だな・・・なんだ？』

「・・・男か女か分からない奴がいる。どうやったらわかるか？」

『女かどうかって・・・お前・・・そりゃアレだろ・・・風呂を覗く』

その途端先ほどの裕子の叫び声とは違い何か破壊される音が聞こえるのであった。

それかなり長い時間・・・5分ぐらい聞こえ続けた。

そして次に電話に出たのは

『ええつと・・・お兄いはもう寝ましたので』

妹、蘭の声だった・・・ヒイロはわかったと言って電話を切ったのだった

結局、二人から情報を得ることができなかったヒイロはその後、真耶の部屋に行つて布団をもらつてきて、部屋に戻つて寝たのであった。

シャルルが転校してきて五日目の土曜日。午後のアリーナ全解放を利用して一夏はシャルルに軽めの手合わせとIS戦闘のレクチャーを受ける予定である。

ヒイロは『午前中は用事がある』と言って食堂を出た。

午前中に『デュノア社』にハッキングをかけて調べるためだ。幸い、一夏とシャルルは午前中は白式のメンテナンスとデュノア社からの連絡等があつて部屋には戻らない。ヒイロにとって良いタイミングであつた。

部屋の前まで戻つてドアノブを掴んで鍵を開ける。その時、中から人の気配を感じた。しかもかなりの手練れである。殺気を出していないしちゃんと気配も殺している。ここまで接近して初めてヒイロであつても気づかないレベルのものだった。

(・・・敵か?)

ヒイロは懷に隠し持っていた銃を取り出し、少しドアを開けて様子を見た。それだけでは様子がつかめなかったが中に人がいることは確信に変わる。そして一気にドアを開けて銃を構える。ドアが開く音が響き、そしてそこにいたのは・・・

「お帰りなさい、ア・ナ・タ(はあと)」

胸元がハートマークのエプロンを裸で着ていて手にはお玉を持ったIS学園最強の生徒会長・・・更識 楯無だった。

ヒイロはとりあえずドアをさっきと同じ速度で閉める。そして拳銃

をしまい、代わりに携帯を取り出す。そしてカメラモードを起動したからもう一度ドアを開ける。

「ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

と楯無が言ったところで写真で取る。そしてそのまま携帯をいじり始める。

楯無は嫌な予感を感じてヒロに尋ねる。

「え・・・何する気？」

「お前のさっきの写真を裕子とみおに送信する。前から『IS学園ってどんなところですか？』って聞かれていたから」

「ちょー！そんな写真送らないで！！」

と言つて携帯を奪い取る。さすがに他校の人間に見られるのには羞恥心があつたようだ。

「・・・・・・・・楯無・・・俺は今、やらないといけないことがある。邪魔を・・・」

「シャルロット・デュノア」
「・・・・・・・・」

「それが彼女の本当の名前よ。理由はおそらく、会社からあなたと一夏くんのデータを盗むことでしょうね。あなたがこつちの世界に来る前のデータが家にあつたから調べることができたけど、ものの見事に消されてたわね」

と楯無は携帯の写真を消してヒロに返しながら言つた。
ヒロはやはりと思った。シャルルが女であつて、理由は自分たちのデータを盗むことであることに。それは『デュノア社』とフランスが抱える問題が原因であることもわかつていた。しかし・・・

「……おそろくマーシャル・デュノアはそれだけではない」
「どうして？」

「もし、データを盗むだけなら……俺のような奴らを使えばいい。
なのに素人のシャルルを使ってきた」

「たしかに……」

「裏がある。それもマーシャル・デュノア……シャルルの実の父
のみが隠している真実が……」

ヒイロはそう言って部屋の机に座り、パソコンを起動させる。そして恐ろしいスピードでキーを叩いて行く。その様子を裸エプロン（実際は水着を着ているが……）

「……簪とはどうなった？」

「ん？最近すれ違ったら挨拶するようになったわ。こっちから挨拶するようにしたらそれだけで声が聴けるようになるなんてあゝ」

楯無がクネクネし始める。いかに変態が見れはわかるであろう……それを無視してヒイロは作業を続ける。そして……

「『デュノア社』のメインコンピュータにアクセス成功……最重要ファイルのロック……解除」

楯無を恐怖を感じていた。開始して10分でIS企業の最重要ファイルを開いたのだから。もちろん、一人アリスは3分ぐらいでやってのけるが……

そしてヒイロは一つのファイルを見つけ、データを落とす。

それは……シャルロットも知らない父の真実を語った日記だった。

「えっとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだね。知識として知っているだけじゃ、近接格闘オンリーの一夏のISでは勝てないよ。さつきも間合いを殆ど詰められなかったでしょ？」

「うつ……、確かに瞬時加速も読まれてたしな……」

「一夏の瞬時加速は直線的だから対処されやすいんだよ。あ、でも無理に軌道を変えようとすると最悪骨折しちゃうからね」

時刻は午後になり、ヒロや一夏はいつものメンバー（皐月は倉持の用事で不参加）で訓練をしていた。

シャルルの説明は本当に分かりやすく、一夏は感動していた。ちなみに今までの自称コーチの方々の説明はこんな感じだ。

『こう、ドン！としてガッ！ときてドガンツガキン！って感じた』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。はあ？何で分からないのよバカ』

『そこで急停止して身体を左に十度傾けてから右方向へ旋回軌道ですわ』

自信満々でこう言うのである。教えてくれるのは有難いが分からなければ意味が無いのだ。流石にこれらを理解するのはきついものがある。一番マシなのはセシリアだと思うが……

ヒロは

『戦って感じ取れ』と助言することなくただただ模擬戦をし続けた。それにより一夏もかなり強くなってきたが別の問題が生じ始

めた。それはのちにわかることなので語らないことにする。

自称コーチ三人がブツブツ不満を言っているがコミュニケーション
って大切だよな・・・と思う一夏であつた。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ。調べてもらったけど拡張領域が空いてないらしい。だから
量子変換は無理だって言われた」

「多分唯一仕様に容量を使っているからだろうね」

「なんだっけ・・・」

「文字通りたつた一つの特特殊能力だよ。ISと操縦者の相性が最高
の時に発動される能力のこと。でもそれが発現するのは第二形態か
らでそれでも発現しない機体が多いからそれ以外の特特殊能力を使え
るようにしたのが第三世代型ISなんだよ」

こういう事がすらすらと出て来る辺りシャルルがどれだけ優秀か分
かる。それに同じ男子として精神的な疲労も無く話せるのは本当に
嬉しい事だと一夏はしみじみと感じていた。

「『零落白夜』がそれに当たるのか・・・」

「第一形態から発現しているのは前例がないからね。しかも織斑先
生と同じ能力なんですよ？」

千冬と同じ武器で同じ能力なのは姉弟だからでは説明つかないらし
いがそれでもなんと困縁めいているとヒイロも思っていた。

「唯一仕様の文字通りコピーできるものではないからね」

「そっか。でもまあ今は考えても仕方ないし置いておこうぜ」

「そうだね。じゃあ射撃練習を試みようか。はいこれ」

手渡されたのは五五口径アサルトライフル『ヴェント』。シャルル

のISの武装の一つだ。
一般的な武装で扱いも楽な種類である。

「あれ？他の機体の武装って使用出来ないんじゃないっけ？」
「所有者が使用許可を出したら使えるよ。今一夏と白式に許可発行したから撃ってみて」

シャルルに指導されるように射撃姿勢を取りながらメニューを開いて射撃武器とのリンクを行わせようとする一夏。だがいくら探しても見つからない。
それもそのはず、白式は格闘オンリーの機体故に備わっていないのだ。

「うーん、なら目測でやるしかないね」

シャルルに事情を説明してから一度深呼吸をして引き金を引く。その物凄い火薬の炸裂音に一夏は驚いてしまった。

「どう？感想は？」

「おう・・・そうだな・・・とにかく早いつて感じだな」

「弾丸はISよりも小さく空気抵抗が少ないからその分速いんだね。だから一夏は動きを読まれてカウンターを食らうんだよ。あ、ほら脇を閉じないと反動に負けるよ。1マガジン分撃っていいから」

これほど有意義な特訓は初めてではないだろうか。ヒロとの模擬戦も得るものが大きいけどこういうものも勉強になると肌から一夏は感じ取っていた。

「あれ程私が言ったのにな」

「あれで分からないあんたがバカなだけじゃないの」

「私の理路整然とした指導の何処がいけないのでしょうか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヒロの顔には冷や汗が見えたのは気のせいではないだろう。

一夏はあはは・・・と元氣なく笑い訓練を続ける。

「それにしてもシャルルのISってラファールとは違うように見えるけど同じ機体なのか？」

本来のラファール・リヴァイブはネイビーカラーに四機の多方向推進翼が特徴的なんだがシャルルのはオレンジで多方向推進翼が背中に一對、中央から二つに分かれるようになっておりアーマーも大分シェイプアップされていた。そして四枚付いているはずの物理シールドは全て取り外され左腕に一枚の大型物理シールドが取り付けられている。逆に右腕はスキナーマーのみだ。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいいじつてあるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。基本装備をいくつか外して拡張領域が倍にしてある」

「倍に！？・・・ちよつと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。今量子変換してあるだけでも二十くらいあるよ」

「まるで火薬庫デンドロビウムだな」

「デ・・・デンドロ？何それ？」

と思うシャルルだがそんな時間も終わりが告げられる。そのまま丁度マガジン一つ分撃ち続けた時、アリーナに変化が訪れたからだ。

「ねえ、あれ・・・」

「うそ……。ドイツの第三世代型」

「まだ本国でトライアル段階だと聞いているけど・・・」

周囲の注目の的になっている存在に全員が視線を移す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこにはもう一人の転校生であるドイツ代表候補生ラウラ・ボーデ
ヴィツヒが漆黒のISを展開してこっちに向っていた。

転校初日以来誰ともつるもうとしないどころか会話さえしない孤高
の女子。そして過去のヒロ・ユイと同じもの・・・ただの戦闘マ
シーンであつた。

「おい」

「・・・なんだよ」

ISの通信で声オープン・チャンネルが飛んでくる。間違いなく初対面の時聞いたラウラ
本人の声だつた。

「貴様も専用機持ちだそうな。ならば話が早い。私と戦え」

「断る。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

（だろうな）

一夏はそう思った。ドイツでの千冬と言ったら第二回IS世界大会
『モンド・グロッソ』の決勝戦の事だ。決勝戦の日、一夏は『謎の
組織』に誘拐された。目的も正体も不明だつた。

真つ暗な空間で拘束されていた一夏はその事を聞きつけ決勝戦会場
から飛んできた千冬によって助けだされたのだ。

千冬は決勝戦を放棄して不戦敗となり、『二回目の優勝』を逃した。

そしてその事件は闇に消えていったのだが、独自の情報網で一夏の監禁場所の情報を提供したドイツ軍に『借り』ができ、千冬は一年間ドイツで教官をしていたのだった。つまり事件の全容を知っているのはドイツ軍だけ。

一夏は後から考えてそこに答えをたどり着けた。このことはヒイロも知らないことだった。

「貴様がいなければ教官の大会二連覇という偉業が成し遂げられたのは容易に想像出来る。故に私は貴様の存在を許さない」

千冬の経歴に傷を付けたのが許せないのだろうがそれは一夏も同じで無力だった自分が許せなかった。きっと誰よりも一夏本人が一番この事件で自身が許せなかったんだろう。

（だがそれでも俺とラウラと戦う理由にはならない）

一夏はそう感じていた。なのでラウラに言った。

「また今度な」

「ふん。ならば戦わざるを得ないようにしてやる！」

刹那、ラウラのISの肩の大型レールカノンが火を噴いた。

去ろうとしていたから後ろを振り向いていた一夏には回避が間に合わなかった。

しかし、

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようだなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

けたたましい金属音が響いた。シャルルがおで物理シールドをコ

ールし、レールカノンを防いだようだ。さらに、六十一口径のアサルトライフルを二丁コールし、銃口をラウラに向けた。その時間わずか0。5秒で武装を切り替えた。

「貴様……^{アンテイク}第二世代型で私に挑もうというのか？」

「未だ量産の目途が立たないドイツの第三世代型^{ルキ}よりは動けるだろうからね」

シャルルとラウラの間に火花が飛び散り、一触発な空気が漂う。そしてラウラがもう一度レールカノンを発射しようとする。ここで戦闘を行おうと言うのだ。シャルルはまさかの展開に間を詰めようと動こうとする。しかし……

「……そこまでにしておけ……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

白き翼が舞い、緑色のビームサーベルがラウラの目の前に突き付けられる。

「い……いつの間に……」

シャルルはそうつぶやく。ヒイロの行動の速さに驚きが隠せなかった。

「く……告死天使め……」

ラウラがそう言って間を取り、にらむ。ヒイロはその顔を見つめる。

（同じだ……あのころの俺たちと……）

とヒイロが感じていた時だった。

『その生徒、何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
アリーナのスピーカーから監督の教師の怒号が飛ぶ。

「・・・ふん、今日は引こう」

興が削がれたのかラウラはISを解除してあっさりとゲートへ去っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かった」

「そう、なら良かった。今日はもうあがろっか。そろそろアリーナの閉館時間だしね」

「おう、銃ありがとな。参考になった」

「いいよ。・・・じゃあ、先に着替えて戻ってて」

シャルルはいつも一夏達と一緒に着替えようとはしないのだ。もちろんそんなことできる訳がないのだが・・・そんなこと知らない一夏は

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

とシャルルの肩を組んで密着する。シャルルの顔が赤と青の混ざったような感じになる。

ヒイロはそれを見て、一夏に近づき、

「一夏・・・行くぞ」

「うおっ！！どうしたんだよヒイロ？」

「アレの餌食になりたいのか？」

ヒイロに腕を掴まれ引つ張られていく状態で後ろを見ると。

「一夏つてもしかしてそっちに興味が・・・」

「不潔ですわ・・・修正してやりますわ！！」

「ヒイロ、私が落とすまで一夏を上手く抑えてね・・・。」

修羅となろうとしている3人を見て一夏はヒイロと速攻で更衣室に逃げたのだった。

「はー、風呂に入りてえ・・・」

更衣室で着替え終わるなり一夏がこぼす。

学園では寮の部屋それぞれにシャワーがあるだけでなく大浴場があるのだが男が入ることに女子から反発があった。

『男子が後に入るなんてどういう風に使ったらいいのかわかりません！』

『男子が入った後なんてどういう風に使ったらいいんですか！』

と言う理由が原因だ。

一夏は日本人である以上風呂は恋しいだろう。一夏自身、風呂好き

でもあるのだから。

ヒイロは別にそこまで気にしていないので普通にシャワーをする。
風呂に入れるのなら誘われたら行く程度に思っている。

「なあ・・・ヒイロ」

「・・・なんだ？」

「・・・どうやったら強くなれるんだろうな・・・」

一夏の言葉にヒイロは考えることなく答えるために一夏の自分の方に無理やり振り向かせて言う。

「なにを・・・」

「よく覚えておけ・・・一夏・・・強者なんて存在しない、人類すべてが弱者なんだ。俺も、お前も、千冬も、箒も、鈴も、セシリアも弱者なんだ」

「・・・」

「・・・今はまだこの意味が分からないのかもしれない・・・だが覚えておけ」

「・・・ああ」

ヒイロの真剣な目を見て一夏はそう言い切った。

一夏はその日から強さとはなんなのか考えるようになった。ヒイロもまたあることで答えを探し続けているのだから・・・

「あの一、織斑君、ユイ君、デユノア君いますかー？」

「はい？えーと、織斑とユイだけです」

「入っても大丈夫ですかー？着替え中だったりしますー？」

「大丈夫です。着替えは済んでいます」

「そうですかー。失礼しますねー」

そう言ってもじもと更衣室に入ってきたのは真耶だった。

一夏は珍しいことにすぐに真耶に何故来たのか尋ねようとした

「どうしたんですか？」

「ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間帯別にすると問題が起こりそうなので、男子は週二回使用日を設けることになりました」

「本当ですか！嬉しいです。助かります。有難うございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから・・・」

一夏が真耶の手を握ってこれでもかと礼を言っている。対して真耶はいきなり異性に手を握られたのが驚いたのか顔が若干赤い。もしかして・・・ってことはないと思いたい。

ヒイロはその様子を見ていると

「・・・一夏、何してるの？先に戻っててって言ったよね？」

シャルルが更衣室に入って来た。表情はそのままだがその言葉に刺を感じる。

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

朗報（一夏にとって）に対してもそっけない返事だ。

ヒイロはシャルルが女とばれるかもしれないからのストレスと想った。

「あつと、織斑君は職員室まで来てもらえますか？白式の登録に関する書類を書いてもらうので。ユイくんはすでに倉持技研がやって

くれているので問題ないです」

「わかりました。じゃあシャルル、ヒイロちよつと長くなりそうだから先にシャワーを浴びてくれよ」

「うん。わかった」

「じゃ山田先生、行きましようか」

と言つて一夏と真耶が出て行った。ヒイロはここでシャルルにとつての真実を聞いてもよかったのだが『マーシャル・デュノアの日記』を見た今となつては女とばれる時でいいだろうと思った。なので

「……シャルル、俺は研究室に行く。先に戻っていてくれ」

「わかったよ。それじゃ、ヒイロ。また後で」

「ああ」

ヒイロは研究室にいるであろう、皐月に会いに行った。倉持からの話があるとのことと聞きに行ったのだった。研究室に入ると皐月は何かをしていた。しかもよだれを垂らしながら。

「フフフゝ新型ゝ……」

「皐月……」

「武装ゝ……ああ……早くどんなのか使つて……は!!」

「……」

その後、皐月の悲鳴が上がったのは言うまでもない。

話によると、そろそろ行われる学年別対抗戦でヒイロが出場しない

わけにはいけないのでIS学園上層部と倉持技研上層部の閣議でウイングゼロとGプロジェクトは完全に倉持のものとなりウイングゼロは試作0号機と言う扱いになった。また槇村がある細工としてエネルギージェネレータの設計図を用意したらしい。それを作っても作れない代物で事実ゼロの完成は奇跡によるもので倉持でも作れないと公表することになった。

ヒイロはそれが最善だと感じた。なので了解したという返事だけした。

「なぜこんなところで教師など!!」

「やれやれ……」

寮に向かう一本道。ふと曲がり角の先からそんな声がヒイロの聞こえてきた。

ヒイロは木の上に隠れて声の発生源の方向をみると湖のほとりで千冬とラウラが話していた。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ。」

「このような極東の地でなんの役目があるというのですか!!」

あの氷のような転校生ことラウラ「ボーデヴィツヒがここまで声を荒げているのは滅多にないだろう。ラウラは千冬の現在の仕事について不満があるようだ。

「お願いします、教官。再び我がドイツでご指導を。ここでは貴女の

能力は半分も生かされません」

「ほう。」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに値しない人間ばかりです!!」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間が割かれるなど」

それはヒイロも感じていた。自分たちが触っているものは兵器であることを彼女たちは本当にわかっているのだろうか？ラウラの言葉ももつともだった。
だが・・・

「　　そこまでにしておけよ、小娘。」

「っ・・・・・・・・」

威圧感や覇気が混じった千冬の声。さすがのラウラも口をつぐんでしまった。

ヒイロはそんな千冬を見て感じていた。千冬もわかっていたのだ。だからこと愛してやまない弟をこんな世界に入れたくなかった。少しばかりラウラに当たっているのだろう

「少し見ない間に偉くなったな。15歳で選ばれた人間気取りとは恐れ入る。」

「わ、私は・・・・・・・・」

ラウラの声が震えていた。

「わかったなら、寮に戻れ。」

「くっ……」

ラウラは悔しそうに走り去ってしまった。
千冬は溜息をつけ、木を見る。

「見苦しいところを見せたな」
「……そうでもない」

と言ってヒイロは木から降りる。

「そうか……ヒイロ」
「……」

ヒイロは呼ばれたので千冬の方を見る。千冬は少し元気のない感じの笑みで

「アイツらの事……頼む」

と言ったのだった。ヒイロはそれを聞いて、寮へ戻って行ったのだった。

寮の部屋に戻ると、一夏がシャワールームの扉の前で呆然としていた。

ヒイロはさすがに何かあったと感じ、聞いてみた。

「一夏……何かあったのか」

「・・・・・・・・・・シャルルに、胸があつた」

シャルルの正体がばれた瞬間であつた。

第14話 シャルル・デュノア（後書き）

つてことで弾だと覗き実行、裕子だとベーコンレタス本をシャルルに見せるという展開でした。そして？は楯無との会話イベントで写真パニックでした。

票数だと？3表？1票？7票でした。

今回伏線をかなり引いています。今後の展開を楽しみにしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6547t/>

IS <インフィニット・ストラトス> ~ゼロの名を持つ天使~

2011年11月26日16時05分発行